
街の事務員の日常

滝田TE

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

街の事務員の日常

【Nコード】

N5792X

【作者名】

滝田TE

【あらすじ】

とある街のとある商店に勤める新米事務員は、現代日本から異世界にやってきた頼りなさそうな男だった。

上司に叱られ、夜は友人たちと飯を食いながら笑い合い、ちょっとだけ仕事をする頼りない新米事務員。

事務員と言いつつも事務仕事の描写は殆どなく、血沸き肉踊る戦闘シーンも、陰謀に巻き込まれることも（多分）ない、ごく平和な日常を送る事務員は、今後どうなるのか。

そんな、事務員と、それを取り巻く人々との遣り取りを書いた日常モノです。

第一話 事務と魔法（前書き）

基本的に、この作品では残酷な戦闘シーンや、過激な性行為を描写する予定はありませんが、一応、今後描写の可能性のあるものとしてR-15のタグを付けさせていただきました。

また、誤字・脱字・日本語としておかしな表現等がありましたら、ご指摘いただけると幸いです。

2011/10/14追記

投稿する際、誤って種別を「短編小説」に設定しておりました。読んでくださった方、評価してくださった方、お気に入り登録してくださった方には申し訳ないのですが、一度削除し、再度「連載小説」として投稿させていただきます。

一晩経つてから気付くとか……。緊張していたとか、舞い上がっていたとか、色々言い訳はできるのですが、手違いは手違いです。本当に申し訳ありません。

第一話 事務と魔法

アルタスリーア王国一の商業都市アーセナクトに本社を構える商店の一つに、マリポーという店がある。

レンガ造りの二階建ての建物に、大陸公用語で“マリポー商店”と書かれた看板を掲げ、入り口の上には、鍋とペンを象った銅製の意匠看板を吊り下げている。

主に、日用品や事務用品を取り扱っており、他に、僅かながら隣国のルザル王国産の茶や煙草といった嗜好品も店先に並ぶこともある。要するに雑貨屋であった。

従業員は店主のマリポー・ワットの他に十三人。大半が人間族であるが、中には獣人族や妖精族と呼ばれる種族も働いている。

店内部署は、仕入れ、流通、販売、在庫管理、事務に分けられ、仕入れは主に店主のマリポーとその息子ブルソーの二人が担当し、流通は人間族・獣人族合わせて五人、販売には人間族・妖精族合わせて三人、在庫管理には人間族・獣人族の二人、事務には人間族が二人といった配属になっていた。

アーセナクトに限らず、アルタスリーア王国には人間族以外の種族も多い。

猫人族、犬人族、鳥人族、狼人族、虎人族、獅子人族といった獣人族。

土の妖精族ノーム、岩と金属の妖精族ドワーフ、森の妖精族エルフ、草原の妖精族ハーFRING、水辺の妖精族ピクシー、海の妖精族ネレイド、街の妖精族ブラウニーといった妖精族である。

獣人族は妖精族に比べ、環境適応性が高いのか大抵の街に何れかの種族が暮らしているが、妖精族はその属性により、街によって住んでいる種族が偏る。

西の工業都市アーラドルにはドワーフやブラウニーは居るが、エ

ルフヤネレイドは殆ど居ない。逆に南の港湾都市ダリンにはピクシーやネレイドが多いが、ドワーフやハーFRINGグやハ滅多に見かけない。

街の北にそれなりの大きさの森が存在し、東には平原が広がっているアーセナクトには、ノームやエルフ、ハーFRINGグ、ブラウニート、他の街に比べ多種の妖精族が生活している。

マリボーの店に勤めているのは、犬人族が二人、鳥人族が一人、エルフ族が一人であった。

事務室の扉を勢い良く開けながら、極々簡素な白いシャツと草色のズボンを履いた犬人族が入ってくる。

「おい、シュー。アーラドルからの商品が届いたぜ。中身と数量は確認済みだ」

人間と同じく二足歩行で、体型も人間と殆ど変わらない。体つきは鍛錬を重ねた人間の剣士のように機能的な筋肉質で、その体躯を茶色の毛皮が包み、ズボンの尻の辺りに開いた穴から同じ色の毛に覆われた尻尾が生えていた。

また頭部は人間のそれとは違い、その名の示す通り、犬の頭が乗っていた。

事務室で忙しそうに木箱を抱えて歩き回っていた人間族の男性に歩み寄る。

「で、コイツが納品板」

男性の傍で立ち止まると、犬人族はそう言いながらズボンのポケットから一枚の手の平サイズの金属板を差し出しながらそう告げた。

「ああ、ご苦労様ですゼリガさん。イルーさんには、こちらから在庫板を渡しておきますね」

シューと呼ばれた男性は、犬人族の名前を口にすると笑顔で応える。

柔らかな笑みを湛えた、纏まりの悪い黒髪に黒い瞳の人間族の男性は、身長こそ頭一つ分ほどゼリガより高いが、体つきは良く言えば細身、悪く言えばひよる長く、力仕事とは無縁のように見えた。

青年と言うには言動がやけに落ちており、壮年と言うには線の細さやどこか幼さの残る顔つきが気になる。

その長身を、紺色長袖の木綿の上着に前掛け、上着と同色の長ズボンで包んだ男性は、受け取った金属板より二周りほど大きな金属板を、机の端に置かれていた木箱から取り出した。

「すみません、ソーンリヴさん。お願いしていいですか？こちらが納品板と在庫板です」

ゼリガから受け取った納品板と自分の机から持ってきた在庫板、二枚の金属板を持って、シューは隣の机で作業していた人物に話しかける。

深い藍色の髪を肩口で刈り揃え、髪と同じ色の瞳の目はややきついものの、怜悧な顔立ちをした人間族の女性で、シューと同じ紺色長袖の上着に前掛け、同色の長ズボンという出で立ちである。

おそらくこれが、この店での事務員の制服なのだろう。

「分かった。……しかし、いい加減なんとならないのか？シューウイチロウ」

片手で作業しつつ、後輩事務員から金属板を受け取ったソーナリヴと呼ばれた女性は、作業を止めることなく視線だけを傍に立つ男に向けた。

人間族の女性にしては少しばかり凹凸……特に凸の乏しい体つきと、堅苦しい口調が、飾り気のない制服と相俟って、男性的な雰囲気を彼女に纏わせている。

年齢はシューだのシューイチロウだのと呼ばれている人間族の男より三〜四歳年上に見える。

「ええ、私としてもなんとかしたいんですけどね……」。

幾度か魔法院にも相談に行ったんですが、どうも私には魔術の素質がないようでして。

かと言って、術石を使うにも、値段的にとてもじゃないですが私の給金では気軽に買えそうにありませんし……」

ははは、と苦笑し頬を指で掻きながら、彼は言葉を続ける。

「やはり、私が異世界人だからでしょうかね。」

魔法院の導師様にも、普通の人間にあるはずの魔術の素質が、体内に存在しないというのは有り得ないとまで言われましたから」

「有り得ない……ね」

彼女からしたら頼りなさげな笑いを浮かべている同僚に、何か言いたいことでもあるのだろうか。

ふんとばかりに鼻を鳴らして、受け取った二枚の金属板を机の上に並べた。

「ま、あんたらが言うところの獣人族である俺らにも、多少の魔力

はあるからなあ。お前さん、ある意味竜族よりも珍しい存在なんじやねえか？わはははは！」

人間族二人の遣り取りを聞いていたゼリガが、豪快に笑う。

「まったたく……。」

毎度毎度思うけど、うちの雇い主は何のつもりでこんなのを雇ったのやら。これじゃ私一人で事務やってるのと変わりゃしない」

ソーンリヴは愚痴を零しながら、二枚の金属板に片手をかざした。すると、納品板に刻まれていた二つの数字のうちの一つが消え、その空いた場所に『受領』を表す文字が新たに刻まれる。

同時に、在庫板にずらりと並んでいる様々な商品のうち、一つの商品の数字が、納品板から消えた数字の分だけ増加し、商品名の横に『入荷』を表す文字が浮かび上がる。

この店だけでなく、アルタスリーア王国内で一般的に使われている魔法を利用した出納板である。

『明かり』や『発火』といった初歩魔法よりも少ない魔力で、記入・消去・書き換え・数値管理が出来る代物であり、小売業だけでなく問屋業も行つ商店には必ずと言っていいほど見かける事務用品である。

この世界に生を受けた種族であれば、大小の差はあれ魔術の素質、即ち魔力を有しているため気軽に扱える出納板も、魔力を持たないシュウイチロウ……地球という惑星の日本国出身である安来修一郎やすきしゅういちろうには扱えないのだった。

「はい。じゃあシュウイチロウ、後は任せたよ」

納品板は『確認済み』と書かれた専用の木箱に納め、在庫板だけ修一郎に戻しながら、ソーンリヴは自分の机に向き直ると作業を再

開した。

「ありがとうございます。」

あ、ゼリガさん、ダリンへの荷はもう出ましたよね？」

ソーンリヴから在庫板を受け取って礼を述べると、何かに思い当たったように修一郎はゼリガに尋ねた。

「おう、ダリンの荷は昼一で出発したぜ？なんだ？何か積み忘れてもあつたか？」

修一郎の言葉に、ゼリガは怪訝な表情を浮かべながら問い返す。

「いえ、積み忘れはありませんよ。」

では、ゼリガさん。アーラドルからの荷物を倉庫に運んだら、今日はもう上がっていただいて結構ですよ。」

犬人族は猫人族や虎人族などに比べ、表情が豊かで、感情の起伏も人間のそれと大差ない。

当初は戸惑っていたものの、今では修一郎もこの気さくな犬人族と接することができている。

「ん？そりゃ有難いけどよ。王都からの荷はどうするんだ？アレも今日到着予定だろ？」

「ああ、それについては先ほど“社長”から言伝がありました。」

白出納板と羊皮紙の仕入れ数調整に手間取って二日ほどずれこむそうです。」

白出納板とは種類分けされてない、所謂まっさらな出納板のこと

だ。

これに簡単な魔法を付与することにより、出納板、納品板、在庫板、売上板と、それぞれの性質と機能を与えることができるもので、修一郎の世界で言う補助簿に近い。

ちなみに、金銭出納簿と、修一郎の世界で言うところの預金出納簿にあたる資産出納簿、売掛・買掛簿は、市販の羊皮紙製を使用することになっており、こちらは修一郎とソーンリヴが分担して記入した後、主人であるマリポーに、週に一度確認してもらい検収済みであるサインを書き込んでもらうことで、一連の作業は一区切りがつくようになっていく。

「お、また向こうの言葉かい？確かシャチョーってのは店の主人とか一番偉いヒトって意味だよな？」

「覚えたぜ？と言わんばかりの表情でゼリガが修一郎に笑いかける。

「まあ、そんなところです。どうにもこの店の規模からして個人的に社長と呼ぶのが一番しっくりくるもんで、つい。」

「店長とお呼びするには店が大きすぎますし、私は秘書でも召使でもないので旦那様というのもちょっと……。」

「ヒシヨ？これまた新しい言葉だな。ヒシヨってなあどういう意味だ？」

「ああ、また。気をつけてるつもりなんですけどね、いかなあ。秘書というのはですね、その組織の長または組織全体を補佐することを専業とする役職……貴族で言うと執事、国で言うと宰相に近い感じでしょうか」

「厳密に言うと三割方正解で七割方間違になるのだが、修一郎は

元の世界での実際の秘書の扱いを思い出してかなり大雑把に説明するに止めた。

この世界には、元々会社という概念がないうえ、修一郎たちのような事務員という職業自体もここ数年で耳にする機会が増え始めた状態である。

これからもつと人口が増え、商業が成熟して有形無形に関わらず今まで以上の多種多様な商品や情報が取引されるようになり、組織が複雑化すれば、自ずと秘書や専務といった役職も生まれてくるのだろうが、現段階では何処の商店や組合にも秘書という役職は存在しない。

「へえ。宰相様ねえ……。ま、確かにうちの店じゃそんなお偉い肩書きのヒトはいらねえわな」

そう言って再び笑うゼリガだったが、これは思うところがあったわけではなく、単純にアーセナクトに数ある商店の中での、マリボ―商店の規模を考えてのことだろう。

「まあ、私もあの雇い主のことを旦那様とは呼びたくはないな。悪い人じゃないんだが……」

二人の会話を聞いていたソーンリヴが作業の手を止めないまま、会話に加わる。

「それはともかく、シュウイチロウ。アーオノシユの荷物の件は、私は聞いてないぞ？いつ、連絡があった？」

「あ、すみません、ソーンリヴさん。実は先ほど昼食から戻る際に、店先でちょうど早伝役そうでんえきの方に会いまして」

早伝役とは魔法院が国からの要請を受けて、公的に行っている業務で、『伝達』の魔法が付与された『伝達板』を利用した遠隔地との意思疎通を可能にするものだ。

ある程度魔力を有する者ならば、独自で『伝達』を使うことができるが、一般市民にはそこまでの魔力を持たない者が殆どであるため、魔法院がその代行を請け負うことになっている。

ただし、誰でも利用可能というわけではなく、騎士団、警護団、医術士、王都若しくはアーセナクトに本拠を構え且つ総従業員が二十人を超える商人、アーラドル、ダリンに事務所を持ち総従業員又は団員が三十人を超える工房、組合にしか利用は許可されていない。

利用許可の登録は、規定の書式に必要事項を記入し、申請費用を魔法院に納付すると、専用の伝達板が作成されて登録済みとされる。

その際、最低二名の使用者を登録し、登録された者以外は使用できなくするための魔法が掛けられる。

基本的には伝達板は二枚になるのだが、追加料金を納付すれば三枚以上の保持が可能となる。

ただし、この伝達板は一年で効力を失うため、継続利用するためには毎年登録申請時と同額の料金が必要となり、その額も馬鹿にならないこともあって、本当の意味での一般市民にはあまり利用する機会はない。

また、実際に利用するにあたって、必ず魔法院直属の担当者が監視役として付く。

これは犯罪や謀略のために利用されることを防ぐためだ。

その担当者のことを、一般的に早伝役と呼ぶのだ。

そして、伝達板は早伝役立会いの下でないと発動できない仕組みとなっている。

そのため、連絡が入ったその場に偶然早伝役が居たりしない限りは、利用者はわざわざ魔法院か早伝役駐留所まで出向かなければならなかった。

それでも早文や早馬を使った連絡方法に比べれば、信頼性や所要時間の短縮などの恩恵に与ることができる早伝役は、それなりに利用されているようだ、

このあたりのシステムは、修一郎の居た『元の世界』では電話や携帯電話に相当するものなのだろうが、システムの簡略化に関してもう少しなんとならないのだろうか」と修一郎は思っている。

「ああ、伝達板は今週はシュウイチロウが当番だったな。だが、連絡が入っていたのに呑気に昼飯食ってたのか？」

理由を聞いて、ソーンリヴは納得したが、その後の修一郎の行動を疑問に思ったのだろう、少しだけ口調に叱責の気配を滲ませて問い掛けた。

「もちろん『至急』の表示があれば、すぐさまこちらから早伝役を探したでしょうけどね。」

何も表示がなかったもので、一度事務所に戻ってからと思いましたが

「で、運よく店先で早伝役に出会えた」と

「ええ。どうやらウチの店でお茶を買われた帰りのようでした。」

結構ちよくちよく寄ってくださるそうで、お得意様のようでしたよ。」

何が可笑しいのか、笑みを絶やさぬまま聞いてもいないことまで説明する修一郎に、ソーンリヴは眉間を親指と人差し指で摘むように押さえながら、先ほどよりもトーンを落とした声で呟く。

「そうじゃなくてだな……。」

なんで上司の私が何も知らなくて、新入りのシュウイチロウが指示を……………はあ……………もういい」

「まあまあ、ソーンリヴも細かいことに拘るなって。

俺らが帰っちゃう前に“シャチョー”からの指示も分かったことだし、それでいいじゃねえか」

取り成すように割って入ってきたゼリガの言に、ソーンリヴもこれ以上は時間の無駄だとばかりに、片手を挙げると手のひらを振った。

「分かった分かった。さっさと倉庫に行ってイルーに在庫板渡してきな。

流通はこれで上がりだろうけど、他はそうじゃないんだからな」

そう言いつつ、何かに思い当たったようにソーンリヴは修一郎を睨む。

「まさか、この件以外でも何かマリポーさんから指示が出てるんじゃないだろうね？」

普段から目つきの鋭い印象のあるソーンリヴの表情が、さらに陰しさを増す。

「いえ。社長から承った指示は流通部門に関してのみです。

他は通常どおりに勤務するようにと……………」

「そうか。じゃあゼリガ、あんたは他の流通の面子にそのことを伝えておいてくれ。

倉庫への搬入が終わったら一度事務所に顔出してくれよ。勤務表

に書いとかないといけないからね」

「了解だ。んじゃ、シユー。行こうぜ」

「はい。」

では、ソーンリヴさん。ちょっと倉庫まで行ってきます」

「はいはい」

面倒臭そうに応えながら、既に先輩事務員は自分の作業に集中すべく、机の上の各種金属板と羊皮紙製の帳簿に向き直って、忙しく手を動かしていた。

事務室を後にしたゼリガと修一郎は、従業員用の狭い通路を通じて店舗裏にある倉庫へ向かった。

小売業だけでなく問屋業も営んでいるマリポー商店の倉庫は、天上、奥行きも広く、修一郎が働いている事務室の優に十倍の広さがあった。

壁の随所に明り取りの窓が設けられているが、それでも室内の隅々まで外光が射し込むはずもなく、全体的にぼんやりと明るい程度である。

その中を、人間族の男性と鳥人族の男性が、忙しそうに動き回っている。

倉庫の入り口に立った修一郎は、大きな声で在庫管理部門の担当者の名を呼んだ。

「イルーさん！アーラドルからの荷が届きましたー！搬入を始めますが宜しいですか？」

名前を呼ばれた鳥人族が、倉庫の隅から文字通り飛び上がると、その特徴である背中の中翼を羽ばたかせこちらにやってくる。

「……遅かったな。荷物は疾うに到着していたのではなかったか？」

ゼリガと同じ白のシャツに、こちらは水色のズボンを履いている。犬人族とは違い、背格好も顔つきも人間とまったく変わらない鳥人族だが、性格はあまり社交的とは言えず、感情も表に出すことは滅多にない。かと言って他種族と交流を持たないかと言えば、そうでもない。必要最小限の社交性は持ち合わせているようである。

これが虎人族になると、そうはいかない。他種族から『孤高の種族』と揶揄されるように、己が種族以外とは殆ど交流を持つとしないのだ。その性格からか、狼人族を街中で見かけることはまず、ない。

精々が、冒険者または探鉱者と呼ばれる連中がたむろしている酒場で極々たまに見かけるくらいだ。

「ええ。まあちよつと。」

すぐに搬入していただきます。ゼリガさん？」

実に日本人らしい曖昧さで言葉を濁しつつ、修一郎がゼリガを見遣ると、心得たとばかりにゼリガは建物裏の荷卸し場へ向かって駆け出して行った。

「それから、これが在庫板です。アーラドルからの、筆器具類、顔料、銀製食器、木製食器類になります。」

月末が近いので、入荷量はそれほどでもないようです」

修一郎は小脇に抱えていた金属板をイルーに差し出すと、鳥人族の男は真面目な顔でそれを受け取った。

くすんだ金髪を短く刈った、彫りの深い顔立ちの鳥人族は、出納板に薄茶色の視線を落とし、商品名と入荷数を確認する。

年齢は三十一歳と聞いているが、修一郎からすると十ほど年上に見える。

「了解した。先ほど販売部門から顔料の蔵出しを頼まれたところだ。数量の調整をやっておいてくれ」

淡々とした口調で、そう告げられた修一郎は、先ほど事務所でのインリヴに見せた情けなさそうな苦笑を再び浮かべ、イルーに告げる。

「そのことなんですが、すみません……」。

私は出納板全般が扱えないので、イルーさんにやっていただけると非常に助かるのですが……」

「ああ、そうだったな。すまない。

分かった、私のほうでやっておこう」

「お手数をおかけします。

その代わりと言ってはなんですが、その顔料は私が“表”まで運んでおきますよ」

「では、頼む。

在庫板はその休憩用長椅子の上に置いておくから、帰りに持って行ってくれ」

イルーが視線で示した先には、まさしく作業員が休憩時に使う長椅子があつた。

イルー個人の拘りなのか、鳥人族の癖なのかは分からないが、どうやらイルーは、言葉を略したり職場内での略称を使うことを良しとしないようである。

生真面目な鳥人族の男にありがとうございますと応えて、修一郎は顔料が保管されている棚へと足を向けた。

「販売部門から言われた顔料は、バンルーガ王国産の赤色と紺色を二箱ずつだ。間違えないでくれ」

「はい。バンルーガ産ですね」

何度か倉庫での作業もこなしたのだろう、修一郎は然して迷うこともなく、言われたとおりバンルーガ産の顔料が詰めである木箱の並べられた棚から、赤と紺の木箱を抜き出していく。

自分の手のひらより二回りほど大きな木箱を四つ抱えた修一郎は、“表”、つまりはマリポー商店の店頭へと向かつて行った。

従業員専用扉から、修一郎が姿を現したとき、丁度店頭には客の姿はなかった。

裏方である倉庫や事務室などに比べ、店内は十分な照明に、櫛に似た光沢を持つ木材が床、壁、天井に使われており、この店を訪れる客層に合わせた洒落た造りになっている。

店内の広さは修一郎のいた世界の単位で言うと、横幅が約5メートル、奥行きが約6メートル、天井までの高さが約2.5メートル

と、他の同規模の店と比べ若干広いと言えなくもない。

しかし、魔法を用いた間接照明を取り入れていることと、床材に木を使っていること、無闇矢鱈に商品を並べるようなことはせず、必要最小限を陳列し、雑貨店にありがちな雑然とした雰囲気を払拭したことが、店主であるマリポーが他店とは違うと自慢するところでもあった。

一般的な店では、照明はランプか術石を用いた燭台の直接照明のみであり、床材は資材として豊富であることや手入れのし易さから砂岩を使用していることが多く、商品は単純に積み上げるか並べるか、良くて棚一杯に陳列して品揃えの豊富さをアピールするからである。

マリポー商店の陳列方法に関しては、修一郎が初めて店内を見た際に、思わず洩らした一言を聞きとがめたマリポーが、試しに修一郎の言う通りに陳列してみたところ、商品自体が見易くなった・圧迫されるような雰囲気はなくなった・どことなくお洒落な感じがする等の感想が客から寄せられたため、正式採用された。

「お疲れ様です」

店内に居た販売部門の女性二人に声をかけると、修一郎は運んできた木箱を顔の高さまで揚げて尋ねる。

先ほどまで客が居たのだろうか、一人は会計用カウンターで作業しており、もう一人はそこから少し離れたところで陳列棚の商品を暇そくに弄んでいた。

二人が身に着けている衣装はこの店の販売員用制服なのだろう、淡い青の生地を基調として襟と馬乗り（後身頃の腰の辺りの部分）に緑のワンポイント、袖が白といった上着に、上着と同じく淡い青の生地で作られたストラップで統一されている。

販売員は店の顔だけあって、修一郎たち事務員が着ている地味な制服とは違い、機能性を考慮しながらも、清潔感を出すように配慮

がなされていた。

さすがに絹は高価なため、上質ではあるが木綿を使用している点に関しては事務員の制服と然程変わらないのだが。

「言われていた顔料です。赤二つに紺二つ。

レナヴィルさん、これで間違いありませんか」

二人のうち、修一郎の近くに立っていた店員の人間族の女性に声をかけた。

「あら、ありがと。イルーが持ってくるものとはかり思ってたわ。

悪いけど、そのの棚まで運んでくれるう？」

緩やかなウェーブを描く赤い髪を頂のあたりで切り揃えた、修一郎の世界で言うところのショートボブに近い髪型をした女性である。接客していないときは、茶色の瞳の半分ほどを瞼に隠すような眠そうな目で、物言いも尊大なものであったが、いざ客を目の前にすると、見事な営業スマイルを顔に貼り付け、耳に心地よい声で嫌味にならない程度に客を褒めちぎることで客の財布の紐を弛ませる。

彼女の特殊技能とも呼べるその振る舞いは、販売部門の他の二人には到底真似出来ないレベルにまで達していた。

加えて、豊満な胸に、細くくびれた腰、形の良い尻、長身であるはずの修一郎とほぼ同じ身長と、修一郎の世界であればトップモデルも充分務まるであろうスタイルは、男性客だけでなく女性客も見惚れることがあるくらいだ。

ソーンリヴ曰く、こんな中流の店でなく貴族相手の店でも充分にやっていけるだろうに。とのことである。

修一郎がレナヴィルに指示された棚に顔料を補充していると、もう一人の店員、クローフルテが近づいてきた。

クローフルテは、森の妖精族エルフの女性である。

透き通るような銀髪を腰のあたりまで伸ばし、前髪を小さな飾りの付いた木製の髪留めでまとめている。

淡い空色の瞳につり目がちの切れ長の目、すつと通った鼻筋に形の良い唇と、エルフ族最大の特徴である、長く尖った耳。

スタイルはレナヴィルほどでないにしろ、出る所は出て、引つ込むところは引つ込んでいる。

細身が多いエルフ族にしては珍しいと言えるが、世間一般に言われている「エルフ族には美男美女しかいない」との噂を裏付けるには十分な美貌の持ち主だった。まあ、飽くまでも人間族主観でのことだが。

余談だが、レナヴィルもクローフルテも、そして今日は休日となっているもう一人の店員も、販売部門担当者三人の年齢は皆不詳となっている。

長命な種族と言われるエルフ族のクローフルテはともかく、他の二人は人間族であるにも関わらず、誰に訊いても明確な答えが返ってくることはなく、本人たちも答えようとしなかった。

代わりに返ってきたのは「女性に年齢を訊くとは失礼極まりない」というお叱りの言葉と冷たい視線であった。

世界は違えど、こういった女性の反応に関しては共通しているようだ。

「手伝います」

そんな年齢不詳のエルフ族の女性は、木箱を挟んで修一郎の向かいでしゃがみ込むと、無表情で木箱から顔料を取り出し、丁寧に棚に並べていく。

「ありがとうございます、クローフルテさん」

「……マイヤック」

礼を言う修一郎に、クローフルテは無表情のまま呟いた。

「……クローフルテ・マイヤックです」

「あー、シュウイチロウ。

彼女、家名……んー、エルフ族の場合は氏族名だっけー？で呼ばないと機嫌悪くなっちゃうわよお」

二人をに気だるげに眺めていたレナヴィルが、面倒臭そうに声をかける。

接客時と平時でここまで態度が違う人も珍しいのではないだろうかと思いつつ、修一郎は素直に訂正することにした。

「すみませんでした、クローフルテ……マイヤックさん。助かります」

「……別に敬称は必要ないです。それに怒ってもいません」

“さん”付けは必要ないというクローフルテに苦笑しながらも、修一郎は宥めるように言う。

「まあ、そこは大目に見てくださいよ。まがりなりに四ヶ月も先輩なんですから。クローフルテさんは」

「クローフルテ・マイヤックです」

相変わらず無表情で修一郎の言葉を訂正するクローフルテだった。

商品の補充を終え、倉庫にて在庫板を受け取った修一郎が事務室に戻ると、仕事が一段落ついたのか、ソーンリヴが左手で右肩を叩いているところだった。

「戻りました。お茶でも淹れましょうか？」

小さく笑いながら、修一郎がそう告げる。

「ん……？そうだな、頼む」

そう言って、ソーンリヴは眉根を寄せると修一郎を凝視した。睨まれた修一郎は、微かに首を竦めながらも事務室内に設けられた小さな流しへと足を向ける。

「それ程遅くなっただつもりはないんですが……。すみません」

流しの近くにあるランプから焚きつけ用の小枝に火を取って、小型の簡易竈に向かう自分を凝視したままのソーンリヴに、謝罪の言葉を口にする修一郎。

修一郎の謝罪に一瞬何のことか思い当たらなかったソーンリヴだったが、少し考えて部下である修一郎が言わんとしていることを理解して、訂正する。

「別に怒ってなどいないが？」

「……ああ、悪い。睨んでいたわけじゃない。少しばかり目が疲れただけだ」

「そうでしたか。そういえば最近、ソーンリヴさんちよくちよく疲れ目だと言ってますんか？」

竈にやかんをかけ、ポットに茶葉を入れながら、振り向くことなく修一郎が問い掛ける。

修一郎から視線を外し、上を向いて目頭を指で揉んでいたソーンリヴは、その仕草を続けたまま、口の端を少しだけ吊り上げて答えた。

「そうだな。誰かさんのおかげで余計な仕事も増えたからな。おかげで私の目は悪くなる一方だ」

「それはいけません。医術士に診てもらったらどうです？」

あとは、目に良い物を食べるとか。たしか、ニンジンやカボチャ、レバー、チーズ、ブドウあたりが良かったはずですよ。

……あ、それとブルーベリーも目に良いとか言ってたかな……ただ、こつちの世界にあったかどうか……」

ソーンリヴが半分皮肉、半分冗談で言った台詞の前半部分を見事に聞き流して、修一郎は上司の心配をする。

実際のところは、修一郎が来たことで増えた仕事など殆どない。

魔法を使う作業を任せられないだけで、それ以外の仕事に関しては修一郎は修一郎はそこそそ役に立っている。

むしろ、それまでソーンリヴが一人でこなしていた雑事を修一郎に割り振ることで、彼女自身の仕事は捗っていると云っている。

「疲れ目程度で医術士なんぞにかかれるか。馬鹿高い診察料と紹介料を取られて調薬士に回されるのが落ちだ」

修一郎の天然ボケにも既に慣れたのか、皮肉が通じなかつたことを気に留めるでもなく、藍色の髪をわずかに揺らしながら先輩事務員は天井に顔を向けたまま答える。

医術士とは、魔法と医学全般及び薬草学を修めた者が就ける職種で、王国と魔法院、双方の許可がないと医術士とは名乗れない。

調薬士とは、初歩医学と薬草学を修めていれば、所属する都市の市長の許可のみで開業することができる。

前者はその資格を得る条件の厳しさから、王国全体でも十数人しかおらず、王都や各都市はまだしも、地方の小さな街や辺境の村となるとまず見かけることはない。

また、医術士は、各分野の知識と技術と、難関を潜り抜けたという多少と言うには大きすぎるプライドを持つ者が多く、治療代金が高額であるのが常であった。

だが、身体の部位欠損や重篤の患者もほぼ完治させることができるため、その分治療代が高いのも仕方がないと言われているのも事実である。

後者は、薬草に関する知識があれば、後は簡単な医学に関する講習を受けるだけで開業できるため、王都や各主要都市はもちろん、地方都市や小さな街にも大抵二〜三人はいる。

極端なことを言えば、その辺りの薬草摘みの娘が調薬士組合に行つて講習を受け、市長の署名の入った許可証を受け取れば、その日から調薬士になれるのだ。

そういつたことから、街には何人もの調薬士があり、開業までの手間の少なさや要求される知識の程度、他の調薬士との価格競争、あと少しばかりの調薬士本人の良心から、治療代金は庶民が利用できるレベルに抑えられている。

重い風邪や、骨折、軽度の裂傷や打撲であれば、大抵の者が調薬士を頼る。

「それに、ニンジンやカボチャはともかく、レバーは臭いがダメだ。チーズはあの歯触りが好きじゃない。」

そしてブドウは時季じゃない」

漸く目頭を揉み解すことをやめ、視線を修一郎に戻し、即答に近い早さで答えたソーニンリヴだったが、未だ視界がぼやけているのか、眉間に皺を寄せたままだ。

「しかし、よくそんなことを知っているな、シウウイチロウ。」

もしかして向こうの世界では調薬士のような仕事をしていたのか？

あと、ブルーベリーというのはどんな食べ物だ？」

「まさか。元の世界でも私は事務員をやってましたよ。普通の事務員でした。」

ただ、食べ物に関しては、本や……まあ色々なところから見たり聞いたりしただけです。」

専門的な知識があるってわけじゃないですよ」

テレビやインターネットと言っても通じないことは分かっていたので、適当にぼかしながら答える。

しかも適当に流し読みしていた中に、そんな記事があったという程度なので、もっと真面目に読んでおけば良かったかなと苦笑を浮かべる修一郎だった。

「で、ブルーベリーとは？」

先ほどの修一郎の台詞の最後は、殆ど呟きに近いものだったのだが、この目つきの悪い女性上司は確りと聞いていたのだろう、執拗に訊いてくる。

「ブルーベリーというのは、木の実というか一応果物……かな？ 灌木に小さな実をつけるんですが、色はブドウに似て、味はブドウより若干酸味が強いかつたと思います。」

私はそのまま食べるよりジャムで食べるほうが多かったですね。パンに塗って食べてましたよ。」

ですが、この国でも北のバンルーガでも西のルガルでも見かけたことがありませんから、おそらくこちらの世界にはないと思いますよ。」

自分とソーンリヴ、それぞれのカップを用意し、あとは湯が沸くのを待つだけの修一郎は、腰に両手を充てたまま、やかんを見つめていたが、視線をソーンリヴに向けて説明する。

「なるほどな。まあ、機会があれば食べてみたいものだ。」

こちらの世界にないと言われ幾分興味が失せたのか、気のない返事をしつつ、ソーンリヴは椅子にもたれるように座っていた姿勢を正して仕事を再開する。

それに合わせたかのようなタイミングで湯が沸いたので、修一郎は竈からやかんを取り上げてポットに湯を注ぐ。

湯気と共に、嗅ぎなれた茶の香りが事務室内に漂い始める。

ポットの蓋をして、茶葉を蒸らしていると、通路から何者かが歩いてくる音がした。

「ソーンリヴ。荷の運搬は終わったからよ、上がらせてもらっぜ？」

これまたタイミング良く、ゼリガが事務室の扉を開けて入ってくる。

「ご苦労さん。じゃあ流通はこれで上がり……と。今何時だ？」

薄い木板でできた勤務表に何やら書き込みながら、ソーンリヴは事務室の壁に設けられた小さな窓を見遣る。

透明感のない、曇りガラスのようなガラスが詰め込まれた窓からは、夕暮れの赤い陽射しが申し訳なさに射し込んでいた。

ソーンリヴの机まで歩いてきたゼリガは、机に両手をついた格好で、ソーンリヴの手許を覗き込みながら答える。

「ちょっとばかり前に親鐘三つに子鐘四つ鳴ったから、子鐘四つ半つてとこじゃないか？」

「分かった。親鐘三つに子鐘四つ半にしとくよ」

「おいおい……。自分で言っというてなんだが、いいのかよ。そんな適当で」

「構わんさ。店主直々に上がっていいと言われてるんだらう？」

子鐘一つもない差なんて気にするほどのことでもない」

そんな会話を交わしているゼリガとソーンリヴの前に湯気の立ったカップが置かれた。

「今から休憩でお茶でも飲もうってことになってたんですよ。ゼリガさんもどうですか？」

そう言っって柔らかな笑顔を浮かべた修一郎は、自分のカップと一緒に持っていたものを先輩事務員に渡す。

「あとこれはソーンリヴさんに。しばらく目に当てておくといいですよ」

そう言って渡されたのは、沸かしたお湯の残りで温めた小さなタオルだった。

第二話 晩飯と新商品

商業都市アーセナクトの中心部にある、市庁舎の親鐘が低く、だ
が遠くまで透る鐘の音を四つ響かせた。

それを聴いて、一部の店を除いた大多数の店が、一斉に店内の照
明を落とし始める。

一部の店とは、これからの時間帯が書入れ時である酒場や食堂、
宿屋といった店だ。

また、この街には少ないが、冒険者や探鉱者、騎士や兵士といっ
た荒事に携わる者を相手にする武具屋や雑貨屋もそれに含まれる。

この街に限らず、アルタスリーア王国では、二種類の鐘の音で住
民に時間を知らせるようになっていた。

王城若しくは市庁舎やそれに類する主要建築物に付随して建てら
れた鐘楼にある親鐘が、午前零時を起点に六時間毎に鳴らされ、教
会にある子鐘が一時間毎に鳴らされる。

人々は、修一郎がいた世界のように厳密な二十四時間制で時間を
表すわけではなく、親鐘が幾つと子鐘が幾つといった言い方で凡そ
の時間を知り、それに従って生活している。

親鐘一つと子鐘五つ（午前五時）に起き出して、親鐘二つと子鐘
一つ（午前七時）までに朝食を摂り、それぞれの仕事場へ向かう。

親鐘三つ（正午）で昼食を摂り、親鐘四つ（午後六時）で仕事を
終え、夕食を摂り、親鐘四つと子鐘四つ（午後十時）に床に入ると
いった具合だ。

修一郎たちの勤めるマリポー商店も、大多数の店と同じく親鐘四
つ（午後六時）を閉店時間と定めている。

店主のマリポーの指示通り、流通部門の従業員たちは既に仕事を

終え、帰途についている。

仕入れ担当であるマリポーは、王都アーオノシユで仕入れ商品の数量調整に手間取ったため、今日は王都に滞在することになった。

もう一人の仕入れ担当であり、マリポーの息子であるブルソーは、北にある国境都市ゴステアに昨日旅立ったばかりだ。

在庫管理も既に就業後の清掃を終え、帰宅の準備を進めているだろう。

真面目な鳥人族のイルーは、在庫管理部門の責任者でもあるから、まだ残っているのかも知れない。

そんなことを思いながら、修一郎が本日分の出納板の数字を羊皮紙製の帳簿に書き写していると、事務室の扉が軽くノックされた。

返事をする待つことなく、扉から顔を覗かせたのはレナヴィルであつた。

接客用の表情ではなく、普段の眠そうな目つきで、気だるげに告げる。

「じゃ、あたしたち上がるから。おつつかれえ」

「はい。お疲れ様でした、レナヴィルさん」

「……お疲れさん」

修一郎とソーリヴがそれぞれの返事をしたところで、レナヴィルの後ろに居たのだろう、クローフルテが事務室に入ってくる。

「これ、今日の売上現金と売上板です。売掛は発生しませんでした」

相も変わらず無表情のまま修一郎に歩み寄ると、銀髪の女性エルフは、皮製の売上金回収袋と金属板を修一郎に手渡す。

「はい。ありがとございます、クローフルテ・マイヤックさん。それでは、お疲れ様でした」

「ご苦労さま」

「はい。お疲れ様でした」

軽く一礼すると、クローフルテは修一郎たちと雑談するでもなく、そのまま事務室を出て行くこととする。

クローフルテが事務室から出て、扉を閉めようとしたとき、丁度イルーが上がる場所であったようだ。

「では、私もこれで終業とさせていただきます。もう一人の作業員は既に終業し帰宅した」

クローフルテの頭越しに修一郎にそう告げると、イルーはそのまま従業員出入口に向かって歩み去った。

それを黙って見つめていたクローフルテは、もう一度軽く礼をすると事務室の扉を閉めた。

これで店内に残るのは修一郎とソーンリヴだけなのだが、事務員はこれからが一仕事である。

まだ週末ではないので、実地棚卸をする必要はないのだが、売上板、納品板、出納板、在庫板の数量チェックと、売上金の確認作業が残っている。

また、売上金と売上板、釣銭を照らし合わせて、過不足金が発生していないか確認する必要もある。

「じゃあ、さっさと済ませるぞ。

出納板は私ができるから、シュウイチロウは売上金の確認と過不足金の確認をやってくれ。

それが終わったら、記帳も頼む」

「分かりました」

出納板に関連する作業は、魔力を持たない修一郎はできない。自然と、出納板のチェックをソーンリヴが一手に引き受け、それ以外を修一郎が担当することになっていた。

出納板に手を伸ばしかけたソーンリヴは、何かを思い出したように机の引き出しから木製の勤務表を取り出すと、各従業員の退出時間を書き込んでいった。

「うーん……。やっぱり羊皮紙は書き辛いですね。あと羽ペンも」

売上金と過不足金の確認を終え、帳簿に向かっていていた修一郎が、顔を上げて独り言のように呟く。

「もっとこう……、すらすらと書けるとありがたいんですけどね」

「仕方ないだろう。シュウイチロウには記載術は使えないし、そもそも記載術用の帳簿は値段が高すぎてウチのような規模の店においてそれと使えるような代物じゃない。

それに羽ペン以外となると木ペンしかないが、あれは羽ペン以上に使いづらいぞ?」

出納板のチェックを終えて、自らも記帳作業に移っていたソーンリヴが、またかと言いたげな表情で、愚痴を零している修一郎を見る。

「分かってはいるんですけどね。」

手書きの記帳は向こうの世界でもやっていたので、それは別段苦にはならないんですが……」

洋紙と万年筆の組み合わせに比べると、羊皮紙と羽ペンはどうしても書きづらく感じてしまう。

慣れてしまえばそうでもなくなるのかも知れないが、こればかりは慣れるまで我慢……と言うより我慢して慣れるしかなく、ソーンリヴの言う通り仕方のないことだった。

そもそもが、この世界にある物品はこの世界の住人のために作られ、改良され発展してきたものだ。

そしてその住人は、多かれ少なかれ体内に魔力を持ち、魔法を操ることができる。

魔法を使えることが当たり前の世界であり、身の回りの品々や公共システム、戦に関する武具や戦術まで、魔力を使用することが前提で作られている“モノ”が多い。

その反面、こんなものにまで魔法を使わずともいいだろうと思う場面に、修一郎は何度も出くわすことがあった。

その一つに、ソーンリヴが口にした『記載術』と呼ばれる魔法を利用する羊皮紙製の帳簿も含まれる。

専用の術が施された羊皮紙に、魔力を使い文字を記載していくのだが、帳簿に手をかざして記載したい内容を頭に思い浮かべると、それが瞬時に書き込まれるため、一文字一文字書いていくより遥かに早く、記帳ミスも少ない。

ただし、専用の帳簿作成にかかる手間がそれなりに必要であるらしく、普通の羊皮紙製帳簿に比べると値段は十〜十二倍と高額になる。

記載術用帳簿一冊で修一郎が楽に一月暮らせる金額なのだ。

修一郎の世界では一冊千円前後で買える帳簿も、こちらの世界では羊皮紙製帳簿ですらちよっとした金額になる。

それ以外となると、安価な木板製の帳簿になるが、保管に場所を

取ること、強度的に不安があること、記帳に手間がかかること、そして何よりみすばらしいといった理由で、小規模の商店が経費節約のために使う程度である。

術の有り無しは別として、羊皮紙か木板か、その二種類しかない。目玉が飛び出るような高価な帳簿を使うくらいなら、普通の羊皮紙製帳簿でいいじゃないかと思うのだが、事務作業の効率化を図っているのか、単なる見栄なのか、記載術用帳簿は大規模商店では結構使われているらしい。

確かに、マリポー商店のような中規模の店に比べれば、取り扱う商品数も動く金額も、それに伴う事務処理も遥かに多いのだから、作業の効率化は経営者としても担当事務員としても必要なのだろう。

それでも、と修一郎は思う。魔法に頼らなくても作業量を減らせる方策があるのではないかと。

そんなことを考えながらも、修一郎の手は止まることなく動いている。

暫くして、全ての記帳を終えた修一郎が顔を上げると、丁度彼の上司も記帳が完了したところであった。

「終わりました」

やや疲れた声で、そう報告する修一郎に、ソーンリヴが大きな息を吐きながら応える。

「ああ、こつちも終わった。やれやれ、やっと今日の業務も終了だな」

「お疲れ様でした。後は『施錠』して終わりですね」

気の抜けた声で呑気に言う修一郎にため息をつきながら、ソーンリヴは自分が記帳した帳簿と、修一郎から受け取った帳簿をまとめると、売上金の入った皮袋を持って金庫に向かった。

金庫にかけられた『施錠』の魔法を解除し、帳簿一式と皮袋を中に収めて金庫の扉を閉めると、再び『施錠』の魔法をかける。

これも魔法を使った仕掛けで、事務員のソーンリヴとマリボー、マリボーの息子ブルソーにしか『施錠』を解除することは出来ないようになっていいる。

その間に修一郎は、事務室内の窓の戸締りや竈の火の点検を行い、「他を見てきます」と言い残り事務室から出て行った。

最終的に、店の建物全体にも『施錠』をかけるのだが、それでも荷物搬入口の施錠や窓の閉め忘れ、ランプの消し忘れなどを確認しなくてはならない。

一階部分の店頭、倉庫、流通、そして各部署の従業員控え室を一通り確認した修一郎は、二階に上がる。

二階は商談用の応接室とマリボーの個室しかなく、マリボーの個室は部屋の主が専用の『施錠』をかけているため、確認するのは応接室のみだ。

とりあえず自分ができる箇所全てを点検した修一郎が一階に戻ってくると、通路の先に従業員用出入口からゼリガとクローフルテが入ってくるのが見えた。

「どうしました？ゼリガさんにクローフルテさん。何かありましたか？」

何事かあったかと思い、小走りに駆け寄る修一郎にエルフ族の販売員が無表情のまま本日二度めの訂正をする。

「…………クローフルテ・マイヤックです」

そんなクローフルテに苦笑を浮かべながら、ゼリガは傍まで来た修一郎に説明した。

「いやあ、俺はなんでもないっちゃあなんでもないんだけどよ。

マイヤック嬢ちゃんが忘れ物したらしくてな。

出会った場所もちと離れてたし、もう日も暮れちまったから一応、な」

一応とは、夜の街中を歩くクローフルテのことを案じたということなのだろう。

国内でも治安の良い街として知られているアーセナクトでも、強盗や人攫いなどの犯罪が皆無というわけではない。

「忘れ物、ですか？」

目を二、三度瞬かせた後、修一郎はクローフルテの顔を見つめる。

「はい……。お手数をおかけしますが、どうしても今日持って帰らなければならぬものなのです。

控え室までお付き合い願えませんか」

表情からは分からないが、口調からは切実な想いが伝わってくる。余程大事な物を置き忘れてきたのだろう。

修一郎についてきて欲しいと要請したのは、忘れ物をしたのが事実であることを確認して貰うためと、自分がおかしな行動を取らないことを修一郎立ち合いの元、明確にさせるためだ。

先ほど見回った際には、テーブルや椅子の上などにはそれらしき物がなかったはずだが、修一郎は笑顔で快く引き受けた。

「構いませんよ。それでは控え室に行きましょう。」

あ、ゼリガさん。申し訳ないんですが、事務室のソーンリヴさんに建物内に異常はなかったことを伝えておいて貰えますか。

あと、ソーンリヴさんの忘れ物を取りに従業員控え室に行くことも」

「ああ、いいぜ。もうお前らも帰るところだったんだろ？さっさと忘れ物取ってこいよ」

そう言つて、犬人族の男は事務室に歩いていった。

修一郎が、無事忘れ物を見つけたクロールフルテと共に事務室まで戻ってくると、ゼリガとソーンリヴが入口で待っていた。

「よう。えらく時間がかかったじゃねえか？

あんまり二人の邪魔しちゃ拙いだろうから店に『施錠』かけて帰ろうかって話してたことだ」

にやにやと笑うゼリガに、修一郎は慌てて弁明する。

「ち、違いますよ！確認しなければならぬとは言え、販売員用の控え室は女性専用ですからね。」

見回り時ならともかく、クロールフルテさんが居るのにずかずか入るわけにもいかないじゃないですか」

実際は、閉店後に戻ってきた目的が間違いなく忘れ物であったことを確認させるために、共に控え室に入れと頑なに主張するクロールフルテと、制服などの着替えが収められている販売員専用、つまりは女性専用控え室に女性と一緒に入るわけには行かないと固辞する修一郎の間で一悶着あったのだが、それには触れない。

「……マイヤツクです」

修一郎の言葉に訂正を加えようとするクローフルテの声も、からかわれたのが分かつているのだろう、表情を変えることはなかったが、その声量は聞き取れないくらいに小さい。

やたら説明口調になってあたふたしている修一郎を横目に見ながら、ソーンリヴが呆れたように言う。

「従業員同士の恋愛にとやかく言うつもりはないが、私はさっさと帰りたいんだ。」

逢引なら外でやってもらえると助かるんだがな」

心なしか周囲の温度が下がったように感じた修一郎は、いつもの柔和な笑みを浮かべる余裕もなく、

「だから違いますって!」

と声を大にして叫ぶのだった。

その横では、クローフルテは相変わらず無表情で佇んでいた。

「『施錠』」

四人が建物から外に出て、従業員用出入口の扉に普通の鍵で施錠をした後、私服に着替えたソーンリヴがマリボー商店全体にかけられた『施錠』の魔法を発動させる。

一瞬、建物全体が淡い光を発するが、すぐにそれは消え、一見日中と変わらない様子に見えた。

実際は、前もって登録された従業員以外が『施錠』を解除しようとしたら、第三者が強引に『施錠』を突破しようとする、すぐさま街の警備団に異常を知らせる連絡が入るようになっていた。

このあたりは向こうの世界のセキュリティシステムよりも優秀そうだなあ……などと修一郎が感心していると、ゼリガから声を掛けられた。

「おい、シユー。お前さん、これからどうするんだ？」

ゼリガの問いに答えようとしたとき、市庁舎の親鐘四つに少し遅れて教会の子鐘が一つ鳴り響いた。

ふと、官庁地区にある教会へと目を向けるが、晩秋の陽は既に落ち、教会の建物は所々に小さな光の点があるだけの、ただの黒い影にしか見えない。

アーセナクト中央に聳える市庁舎や、北の居住地区、南の商業地区にある飲食街といった場所は、煌々と明かりが灯り、空から控え目に下りてきつつある夜の闇を押し返しているようにも見える。

それでも、吹いてくる風は陽光の支配から解放された喜びを主張するように冷たく、店の制服から黒地の長袖シャツに青地の麻の長ズボンといった私服に着替えた修一郎は、夜風に首を竦めながら応じた。

「そうですね。いつもの食堂で晩飯食べてから帰ります。

このまま帰っても家じゃ料理できませんし……」

どこか残念そうに答える修一郎に、

「そうかそうか！俺も晩飯まだなんだ！一緒に食うとするか！」

ゼリガが嬉しそうに修一郎の肩を勢い良く叩く。
ふと目を遣ると、ズボンから生えた尻尾も勢い良く左右に振られていた。

「ソーンリヴさんとクローフルテ・マイヤックさんもどうですか？」

勢いの良すぎる肩への連打に、苦笑を浮かべつつ顔を僅かに顰めるといふ地味に器用なことをこなしながら、修一郎は女性陣二人に尋ねる。

「いや、私は辞退するよ。まだ目の疲れも取れてないしな。さっさと寝たい。」

ああ、夕食はニンジンとカボチャのスープでも作るとするかな」

にやりと笑ったソーンリヴは、修一郎たちに背を向けて歩き出しながら「あまり飲みすぎるんじゃないぞ」との一言を残して去って行った。

「おう、お疲れさん」

ソーンリヴに向けて声を掛けるゼリガの横で、修一郎はもう一人の女性に顔を向ける。

「クローフルテ・マイヤックさんはどうします？」

あ、でも忘れ物がありますから、早く家に戻ったほうがいいですかね」

それが彼女が言っていた忘れ物なのだろう、小脇に抱えられる程度の布製の袋を両手で持っていたクローフルテは、無表情のままゼ

リガと修一郎に一度ずつ視線を向けると一言口にした。

「いえ、お付き合います」

目的の店に向かいながら、修一郎は隣を歩くクローフルテにちらりと視線を遣る。

彼女も他の従業員同様、店の制服から私服に着替えており、膝下まである長めの深緑色のワンピースを腰の辺りに巻いた布紐で縛り、その上に厚手の生地で作られた木綿製の水色のジャケットを羽織っている。

足元は、脛の辺りで折り返した布製のロングブーツという出で立ちだった。

お洒落よりも動きやすさを追求したようなコーディネイトにも見える。

ともすれば地味に見えなくもないが、深緑のワンピースにクローフルテの流れるような銀髪が映え、すれ違う人々の視線を集めていた。

表情は蠟で固めたように無表情のままだが、どこか嬉しそうに感じるのは修一郎の気のせいだろうか。

そのクローフルテを挟んで反対側を歩くゼリガは、上着だけは着替えたものの、ズボンは作業時と変わっていない。

ゼリガ曰く、犬人族は汗を掻かないから埃などで汚れない限りは、あまり頻繁に着替える必要などないとのことだった。

他愛のない会話を交わしながら歩いていると、目的地である食堂の看板が見えてきた。

周囲の店からも食欲をそそる匂いや、酒の匂いと共に客の喧騒が聞こえてきていたが、三人は迷うことなく、目指す食堂に入っていく。

「あら。シューイチロー、いらっしやい。女性連れとは珍しいわね」

店内に設置された、大小合わせて十脚ほどの木製のテーブルの間を忙しく動き回っていた、猫人族の女性が修一郎たちに気付く。

茶と灰と黒の、修一郎の世界で言う“藤猫”のような毛皮に、白いシャツと黄色のエプロン、赤いスカートを履いた出で立ちで、両手に盆を掲げて料理や酒、空になった食器を載せている。尻尾はどうやら邪魔になるらしくスカートの中にしまっているようだ。

表情はゼリガと同じように、猫の頭部が人間に酷似した体の上に乗っかっているため、慣れないと判断がつきにくいのだが、修一郎はこの店の常連であり、今では喜怒哀楽程度なら分かるようになっていた。

この店は飲酒よりも食事をメインにした店で、食事を楽しむ客の笑い声や話し声こそ飛び交って少しばかり騒然としているものの、酔客の叫び声などは聞こえてこない。

おかげで大声で喋る必要はなく、修一郎はいつもの調子で猫人族に話しかけた。

「こんばんは、プレルさん。席、空いてます？」

「ああ、空いてるよ。」

クリュ！シューイチローを席に案内して！

プレルが店の奥に向かって叫ぶと、テーブルとほぼ同じ高さの位

置を小さな毛皮の塊が駆け寄ってくる。

「いらっしやい！しゅーちろー！」

店内の喧騒に負けないくらい大きな声で挨拶したのは、プレルの娘であり同じ猫人族のクリユだった。

プレルと同じ毛色の小さな身体に、ピンクのシャツ、クリユ用に作り直されたのたろう黄色のエプロン、尻尾用の穴の開いた赤いスカートという格好だ。

小さな耳と尻尾をしきりに動かして、満面の笑顔で修一郎を見上げている。

「こんばんは、クリユちゃん。ばんごはんたべにきたんだけど、だれもつかってないテーブルってどこかな？」

長身の修一郎がやや体を屈めながらクリユの頭を撫でてそう尋ねると、猫人族の少女は嬉しそうに目を細めて「こっち！」と走り出した。

「こら！クリユ！店の中では走っちゃダメだって言ってるでしょ！」

後から飛んできた母親の叱責も、お気に入りの人間族に会えて上機嫌のクリユには聞こえてないようであった。

クリユが案内した先には、確かに誰も席についてない五人掛けの丸テーブルがあった。

「はい。おしながき！」

背伸びをして店のメニューが書かれた木板をテーブルに置いたクリュは、厨房兼カウンターに向かってこれまた大声で叫ぶ。

「ラローズにーちゃん！こっちちゅーもんおねがーい！」

人間で言うところと四五歳に見えるクリュが一所懸命に店を手伝っている様子を見て、修一郎が小さく笑っていると、クリュの声が聞こえたのだらう、カウンター内で料理の盛り付けをしていたらしい従業員が顔を上げて、修一郎たちがいるテーブルを見る。

「わかった。すぐ行くよ！」

然程待つことなく、ラローズと呼ばれた人間族の男性が、修一郎たちのテーブルにやってきた。

茶色の髪を短く切った碧眼の青年は、素朴な顔立ちをしていた。決して美青年と言えるものではないが、人好きのする顔である。着ている物は、プレルやクリュと同じく、白いシャツに黄色いエプロンに赤い長ズボンで、これがこの店の制服なのだらう。

「いらっしやい。シュウイチロウさん、ゼリガさん。そちらのエルフの方は二度目……でしたよね？」

テーブルについた一行を順繰りに見渡しながら、それぞれに話しかける。

「……………はい」

「よう、ラローズ。どうだ？仕事には慣れたか？」

「ええ、まあ。親父さんに怒鳴られながらもなんとかやっていますよ」

「パノーバさんは料理には厳しい方ですからね。でもローズさんなら大丈夫ですよ」

「ありがとうございます。ご期待に添えるよう頑張ります」

四人は話ながらも、それぞれが料理を注文していく。

この食堂は、商業地区の中でも酒場通りよりも商店通りに近い場所に位置しており、基本的には商店で働く従業員の昼食や夕食を見込んだメニュー構成である。

酒類もあるにはあるが、軽めの果実酒や精々がエールくらいしか置いてない。

料理が来るまでの間、仕事の話や王都の最近の出来事、従業員の失敗談などに花を咲かせていたゼリガと修一郎に、時たま相槌や短い言葉を返していたクローフルテだったが、修一郎がふと気になったことをゼリガに尋ねた。

「そういえば、ゼリガさん。晩飯は家で食べないんですか？奥さんに怒られますよ？」

ゼリガは妻帯者で、しかも子供も三人ほど居ると聞いたことがある。

犬人族は狼人族と同じくらい家庭を大事にすると言われており、愛妻家であっても恐妻家であっても家庭を蔑ろにする個体は居ないことで有名だ。

クローフルテは独身だと以前レナヴィルから聞いていたので、外食するのも分かるのだが、ゼリガは修一郎の知る限り朝食、夕食はおるか昼食も一度帰宅して摂っているほどで、外食をするゼリガに疑問を持つのも仕方ない。

「あー。それなんだがよ……。ウチのカーチャンが、その、今……な？」

普段は、快活と豪快が毛皮と服を纏って歩いているようなゼリガだが、修一郎の疑問には妙に歯切れが悪かった。

「奥様と喧嘩されたのですか？」

様子のおかしいゼリガに、クローフルテも気になったようで、表情を変えないまでも、声にゼリガを案ずる色を滲ませて問い掛ける。

「いやいや！喧嘩なんてしてねえぞ！？」

むしろ……。その、今……。カーチャン、発情期……。でな？」

普段のその逞しい体を羞恥のため小さくしながら呟く犬人族の言葉に、人間族の男とエルフ族の女は思わず見つめ合ってしまう。

「だから、ガキどもが寝るまでは家に戻れないというか……」

人間族であつたら、おそらく顔を真っ赤にしているであろうゼリガは、言い辛い話題から逃げるように「早く酒持ってきてくれよお！」とカウンターに向かって叫んだ。

修一郎はというと、漸く家庭を大事にする犬人族が言わんとしていることに気付いた様子で、決まり悪げに

「そ、そついうことでしたか。そ、それは確かに帰りづらいですねえ」

などと、頭を掻いている。

一方、ゼリガを心配していたクローフルテは、その理由を聞いて珍しく頬を染めて恥ずかしげに俯いていた。

人間族や、人間族まではいかなくとも、“その気になれば”年中そういった行為に及び子を為すエルフ族たちと違い、犬人族や猫人族、狼人族などは年に数回の発情期にしか相手を求めることはせず、仮にその時期以外に“行為”を行ったとしても妊娠することはない。その代わりに、発情期になると男性女性共に激しく求め合い、確実に子を宿すことになるため、これ以上子供をもうける気のない夫婦や、既に子供が生まれている夫婦は、色々と苦労する時期でもあった。

言いよのない気まずい雰囲気支配するテーブルに、注文した料理と酒を盆に載せてラローズがやってきた。

「お待たせしました、皆さん。……あれ？どうかされましたか？」

場の雰囲気がおかしいことに気付いたラローズが尋ねる。

「い、いえ、なんでもないですよ」

「そ、そうそう！なんでもねえよ！それより飯だ！」

「……………」

三者三様に反応するが、顔を赤くして俯いたまま無言のクローフルテが気になったのか、ラローズがさらに言葉を重ねる。

「エルフの方は具合でも…………？」

大丈夫ですか？」

心配するラローズの声を聞いて、その長い耳まで真っ赤にしたクローフルテが、

「い、いいえ！大丈夫です！」

と、普段出さないような大きな声で、首を勢い良く左右に振るといふ、滅多に見られないどころか初めて目にする仕草に、目と口を大きく開けて見入ってしまった修一郎とゼリガだった。

注文した料理は、どれも豪勢とは正反対の質素なものばかりであったが、食べ飽きることのないよう控え目の味付けで丁寧に調理されたものばかりだった。

ジャガイモのパンケーキに摩り下ろしたニンジンと干しブドウのソースをかけたもの、キノコと鶏肉の炒め物、赤カブと数種類のハーブに柑橘系の果汁を使ったドレッシングをかけたサラダ、川魚のぶつ切りとハクサイに近い野菜を煮込んだ塩味のスープ、黒胡麻入りのパンといった料理が、テーブルに並べられている。

酒は、ゼリガがエール、修一郎が梨を使った果実酒、クローフルテがザクロのジュースをそれぞれ頼んでいた。

肉類はあまり好きではないというクローフルテのために、追加で注文した干したトマトを一度もどしてタマネギとチーズを乗せてオーブンで焼いた料理は、その香ばしい匂いに釣られたゼリガが半分近くを食べてしまうという出来事があったりしたが、ご愛嬌である。クローフルテは酒類を頼むことはなかったが、それでもそれなりに会話に加わるようになり、賑やかに話は弾んでいた。

開けっ放しの食堂の入口に、一人の人物が立っていた。

年老いた老人のように長く伸ばした髭、丸く大きな鼻、一般的な人間の半分程度しかない背丈、木屑や鉄片の付着した麻の上着に、長年使い込んでいいると思われる木の皮を編んで作ったジャケット、灰色の麻のズボン。

伸びるに任せた黒に近い茶色の頭髪には所々白いものが混じっているが、その髪の間から覗く茶色の眼光は鋭く、店内を物色しているようだ。

その人物に気付いたプレルが声をかけるが、「おう」と一言だけ応え、店内にいる客に視線を巡らせている。

しばらくして、探している相手が見つかったのか、その人物はすたすたと店内に入って行く。

プレルはいつものことなのか小さく肩を竦めると、他の客の注文を伝える為に、カウンターへと向かった。

「シュウイチロウ！探したぞい！」

いきなり三人の会話に大声で割り込んできたのは、土の妖精族ノームであった。

「なんだあ！？つて、レベック爺さんじゃねえか」

驚きと相手の不躰さに声を上げたゼリガだったが、闖入者が見知った顔だったので拍子抜けしたようである。

「こんばんは、レベックさん。こんな時間に珍しいですね」

突然現れたノームに驚いた様子もなく、いつもの笑顔を浮かべな

がら話しかける修一郎。

「……………」

クローフルテは黙って軽く頭を下げただけで、無表情のままだ。

「こんな時間もへったくれもないわい。お前さんから頼まれとったモノが出来上がったんでな。

一刻でも早う欲しいじゃろうから街中探し回っておったんじゃ。やれやれ、とんだ一苦労じゃったわい」

言葉とは裏腹に疲れを感じさせない口調でそう言うと、三人の様子を気にも留めず、レベックと呼ばれたノームはさっさと空いた席に座ってしまう。

「おい、坊主！エール追加じゃ！つまみはふかしたジャガイモでええからの」

ラローズに向かって勝手に追加注文をするレベックに、ゼリガは苦笑を浮かべながら「相変わらずだねえ、この爺さん」などと小声で呟いており、クローフルテは黙ったまま瞳に好奇心の光をちらつかせつつノームの行動を観察しているようだ。

「頼んでいたものと言うと、アレが完成したんですか!？」

当事者の修一郎といえば、レベックの言葉に喜びの表情を浮かべ、声まで弾ませている。

「うむ。お前さんの要求全てに応えることができたわけじゃないがの。

それでもなんとか使えるモノにはなつたわい」

そう言いながら、テーブルに残っていたパンケーキとサラダとパンを遠慮なく口に運ぶレベック。

鶏肉の炒め物も残っていたが、それには見向きもしない。

土の妖精族ノームは森の妖精族エルフ族以上に肉食を避ける。

大地に実る或いは生えるものは食べるが、大地の草を食べる家畜や水の生物である魚などは一切口にしないとされている。

チーズや牛乳ですら彼らは避けるのだ。

ちなみに、遠慮のなさは種族としてではなく、レベック個人の性格である。

「で、じゃ。これがソレなんじゃが……」

口の端についたパンケーキのソースを、着ていたジャケットの袖で拭いながら、レベックがもう片方の手でジャケットの懐から何やら取り出そうとしたとき、ラローズがエルとふかし芋を持ってやっってきた。

「ちょ、ちょっとレベックさん！ここじゃ拙いです。場所を変えましょう」

慌てて修一郎がレベックを止め、歳若い青年に尋ねる。

「ラローズさん。今、個室は空いてますか？」

アーセナクトは商業都市であつて、様々な人が流れ込んできては出て行く。

当然、その中には隊商や行商人もあり、成り行きで食事をしながら商談をすることも少なくない。

そんな人々のために、大抵の食堂や酒場には数部屋の個室が用意されている。

この店にも、一部屋しかないものの個室があった。

「個室ですか？はい。確か空いてたと思いますが……。一応、使えるか女将さんに訊いてみますね」

ラローズが、カウンターから厨房に向かって客の注文を伝えているプレルの元へ行き、一言二言話をする、暫くしてプレルが個室の鍵を持ってやってきた。

「シユウイチロウが個室を使うなんて珍しいわねえ。何か良からぬことをしてるんじゃないでしょうね？」

「まさか。ちょっと私的な用件ですよ」

プレルの言葉が冗談であることを理解している修一郎は、笑顔を浮かべる。

「あ、それとラローズさん。申し訳ありませんが、こっこのテーブルの料理を個室に移したいんですが」

「ええ、構いませんよ」

「ああ、ならあたしも手伝うよ。もちろん追加注文してくれるんだろうしね！」

笑いが弾ける四人とは対照的に、レベックは鍵が開けられた個室へとさっさと移動してしまい、クローフルテは修一郎がラローズに頼む前に、既に料理の皿を持って移動し始めていた。

全員が個室に移り、追加で注文した料理や酒が来たところで、先ほどの続きと言わんばかりにレベックが口を開く。

「さっきもちと言ったがの。一、二、三の点を除けば凡そはシュウイチロウの希望通りになっとるはずじゃ」

そう言いながら、今度こそ本当にジャケットからソレを取り出した。

「なんだこりゃあ……？」

レベックが大事そうにテーブルに置いた、小さな金属製の箱を眺めて、ゼリガが声を上げる。

大きさは修一郎の手の平より二回りほど小さく、素材は鉄で出来ているようだ。

親指一本分の厚みを持った長方形で、箱の長辺のほぼ中央あたりに箱の周囲を一周するように切れ目が入っている。

それ以外は、魔術が施されたような跡もなく、突起物も穴もない、つるりとした印象で、穴がないことを除けば修一郎の故国である日本で使われていた触媒式懐炉のようにも見える。

「……………」

クローフルテは先ほどよりさらに好奇心を掻き立てられたようで、凝とテーブルに置かれた物を見つめている。

そんな玩具を前にした子猫のようなクローフルテにちらりと視線をやって、当人に気付かれないように笑みを浮かべると、修一郎は

レベックが作ったそれを手に取った。

「お前さんが最初に言うておった開閉部分の蝶番じゃが、やはり小型化は無理じゃった。」

あと、内部の“バネ”やら言う部品もの。

じゃから代案じゃった方式を採用しとる。それでもお前さんが要求しておった大きさがぎりぎりになってしもうた。

わしも細工師としてまだまだ修行が足らんということかの」

木製のジョッキに残っていたエールを一気に飲み干すと、それが苦い薬であったかのように顔を顰めながらレベックが語る。

依頼人の要求に完璧に応えることができなかった事実が、細工師としての己が矜持を傷つけているのだろう。

今はどんな言葉をもつてしても、この土の妖精族を慰めることはできないと感じた修一郎は、まずは完成品の検品を済ませることにした。

箱の下部を右手で持ち、左手で上部を摘んで引っ張ると、箱は切れ目から二つに分かれ、中から煙突のような形をした金属製の筒が現れた。

どうやら外側の金属製の箱は、ケースであり蓋であり、品物の本体は、半ばまで剥いたゆで卵の殻から頭を出した白身のような状態のこの筒らしい。

金属製の筒には、所々小さな穴が穿たれ、筒の片側には、同じく金属製の車輪のようなものが筒に添うように取り付けられている。

「はあ……」

「……………」

ふと、ゼリガとクローフルテに目をやると、二人とも興味津々といった様子で、修一郎の右手に持たれた奇妙な形をした筒を凝視し

ている。

修一郎は視線を“筒”に戻し、それこそ煙突の上から下を覗くように、筒の内部を確認する。

筒の中には、ランプに使われている芯が、筒に取り付けられた金属製の車輪からほんの少し離れた場所に固定されている。

その金属製の車輪の周囲には、斜めに交差するように細かな溝が彫られ、鑢状になっていた。

視点をずらして車輪の下を見ると、車輪の幅より少しだけ細い窪みに、黄土色の小さな石片が埋め込まれており、車輪の外周部に僅かに接触するように位置が調整されている。

「レベックさん、点けても？」

そこまで確認してから、修一郎はレベックに問う。

「無論じゃ。わしも一応動作確認はしとるかの」

嬉しそうにそれを眺める修一郎を見て、幾分気が晴れたのか、先ほどより表情を和らげたレベックが答える。

それを見て小さく頷くと、修一郎は“筒”に取り付けられた車輪に親指をかけた。

車輪を回転させるように勢い良く親指を滑らすと、石と石を擦り合わせたような音がして筒の中に向け火花が散る。

次の瞬間、ぼつつという音と共に筒に火が灯った。

「おおっ！？」

「え……っ！？」

息を呑む同僚二人を他所に、修一郎は満足げな表情を浮かべると、左手に持っていた箱の上部で、横から素早く被せるように蓋をする。

すると、火が漏れることも爆発するようなこともなく、レベックがテーブルに置いたときと変わらない金属製の箱が修一郎の右手に納まっていた。

「うん！ありがとうございます、レベックさん。充分すぎるほどの出来ですよ！」

満面の笑みでそう告げる修一郎に、言葉を返そうとするレベックを遮って、ゼリガとクローフルテが興奮した声をぶつけてきた。

「おい、シユー！なんだ今のは！？」

お前、『発火』……いや、ありゃ『火炎』か？魔法が使えるようになったのか！？」

「私も一瞬、魔法を使ったのかとも思いましたが……。もしかしてそれはほくち箱に類するものなのでしょうか？」

「落ち着いてください、ゼリガさん。」

私は魔法なんて使ってませんし、使えませんよ。それから、クローフルテさん。」

仰るとおり、これはほくち箱のようなものです」

身を乗り出すようにして一斉に質問してくる二人に、苦笑しながらも修一郎が説明する。

「これは“ライター”と言います。」

私がいた世界の言葉で、本来は『火や灯りを点けるもの』といった意味ですが、私が生まれたときには既に“ライター”という言葉自体がこういった機巧を指すものになってました。

この“筒”の中に、ランプ用の芯を通して周囲に綿を詰めたのち、油を綿に染みこませます。」

そして、この火打金代わりの金属の車輪と火打石を擦り合わせて火花を発生させて、それを芯に当てて火をおこす仕組みです。

火打金と火打石を使ってますから、ほくち箱の変り種と言ってもいいかも知れませんか」

再びライターの蓋を開けて、“筒”の上部を持つとゆっくりと引き抜く。

穴の開いた煙突状の筒の下は、ライターのケースと同様に鉄で作られており、それを引っ繰り返すと、確かに修一郎の言う通り綿が詰められていた。

「ほく……なんだって？」

ライターについては理解したようだが、途中で出てきた“ほくち箱”という耳慣れない単語に、再び疑問の声を上げるゼリガ。

「ほくち箱です。火打金と火打石、それにおが屑や綿屑を一つにまとめたものです。

形状はその名の通り箱状であったり、皮袋に入れてある場合もあります。

確かに街中ではあまり見かけませんし、必要ともされませんが、行商人や冒険者といった長旅をする者の中には、火をおこす際の予備の手段として携行している者もいます」

修一郎に代わって、クローフルテが淡々と説明する。

ゼリガはアーセナクトで生まれ、アーセナクトで育った犬人族だ。街中で育ち、他の都市などへの泊り掛けの旅も経験したことがなく、周囲の者も魔法を扱うことからほくち箱の存在を知らないのも無理はないことだった。

クローフルテはこの街の生まれではないとソーンリヴから聞いて

いたので、おそらく長旅の経験があり、ほくち箱を手にしたか見たかしているのだろうと修一郎は推察する。

彼女の口調から、既にいつもの冷静さを取り戻したかに見えるが、修一郎が名前で呼んだことを訂正しないあたり、まだ多少は混乱しているのかも知れない。

「そうです。実際に私もほくち箱は持っていますが、あれって結構取り扱いが面倒ですし、慣れないとなかなか火をおこせないんですよ。

それに私は魔法が使えませんから、常にそういった物を持ち歩かないといけませんし。

そこで、レベックさんをお願いして、これを作っていたいただいたというわけです」

想像以上に出来が良かったことと、懐かしい品に触れることができたからか、修一郎は嬉しそうに再びライターの火を灯した。

そんな様子を見ながら、レベックが修一郎を補足する。

「シユウイチロウが依頼してきたのは、ライターっちゅうやつを蝶番で留めて開閉させるものじゃった。

じゃが、指定された大きさがぎりぎりまで頑張ってみても、強度的に辛いものがあったの。

無理に蝶番をくつつけても三十回も開閉せんうちに、心棒が歪むか折れるかして使い物にならなんだ」

ふんと鼻を鳴らして、レベックが個室の入口へ歩いて行く。

扉を開けると、カウンターのラローズに向かって大声でエールの追加を注文する。

その様子を黙って見ていた三人だったが、レベックが自分の椅子に戻るとゼリガが口を開いた。

「へえ……。爺さんなら作っちまいそくなもんだがねえ」

「ふん！いくらわしでも出来んこともあるわい。」

それに、もう一つシユウイチロウが出した案の“バネ”は、わしどころか今のこの国の……いや大陸の技術じゃ無理じゃ」

忌々しげに吐き捨てるレベックが「エールはまだか」と声を上げたタイミングで、個室の扉がノックされラローズがエールを持って入ってきた。

修一郎はさりげなくライターを持った手をテーブルの下に隠し、ラローズに見られないようにしている。

エールを置いてラローズが退室すると、レベックが再び口を開く。「棒状にした鋼を螺旋状に巻いて、反発力を利用して火打石をせり上げる仕組みはたいしたもんじゃが、あの大きさに収まるように作るのはわしには到底できやせん。」

工業都市アーラドルの同族やドワーフにやらせても無理じゃろくな。

じゃから適切な大きさに切り揃えた石を詰め込む方式にさせて貰うた。

……じゃが、あの“バネ”は面白いの。大きさに拘らんなら、色々応用は利きそうじゃ」

渋い顔で説明を続けていたレベックであったが、最後の一言でにやりと笑うとジヨッキを呷った。

「レベックさんの腕を疑ったわけではないのですが、あの二つの案はそうなればいいなといった程度のもので、これで充分ですよ。」

おかげで、長屋に帰っても貰い火をしなくて済みますし」

はは、と情けなさそうな笑いを浮かべながらも、修一郎は手の中でライターを弄んでいる。

魔法が一切使えない修一郎は、アーセナクト市民用の長屋を借りて住んでいるのだが、照明はランプか蝋燭、台所は竈しかなく、帰宅してから火をつけるのに苦労することが多かった。

魔法が使えれば『着火』で一瞬なのだが、修一郎はほくち箱を使わないと火をおこせない。

しかも長雨でおが屑などが湿気ると、隣近所の住民にお願いして火種を貰わないといけないのだ。

その点、オイル式のライターであればライター自体が水に濡れない限りは容易に火をおこせる。

そこで、昔の伝で面識のあったレベックにライター製作を依頼したのだった。

「いや、じゃが今回の仕事は、わしも色々学ぶことができたわい。

火打石の中でも脆くて使えんと思われておった石のほうが、ライターのように擦ることで真価を発揮することや、わしらノームの間で”種火草”と呼ばれる焚きつけにしか使えんかった草から精製した油が、あれほど燃えやすい性質を持つておったこととかの。

流石は異世界の行商人の知恵といったところかの？」

「レベックさん」

そう小さく発した修一郎の言葉に、レベックは少し慌てたように、商売の話に移った。

「お、おお。そうじゃったの。して、代金の話じゃが。

素材は基本的に鉄と鋼しか使っておらんし、他も簡単に手に入る

ものばかりじゃった。

それに次善案でしか作れなんだし、さっき言ったように今まで捨てておったような物の使い途も見つかった。

加えて、“バネ” ちゅう新しい技術も教えて貰うたしの。

既に貰うておる手付金で充分じゃ。

……と言いたいところじゃが、それではお前さんが納得しそうもないのう。

よし、ここの飯代で手を打とうじゃないか。

あと、火打石と油の補充は、格安で提供してやるわい。それでどうじゃ？」

やたら饒舌になった細工師に、胡乱な視線を向けていたゼリガとクローフルテだったが、修一郎の次の言葉に再び驚くことになる。

「いいえ、それではこちらは応じかねます」

慌てて修一郎を見る二人だったが、当の本人は珍しく真剣な顔つきでレベックを見据えていた。

「ほう。では、どうするんじゃ？」

対するレベックは好奇心を湛えた瞳で、口の端を吊り上げて笑う。

「まずですね……………」

そうして告げられた内容に、個室にいた一人は呵呵と笑い声を上げ、一人は感心したように呟き、一人は何かを考え込むように黙り込む。

急遽設けられた商談の席で、条件を提示した修一郎は、いつもの柔らかな笑みを浮かべたまま、愛おしそうにライターの表面に触れて

いた。

第三話 昼飯と旧友

「ふーん……。で、その“ライター”を売るっていうのか？」

ソーンリヴが作業の手を止めて、修一郎の持つ金属の箱を見つめる。

「ええ。社長が意外にもというか案の定というか、乗り気でして」

心の中で思っていることを表に出すことはなく、いつもの柔和な笑みを浮かべて、修一郎はお茶の準備をしている。

マリボー商店で売っている高級品ではなく、街の市場で買ってきた庶民が飲んでいる茶だ。

「あの人は新しいモノ好きだからな」

やれやれといった表情と口調で、深い藍色をした髪の女性事務員は小さく頭を振った。

「それで？販売価格や仕入方法といった取り決めはどうなったんだ？」

新しいモノだろうが珍しいモノだろうが、それを店で売るとなると実務が発生する。

仕入れに伴う流通・在庫管理各部門への周知、運搬に係る人足の確保に伴う経費の支払い、出納板への新規登録、販売部門への商品の概要説明及び販売価格の周知といった手続きは、事務員であるソーンリヴと修一郎の業務となるのだ。

仕事の顔つきになったソーンリヴが修一郎に問い質したのは当然のことであった。

「はい。それらについては先ほど社長と話したのですが……」

ソーンリヴと自分のカップにお茶を注ぎながら、修一郎は説明を始めた。

「ヤスキ。お前、何やら面白いものを手に入れたそうじゃないか」

マリボアの個室に呼び出された修一郎に、部屋の主が開口一番そう言った。

修一郎の世界で言うと、横6メートル、奥行き5メートル、高さ2メートルの、事務室の倍はありそうな広い部屋の床には濃い緑色の絨毯が敷き詰められ、部屋の中央には小ぶりのソファとローテーブル、奥にはマリボアの執務用机が置かれている。

入口から見て左側の壁には、華美に過ぎない程度に装飾が施されたキャビネットが置かれており、中には高級そうな酒瓶やら彫刻品といったものが並べられていた。

右側の壁には、アーセナクト商人組合の組合旗が掛けられ、その隣には、羊皮紙製の書物が十冊程度と、ルザル王国製の壺が一つ収められた小さな書棚が据え付けられている。

入口の正面の壁は、事務室の窓とは違い、透き通ったガラスの詰められた大きな窓が、晩秋の控え目な陽射しを室内に招き入れている。

その窓の前には、マリボアのお気に入りだという、豪華さよりも

機能性を重視しつつ、それでもある程度の威厳を感じさせる机が鎮座していた。

部屋の主のマリポーは、ソファーに腰掛けて、修一郎に対し笑みを浮かべているが、それは商売の話をする時の笑みであることを修一郎は知っている。

相変わらず耳聡い人だなと思いつつも、修一郎はいつもの頼りなさげな笑みを浮かべて答えた。

「王都から戻られたばかりなのに良くご存知ですね、社長」

ソファーの傍までやってきた修一郎に、「まあ座れ」と勧めながら、マリポーが口を開く。

修一郎が“社長”と呼ぶことに関しては、あちらの世界での意味を説明するといたく気に入ったようで、言い直させたり咎めたりすることはない。

むしろ、この店の中ではそう呼ぶようにと、マリポーから半ば命令に近い指示を受けているくらいだ。

「商人なら当たり前だ。

で、その“ライター”とか言うのはどういうものだ？今も持っているのだろう？」

問われた修一郎は、素直にポケットからライターを取り出して、二日前にゼリガたちに説明したことをマリポーにも話す。

「……と、いったモノで、魔力のない私は非常に助かっています。ただ、こちらの世界の人にはあまり必要とはされなと思います
が」

修一郎の説明を黙って聞いていたマリポーは、ライターから視線

を外すことなく、矢継ぎ早に質問を重ねる。

「なるほどな。」

それで、消耗品の補充はどうするつもりなんだ？

ライターの製作にかかる日数は？

日に、あるいは週にいくつ製作可能だ？」

「基本的な消耗品は、火打石と油になりますが、これはレベックさんの工房で生産できます。」

それ以外の消耗品、綿やランプの芯ですが、これは既存のものを流用可能にしています。」

製作日数は、コレは飽くまでも試作品ですので、一週間……五日程度かかっています。」

このまま量産を行うとしても、外側の器、内部の筒に関しては打ち出しで一つ一つ製作していますので、工房を全稼働させても一日二個が限度だろうとのことでした。」

それ以外の部品については、試作品の鋳型が保管されているとのことでしたので、それほど時間は掛からないと思われれます。」

これらのことから、仮に量産化を依頼した場合、最高で一日二個、一週間で八〜十個程度でしょうか？」

質問内容を予測していたのであろう、修一郎は淀みなく答えた。

「ふむ……」

マリポーは口ひげを指で弄びながら思案している。

マリポーは人間族の五十になったばかりの男で、恰幅の良い体つきに、砂色の髪に砂色の目をしている商人だ。

髪の毛は、今は七三分けに近い髪型をしているものの、日によっては五分分けになったりと納まりが悪いようだが、あまり頓着して

いる様子もない。

髪と同じ色の立派な口ひげを生やしており、本人のちょっとした自慢でもある。

普段は温和な中年男性といった風貌で、性格も善良と呼んでいいのだが、商売の話となるとあからさまに表情が変わる。

同業者からは、飢えた狼のようだと揶揄されることもあるが、ぎりぎりの線で上手く立ち回って敵を作るような真似はしない。

そういった強かさがなければ、この商業都市でマリポー商店をこそこの名の売れた店にまで大きくすることなどできなかったであろうが、あまりの豹変ぶりに慣れない従業員がいるのも確かである。ソーンリヴが「悪い人ではないんだが……」と言葉を濁したのもこのあたりに関することを言いたかったのだろう。

「ヤスキ。お前はどうか考える？」

修一郎の対応に、既にこの新入事務員が何やら腹案を用意していることに気付いたマリポーは、値踏みをするような視線と言葉で発言を促す。

「はい。確実に売れる商品とは言えないでしょうが、多少の需要は見込めるのではないかと思います。」

基本的に、この世界は魔法を中心に成り立っていますが、ほくち箱のように魔力を使わずに火をおこすための道具も現に存在していますし。

行商人や冒険者、探鉱者の中には予備として欲しがるお客様もいらっしやるでしょう。

それでも週に二〜三個売れば良いといった程度でしょうか」

そう答える修一郎に、「あと一歩だな」と評価を下し、マリポーが付け加える。

「それに、貴族様や好事家も考慮に入れないとだめだ。彼らは新しい物、珍しい物にはほぼ無条件で飛びつくからな。例えそれが、実生活で使えない・使わない物でも、だ。俺の考えだと、週に五〜六は売れる」

マリボアの口調から、ライターは既に新商品として販売することが決定したようだった。

ならばここからだ、修一郎は姿勢を正す。

「それは、当店で取り扱うということでしょうか」

「ああ。目玉商品と行かないまでも、それなりにお客を呼ぶ材料にはなるだろう」

「分かりました。では、それを踏まえたうえで、お願いがあるのですが」

「なんだね？叶えるかどうかは別にして、要望があるのなら聞こうじゃないか」

これも予測していたのか、マリボアは僅かに笑って口調を少しだけ柔らかくすると、修一郎の顔を見つめる。

「まず一つ。

レベックさんの工房は、本来は木工品や石細工の製作を主に扱っている所です。金属加工は飽くまでも装飾の補佐として行っているに過ぎません。

ですから、一週間あたりの仕入れ数は四個を限度にしていたきたいのです。

「これはレベックさん本人の要望でもありません」

「……いいだろう。数量を限定して希少価値を高めることも狙えそうだしな」

寸時の黙考の後、マリポーは了承した。

「では二つめ。」

専用の消耗品……火打石と油ですが、販売開始から暫くの間はレベックさんの工房から当店が全て買い取る形を取り、ライター本体がある程度広まった段階で、他店にも卸すことを認めてください。

これは、下手に当店が独占すると、模造品や粗悪品が出回る可能性が高まり、ライター自体の評価が落ちることを避けるためです。

火打石は見る者が見ればどの種類かはすぐに分かるでしょうが、油は今のところレベックさんの工房でしか精製できない物で、他の油を使った場合、火付きが悪くなったり下手をすると爆発する恐れもあります」

尤もそこまで心配するほど売れる商品かどうかは分かりませんが、と修一郎は苦笑しながら付け加える。

「うちの店で継続的に一括仕入れするわけにはいかないのかね？」

修一郎の“他店に卸す”との言葉に、一瞬眉を動かしたマリポーが諮るように問い掛ける。

「商売ですから、自らの利益を第一に考えるべきであることは理解しています。」

しかし、先ほども申し上げたとおり、当店以外で手に入らないとなると、ほぼ間違いなく類似品を作ろうとする者が出てくるでしょ

う。

そしてそれを使ったお客様が、十分に機能しないライターに使えないという烙印を押し、それが口伝えて広まるのは色々と拙いと思います。

後は、これは余計な心配かも知れませんが、全てを当店に集中させて、下手に同業者の悪感情を買うようなことを避けたほうがいいのではないかとの考えもあります」

答える修一郎の顔は、いつもの柔和でそれでいてどこことなく頼りなさそうな表情ではなく、一端の商人のそれになっている。

修一郎がこの街にやってくるまでの経緯を知っているマリポーは、満足そうな笑みを浮かべると、「分かった」と頷いた。

「それでは最後に、これは要望というよりも提案なのですが。

当店でライターを販売する際、外側の器のこの辺り……に、レベックさんの工房の名前と当店の名前、それに通し番号を彫り込んではどうでしょうか。

そうすることで、両者の存在をアピール……当店やレベックさんの工房を知らないお客様に知らしめるといった意味ですが、ことができますし、このライターが元祖であるということも主張できるのではないかと思います。

また、通し番号を入れることにより、正規品と模造品の区別が容易になります」

そう言いながら、修一郎は自分のライターのケース下部を指でなぞる。

「ほう！面白いな。

そんなことをやっている店は見たことがない。いいじゃないか」

マリボーは一つ膝を叩くと、目を輝かせた。

この世界に、未だ広告という概念は殆どない。精々が店の看板と口コミ、後は店先での呼び込みくらいだ。

また、個人の所有物に名前を刻むという行為は、一部の冒険者や騎士が己の武器に施す程度で、市井で生活している人々には縁のないことであつた。

製造・販売元を明確にすることと、それを所有している者の周囲の興味を惹くことを兼ねた、こういった手法は、修一郎の世界では極々当たり前に行われていることなのだが、こちらの世界では未だ誰も取り入れていない。

仮に、本当に仮にだが、ライターがそれなりに世間に受け入れられ売れた場合、当然起こり得るだろう模造品の出現は、下手をするとな元祖の評価を落とすことになりかねない。

マリボーには言っていないが、単に同品質の競争相手なら現れてくなくても構わないと修一郎は考えている。

困るのは、見た目を似せただけのような粗悪な模造品を作られて元祖ライターの、ひいてはそれを製作したレベックの工房や、それを販売するマリボー商店の評判を落とされるような事態になることだ。

色々とマリボーに要求したのは、その一点を案じているからに他ならない。

元々は修一郎が日常生活を送るうえで、利便性の向上を目的として個人的に作って貰った品である。

マリボーの予想に反して売れなくても、それはそれで仕方ないし、問題ないと思っっている。

既に試作品の製作費用と手数料は、依頼の段階でレベックに渡してあるのだ。

例えばライター数個と消耗品が不良在庫となつても、いざとなれば修一郎が買い取ればいい。

修一郎にとっては、非常に助かる物であることは事実だし、今後

も使い続けることになるのだから。

「ちょっと貸してみる」

マリポーは修一郎からライターを受け取ると、火をつけた。

手の中にある鉄の箱から立ち上る小さな炎を暫く見つめたあと、蓋をして修一郎に返す。

「よし。仕入れ価格や方法については、俺が直接レベック爺さんに話をしよう。」

爺さんの所とは今までも何度か取引しているからな。

向こうの負担にも損にもならないようにするから心配するな」

今までの修一郎の態度から、もっともらしい理由を付けながら、その実レベックを気遣う心情に気付いていたマリポーは、口の端を上げて告げる。

「お願いします、社長。」

上手く行けば、もう二―三商品化できるモノがあるので、レベックさんとは良い関係を築いたほうが良いと思います」

既に依頼している物が一つ、材料が揃えば依頼したい物が二つあると言う異世界から来た男に、マリポーは笑みを深くして「まかせておけ」と応じた。

「なるほどねえ。あの人相手に駆け引き紛いのことをするとは……。」

シュウイチロウ、お前ここに来る以前は何をやってたんだ？」

修一郎の淹れたお茶を飲みながら、ソーンリヴが探るように睨む。

「別におかしなことはしてませんよ。」

行商人の真似事みたいなものを数年やっていた程度です」

苦笑を浮かべて答える修一郎に、まだ何か言いたげなソーンリヴであったが、鼻を一つ鳴らして、再びカップを口に運ぶ。

マリポーは早速レベックの工房へと出かけて行ったので、今日中には仕入価格や販売価格が決まるだろう。

商品を実際に仕入れるのは明日以降であろうから、とりあず出納板に登録しておけばいいか。

そう結論付けると、目つきの悪い事務員は仕事に戻ることにしたのだった。

ライターの販売が始まって三日経った。

売れ行きは、初日は売れず、二日目に二つ、三日目に一つ売れている。今日はまだ売れていない。

三日で三個。品物が品物だけに上々の売れ行きと言えるだろう。

販売価格も、マリポーが上手く交渉したのか、従来のほくち箱とまではいかないにしろ、庶民でもちよつと無理をすれば買える程度に納まった。

その“ちよつと”がどこまでの金額を指すのかは、人によって議論が分かれるところだろうが。

予想通り一般市民はまず必要としないためか、陳列されているラ

イターを珍しそうに眺めはするものの、手に取る者はおらず、購入したのは冒険者が二人、貴族が一人であった。

レベックの工房では、新たに人を雇ったらしく、ライター専門の製造ラインが作られたそうである。

それでもケースの強度を損なうことなく店名等を彫金する技術を持つ者は、工房の主であるレベックしかおらず、生産ペースは一日一個に落ちてしまったようだ。

とりあえず現状は、大きな問題もなく好調と言えるだろう。

「じゃあ、私は食事に行つてきます」

大鐘の音が三つ響いたところで、修一郎が席を立った。

「ああ、シュウイチロウ。すまないが、何か適当に食べられるものを買ってきてくれないか。

ちよつと昼を食べに外に出る余裕がなさそうだ」

未だ自分の机に向かつていたソーンリヴが、顔を上げてそう告げる。

「まだ仕事が残ってるんですか？でしたら私も手伝いますよ」

「手伝ってもらえるならそうしたいところなんだがな。

出納板の設定に手違いがあつたようなんだ。今週分の出納板を一から確認し直してるんだが……。

お前、できるか？」

そう言つて人の悪い笑みを浮かべたソーンリヴは、制服のポケットから財布を取り出す。

魔法が使えない修一郎では、出納板の再設定や調整はできない。

「そうそう、別にすぐじゃなくていいぞ。お前の食事を済ませてから帰りに買ってきてくれて構わないからな」

仕方なくソーニンリヴから昼食代を受け取る修一郎に、先輩事務員はそう付け加えた。

従業員出入口から外に出て見上げると、雲ひとつない晩秋の青空が広がっていた。

通りを吹く風は、日中でも僅かに寒さを感じさせるが、十分な外光が取り込まれていない薄暗い事務室にいた修一郎には、それでも爽快に感じられる。

風がなければ、外で食事をしても良いと思えるほどだ。

通りを見ると、同じように昼食に向かう他店の制服を来た店員らしき人々が、思い思いの場所へ向かって歩いている。

アーセナクトの中央には市庁舎があり、その周りを一周するよう大きな街路が敷かれ、その周囲に幅約750メートルの街路の延長のような円状の広場が設けられている。

ドーナツ状の広場の市庁舎通り側の半分は緑地帯になっており、丈の低い広葉樹や芝生が植えられ、所々にはベンチもある。

残りの半分には、様々な露店が軒を連ねていた。

上空から市庁舎を中心に見ると、市庁舎の周りに街路があり、その街路を囲むように緑地帯があり、その緑地帯の外円部に露店が並ぶ広場があり、市庁舎を三重の円が囲んでいる形になる。

昼時ということもあり、露店では様々な軽食が売られていた。

串焼きにされた肉や、干しブドウや木の実を練りこんで焼いたパン、程よい焼き目と照りのついた鳥の腿肉、リンゴに良く似た果物をバターと砂糖で焼いたもの、何かの肉に小麦粉でつくった生地を

巻きつけて焼いたものと、空腹を刺激する匂いがそこかしこから漂ってくる。

緑地帯のベンチに目を遣ると、そこに腰掛けて露店で買った軽食を食べている者も居るようだ。

ソーンリヴに買っていくのはこれらの中から選ぼうと決めた修一郎は、まずは自分の食事を済ませることにして、石畳の街路を歩きながらプレルの店に向かった。

修一郎がプレルの店に入ると、そこは軽い修羅場と化していた。ホール内に十脚あるテーブルは全て埋まっており、僅かにある力ウンター席も満席状態だ。

「うわ……。こりゃあ、今日は無理かな」

そう思い、踵を返そうとした修一郎に、プレルの声が飛んでくる。

「ああ、シューイチロー！ちょうど良かった！

悪いけど厨房手伝ってくれない？お願い！」

ホール内を一人で飛び回っていたプレルが、修一郎の姿を見つけて小走りに近寄ってくる。

「ええっ！？私は今日は非番でもなんでもないんですよ！？」

慌てて声を上げる修一郎だったが、プレルの押しは強い。

「子鐘半分……。いえ、ラローズが戻ってくるまででいいから！ね？頼むよ！」

そんなことを言われても、現在修一郎は店の制服を着ているし、

早めに食べてソーニリヴの昼食も買って帰らないといけない。

事情を説明しようとした修一郎だったが、その相手はテーブルの客に呼ばれたため、既に目の前にいなかった。

「まいったなあ……」

仕方なくカウンターへ向かうと、両手に水の入ったコップを持ったクリユが居た。

「あー！しゅーちろーだー！」

嬉しそうに両手を振って修一郎を迎えてくれたが、勢い良く手を振ったためにコップの水が周囲に飛び散る。

「わぷっ！」

ついでにクリユにもかかったようで、慌てて袖で顔についた水を拭っている。

「こんにちは、クリユちゃん。ラローズさんいないんだって？」

いつものように長身を屈めてクリユに話しかける修一郎に、クリユは元気良く答えた。

「うん！カブリスさんのところからにもつがとどいてなくて、ラローズにいちちゃんがおとうさんにおこられて、そしたらしょくざいがたらなくなりそうだから、おかあさんがいそがしくなって、カブリスさんのところにラローズにいちちゃんがはしっていったの！」

必死に説明してくれているのだが、今一つ要領を得ないため、少

しばらく考え込んでいた修一郎だったが、大体のころは察することができた。

要は、今日カブリスという卸業者から仕入れる予定だった食材が、何らかの手違いで未だ配達されておらず、急遽ラローズが食材を受け取りに向かったのだらう。

で、厨房兼ホール担当のラローズが抜けたことで、プレルも、プレルの夫であり店主であり調理長であるパノーバもてんてこ舞いと相成ったというわけだ。

「わかった。じゃあ、クリユちゃんはそのコップにおみずをいれなおして、おきやくさんにもっていつてくれるかな？」

修一郎は笑いながら、クリユの頭を二回ほど撫でる。

くすぐったそうに目を細めながら、「わかった！」と言うと、若い猫人族は厨房へと走っていった。

その姿を微笑ましく思いながら、修一郎もカウンターをくぐり厨房へと入る。

厨房の中では、修一郎よりも頭一つ低い、灰色一色の体毛を纏った猫人族の男性が忙しく立ち働いていた。

猫人族にしては逞しい体躯に、白い長袖の上着、白いズボン、頭には同じく白いつばのないシルクハットのような帽子を被り、しきりに竈の火力や、鍋の中身を確認しつつも、その間の僅かな時間で食材を刻んでいる。

あの帽子はやっぱりコック帽なんだろうかと思いつながら、修一郎はすぐ傍の流しで念入りに手を洗う。

「パノーバさん、手伝います。このエプロン借りますね」

近くにあった、おそらくはラローズのものであるうエプロンを手早くつけながら、調理台へと近づくと修一郎。

「すまん。こんなに立て込むとは予想してなかった。
おまけに発注に手違いがあつてな」

そう言いながらも、パノーバは修一郎に振り返ることなく、手を動かし続けている。

「いえ。いつもお世話になってますから、少しくらいは……」

そう言い掛けたところで、クリユが再びコップに水を注ぎ終えたのだらう

「いってきまーす!」

と、元気良く駆け出して行った。

「ころばないようにな」

彼女の小さな背中に一言投げかけると、パノーバに顔を向けて確認する。

「私は何をすればいいですか?」

「ああ、とりあえずチーズのティエルミを五つ作ってくれ!あと、トルマーバを六皿、それが済んだら干しブドウパンを三人分ほど切つて軽く火で炙っておいてくれ!」

チーズのティエルミとは、先日修一郎たちがここで食事をした際に追加注文した、水で戻して柔らかくしたドライトマトとタマネギとチーズをオーブンで焼いたものだ。

トルマーバとは、同じく修一郎たちが注文した、塩味の川魚のスープをベースとして、香辛料を加えた少し辛目のスープである。

「分かりました」

食器棚からオーブン料理用の深皿を五つ取り出し、調理台に並べると、次に水で戻されたドライトマトとタマネギをまな板に載せる。ドライトマトは適当な大きさに切り、タマネギは薄く輪切りにして、深皿にタマネギ、ドライトマトの順に盛り付けていく。

その後はそれらに軽く塩・胡椒を振り、バジルに似たハーブを散らして、最後にチーズを包丁で薄く切り、深皿の上に被せるように乗せる。

一連の行程が終わったら、五つの深皿をオーブンに入れて、今度はスープ用の皿を食器棚から持ち出す。

まるで自分の家の台所のように、手際よく仕事をこなす修一郎を横目に見ながら、「やっぱり惜しいな……」と呟いた猫人族の店主の声は、作業に集中する人間族の耳には届かなかった。

その後もパノーバから指示を受けて忙しく動き回っていた修一郎であったが、客の数が減ったのか厨房内もなんとか落ち着いてきたようだった。

「正直助かった。ここまで忙しいのは滅多にないんだがな。」

……「つたく、ラローズの野郎戻ってきたら少しばかりきつく言うておかんな」

「まあまあ。初めてならばそこまできつく叱らなくてもいいんじゃないですか。」

二度目なら……「まあ、そこはパノーバさんにお任せします」

鼻の頭に皺を寄せて怒っているパノーバを宥めながら、修一郎が苦笑する。

そんな遣り取りをしていると、店の裏口から当事者の声が聞こえてきた。

「すみません！戻りました！」

息を切らせながら戻ったラローズの手には大きな木箱が抱えられている。

「バカヤロウ！お前が確認を怠ったおかげでこっちは大変だったんだ！」

そのせいで昼に出せるはずだった料理は出せなくなるわ、配膳に手間取るわ、おまけにシユウイチロウにまで手伝わせるはめになっちまった。

食堂やつてる者なら、お客を待たせるような真似は絶対にやっちゃいけねえんだ！」

どうやら修一郎のフォローは効果がなかったらしく、戻ってきたばかりのラローズの頭上に大きな雷が落ちた。

「す、すみません……」

項垂れるラローズに何か声を掛けようかと迷っていた修一郎だったが、カウンター越しのプレルから、今度はパノーバに向かって叱責が飛ぶ。

「店にはまだお客さんがいるんだよ！怒鳴るならお客さんがいなくなっただけにしてちょうだい！」

然して大きくもない声だったが、効果は靦面だったようで、今まで威勢の良かったパノーバはぴんと立っていた耳を寝かせて「すまん……」と小さく呟くのだった。

項垂れる二人を見て、再び苦笑する修一郎だったが、ソーソリヴと自分の昼食のことを思い出して慌て始める。

「あ、拙い！昼飯買って帰らないと」

突然声を上げた修一郎に、パノーバが不思議そうな表情で尋ねる。

「なんだ？シユウイチロウ。もしかしてお前まだ昼飯食ってないのか？」

「食っていないも何も、昼飯食べようとここに来たらプレルさんに捕まったんですよ。」

拙いなあ……。今から食べてたら休憩終わってしまうだろうし……

……

「す、すいません、シユウイチロウさん。僕のせいでご迷惑をおかけしてしまっただようで……」

何やら考え込んでいる修一郎に、ラローズがさらに項垂れて謝罪する。

「手っ取り早く食えるモノといったら、燻製肉とトルマーバの残り」とパンくらいしかないが……。

持ち帰りとなると、トルマーバは難しいな。あとは」

同じように考え込んでいたパノーバが、現状を口にしようとした時、修一郎がいきなり顔を上げた。

「パノーバさん。厨房お借りしてもいいですか？」

「あ、ああ。それは構わんが。」

料理に使える食材なんて殆ど残ってないぞ？」

「いえ、なんとかかなると思います」

パノーバの許可を得た修一郎は、早速調理に取り掛かる。

余っていた干しブドウ入りのパンを、先ほどよりさらに薄く四枚ほど切り分け、片側の表面を軽く焦げ目がつく程度に炙る。

燻製肉とチーズも同様に薄くスライスし、干しブドウパンの焦がした面の上に燻製肉、チーズの順に重ねていく。

チーズの上に軽く胡椒を振り、半分干した状態でオリーブオイルに漬けてあったトマトを乗せ、塩を振る。

そうしたパンと片側を焦がしただけのパンを一つの金属トレイに乗せ、オーブンに入れる。

その間に、生で食べることの出来るサニーレタスに良く似た葉物野菜を水洗いして、パンと同じ大きさになるように数枚手で千切り、オレンジを二周りほど小さくした柑橘系の果物を半分に切って、絞った汁をその上に振り掛ける。

ちょうど頃合になったのか、オーブンからトレイを取り出し、チーズが熱でとろりと溶けたのを確認すると、その上に先ほどの野菜を乗せ、キツネ色に焼けたもう一枚のパンをその上に乗せる。

「これでいいかな」

ふうと一息吐いた修一郎を、パノーバとプレルは、さも面白そうに、ラローズは呆気にとられた表情で見つめていた。

「すみません、パノーバさん。かなり好き勝手に食材使わせていただきました」

つけていたエプロンを外しながら、修一郎が申し訳なさそうに言う。

「なあに、手伝ってもらった上に面白いモンまで見せて貰ったんだ。礼を言うのはこっちだよ。」

で?“コイツ”は何て料理なんだ?”

既に何度か、少なくとも一回は修一郎がこの世界にはない料理を作る場面を見ているのだろう、パノーバは修一郎の作ったモノを興味深げに見ながら訊ねてきた。

「これは“サンドイッチ”と言います。」

パンで食材を挟むだけなので、比較的短時間で作ることが出来ますし、色々な食材を挟むことで味の変化が楽しめますよ。

あと、片手で食べることが出来るのも利点としてありますね」

「へえ。そりゃ面白そうだ。」

なあ、シュウイチロウ。“コイツ”をウチの店で出してみたいんだがどうだろう?”

「え?それは構いませんけど……。」

そうだ。だったら」

パノーバの申し入れに何か思いついたのか、修一郎が口を開きかけたとき、市庁舎の親鐘が三つ鳴り響き、遅れて教会の子鐘が一つ鳴った。

「あ！いかん、休憩時間が！
パノーバさん、これの代金なんです……」

言いかけた修一郎にパノーバが笑って答える。

「ああ、いらんいらん。

さつきも言ったように、手伝ってもらったし、新しい料理も教えてもらったしな。

それからほれ、それを裸のまま持ち帰るわけにもいかんだろう？
これを使え」

そう言っつて、調理台の横に積まれていた箱から、バナナの葉のよ
うな大きな植物の葉を二枚取り出した。

魚の蒸し焼きに使われる葉で、サンドイッチ程度なら充分包むこ
とができる大きさだ。

「ありがとうございます！お言葉に甘えさせてもらいますね」

手際よくサンドイッチを包んだ修一郎は、厨房を後にしようとし
て、振り返った。

「そのサンドイッチのことですが、ちょっと私に考えがあるので、
今夜にでも話しましょう」

それだけ言っつと、その長い足をもつれさせるように走って店を出
て行っつた。

「また何か面白そうなことでも思いついたみたいね。

あの子が来るようになってからウチの店は世話になりっぱなしだ
わ」

そんな修一郎を微笑ましい眼差しで見ていたプレルは、楽しそうに呟いた。

「まっただ」

既に別の調理を始めるため調理台に向かっていたパノーバは、背中越しに答える。

「え？あの、シュウイチロウさんって一体……」

未だ状況が掴めていないラローズに、詳しく話そうとプレルが口を開きかけたその時。

「おかあさんもラローズにいちゃんもなまけてたらだめじゃない！」

厨房の入口で、腰に両手を充ててご立腹のクリユの姿があった。

修一郎が事務室に戻ったとき、ソーンリヴは様々な理由で機嫌が悪かった。

一つ、休憩時間が終わったというのになかなか帰ってこなかった修一郎に対して。

一つ、今日に限って朝食を抜いてしまっただけ空腹が限界に近かったことに対して。

一つ、漸く戻ってきた修一郎が持ってきた昼食に、嫌いなチーズが入っていたことに対して。

一つ、休憩時間が終わる直前、修一郎の知人だと名乗る女冒険者が事務室を訪れ、やたら偉そうな態度を取っていることに対して。一つ、その冒険者の容姿が、どう控え目に見ても自分とは比べ物にならないくらいに美しかったことに対して。

そういったことから、事務室に戻ってきた修一郎が一喝されるのはある意味必然だったのだろう。

最後の事柄については、八つ当たり以外の何ものでもないのだが。

「シユウイチロウ！お前はどれだけ昼食に時間をかければ気が済むんだ！

頼んだ物も、どこまで行って買ってきたのか知らんが、私は適当でいいと言っただろう！」

「すみません」

どんな理由であれ、遅れたのは間違いない。ソーンリヴの叱責は甘んじて受けるつもりで修一郎であった。

そこに第三者の声が割って入る。
事務室を訪れていた冒険者だ。

「そこまで怒る必要はないでしょう！？修一郎にも遅れる理由があったのかも知れないじゃない！

そもそも修一郎は、余程のことがない限り時間は守る人よ！」

興奮しているのか若干高くなつてはいるが、良く透る鈴のような声だった。

「え？」

ソーンリヴの剣幕のせいで今の今まで気付かなかつたのか、修一

郎が間の抜けた声を上げる。

「やつ！修一郎」

事務室入口から横にずれた場所で立っていた女冒険者に漸く気付いた修一郎が、声のした方向……右斜め後方に向くと、相手は笑顔で片手を上げて軽い調子で挨拶した。

腰上まで伸ばした流れるような黒い髪は、上質の絹糸を黒く染め上げたようで、この薄暗い事務室においても殆どその光沢を失っていないように見えた。

その黒い髪から少しだけ飛び出ている耳は、人間族の耳ともエルフ族の耳とも僅かに違っており、やや尖った形状は犬人族の耳に似ているが体毛は生えていない。

髪と同じ黒い瞳と吊り目がちの目、卵型の顔に、適度に高い鼻と小ぶりの唇といった造形は、大多数の者が美しいと感じることだろう。

歳の頃は二十歳前後くらいだろうか。そのままであればもう少し年上にも見えるだろうが、彼女の幼さの残る言動が年齢の特定を難しくしているようだ。

細身の体は、修一郎より若干低い程度で、人間族の女性であれば充分に長身だと言える。

ソーンリヴより幾分かは大きめな胸、くびれた腰、大きすぎない臀部に、女性らしさを残しつつ引き締まった体を覆う皮鎧と皮の籠手は、夏の草色に染められ、部分的に露出している小麦色にやけた肌は傷一つなく滑らかだった。

足には同じく夏草色の皮の脛当てと、冒険者が愛用する靴底・つま先・踵部分を鉄で補強したショートブーツを履いている。

本来なら腰に何らかの得物を差しているのだろうが、基本的に街中では冒険者や探鉱者の武器携行が禁止されているため、今は何もつけていないようだ。

旧知の顔を見た嬉しさからか、先ほどまで発していた怒気に近い感情は消え失せている。

「……フォンロシエさん？」

「もう！ロシエでいいって言ったでしょ！」

「うわっ!?!」

嬉しさを全身で表して、両手を広げて修一郎に飛びつく。
その様子を横目で見ていたソーンリヴが、真冬の吹きすさぶ風のような温度を伴った声でぼつりと呟いた。

「シュウイチロウ……。ここは職場だぞ……」

先輩事務員の纏う怒気と冷気に気付いた修一郎は、とりあえず場所を移すことにする。

「ソーンリヴさん……」。

あの、時間に遅れておいて申し訳ないんですけど、少しの間だけ席を外させてもらっていいでしょうか……?」

おずおずと訊ねる修一郎に、眉間に皺を寄せたソーンリヴは纏う雰囲気と声の温度をさらに低くする。

「とつくの昔に午後の就業時間なんだがな？」

今、この部屋で思い切り息を吐いたら、その息は白く染まるかも知れないなと心中で苦笑しながら、修一郎は言葉を重ねた。

「すぐ済ませますから。このままだと彼女、素直に帰ってくれそうもありませんし」

修一郎とほぼ変わらない身長の癖に、修一郎の首にぶらさがるように抱きついていていたフォンロシエが、急に何かに気付いたように声を上げる。

「ん？んん？」

小さく小高い鼻をひくひくと動かしながら、修一郎が未だ手に持っていた濃い緑の葉に包まれた物に視線を動かした。

「修一郎が持つてるのも、もしかしてアレ？」

そう言ってソーニンリヴの机の上に広げられた、包みの中身を指差す。

中身とは、勿論修一郎がプレルの店で作ってきたサンドイッチだ。

「ええ。そうですけど……」

修一郎がそう答えると、フォンロシエの笑顔が一層輝きを増した。

「やった！あたし、まだお昼ご飯食べてなかったのよねー！」

言うなり、修一郎から葉の包みを奪い取ると、早速開け始める。

「あ、そ、それは私の……」

「いーのいーの。固いこと言いつつなしょー」

瞬く間に包みを開いたフォンロシエは、躊躇うことなくサンドイッチに齧り付いた。

「ん〜！やっぱり修一郎の作った料理はおいしーねー！」

長い黒髪から覗く尖り気味の耳をぴくぴくと動かしながら、小さな口を精一杯開いてサンドイッチを頬張っている。

美しいというより、可愛いらしい仕草で食事をしているフォンロシエを、やれやれとばかりに苦笑しつつ見ていた修一郎に先輩事務員から言葉が飛ぶ。

「分かった分かった。さっさと行って来い。」

事務室でじゃれ付かれても仕事の邪魔になるだけだ」

怒るのも馬鹿らしくなったと言わんばかりの呆れ顔で、ソーンリヴは外に出て話せと促した。

「何よお！感動の再会を邪魔してんのはそつちでしょう！？」

別に子鐘一つほど話し込もうってわけでもないんだからいいじゃないの！

「だいたい客人に茶も出さないなんて、どういう」

ソーンリヴの言葉に、サンドイッチを食べるのを中断し、再び柳眉を吊り上げて反論しようとしたフォンロシエの耳に、修一郎の固い声が聞こえてくる。

「ロシエ。やめてください」

「あ……。ごめん、修一郎……」

見る間にしよげ返るフォンロシエの後ろに回り込むと、彼女の両肩に手を置いて、事務室の入口へと押しやりながら、修一郎は殊更申し訳なさそうにソーンリヴに告げた。

「すみません。それでは、少しだけ外に出てきます。すぐに戻りますから」

フォンロシエに何か言い返そうと口を開きかけていたソーンリヴは、ため息を一つ吐くと「ああ」とだけ応えた。

扉を開け、通路に出て行こうとした修一郎は、あることに思い当たったように振り返る。

「あ、あとその食べ物ですが、できるだけ温かいうちに食べちゃってください。

チーズが入ってますが、炙って溶かしてありますので、それほど歯触りは気にならないと思いますよ」

そう言い残すと、今度こそ本当に修一郎はフォンロシエを押して店の外へと向かった。

第四話 友人の想い

フォンロシエを伴って従業員用出入口から店の裏手に出た修一郎は、店のレンガ壁に背中をもたせかけて大きく息を吐いた。

既に昼の休憩時間は終わっており、目の前の石畳を、荷を積んだ馬車が大きな音をたてて通り過ぎていく。

太陽は中天にあるが、陽射しは夏のように照り付けるものではなく、控え目に降り注ぐといった表現が適切に思えた。

アルタスリーア王国は、アルベロテス大陸の南東部を占める大陸中二番目に大きな国だ。

北は大陸一の国土を有するバンルーガ王国に接し、西は『遺跡の国』の別名を持つルザル王国に接している。

南西部には大陸中最も狭い国土のウヴェンナツハ王国がある。

国土の形状としては、北に長く南が短い、少し歪なひし形をしていた。

北西の長辺の大半をバンルーガ、残りの長辺と南西の短辺の一部をルザル、残りをウヴェンナツハと、大陸に存在する他三国全てと国境を持っている形になる。

それ以外の方角は海に面しており、北東、東、南東に広がる海を東大海、南に広がる海を南大海と呼ぶ。

修一郎の世界で言う緯度で比較すると、日本よりはやや北に位置する。

フランス北部やオーストリアあたりが近いが、二つの大海に流れる海流の影響によって、アルタスリーアは日本に近い気候になっている。

春には花が咲き緑が芽吹き、夏には強い陽射しで草木が青々と茂り、秋には広葉樹が山を赤に黄に染め、そして冬には雪が国土の大

半に白い化粧を施す。

今は、秋から冬に移りかけの季節だ。

日中はやや涼しすぎるくらいがあるものの過ごしやすく、夜は冬になったかのように寒い。

修一郎の昼食を強奪して、その胃に収めたフォンロシエは満足そうな顔で「ごちさーさまでした」と手を合わせる。

修一郎から教わった向こうの世界の風習だ。

猛抗議を上げる自らの腹の虫を気にしないようにしながら、いつもより深い笑顔で修一郎は旧知の女性に話し掛ける。

「しかし驚きましたよ、ロシエ。この街に来ているなんて。

三年ぶりですか？」

「直前に受けてた依頼が、ティタデラ城砦までの隊商護衛だったからね。」

アーセナクトに修一郎がいるって噂は聞いてたから、会いたくなっついでに寄ってみたの。

「って、もう三年経つんだっけ？はっやいなー」

サンドイッチを包んでいた緑の葉を綺麗に折り畳んで、腰のポーチに入れていたフォンロシエが答える。

「ついでと言うには、結構離れてませんか？」

「ここへは馬車で？」

ティタデラ城砦は、かつてこの大陸で起こった“大戦”時に築かれた砦である。

周囲を二重の城壁と広く深い堀に囲まれた、正確には城塞都市であり、アーセナクトから馬車で五日、国境都市ゴステアから馬車

で二日の距離にある。

アーセナクトとゴステアの間というには、ゴステア寄りだが、それでも一般的にはアーセナクトとゴステアを結ぶ公路の中間地点という認識は強い。

「ううん。徒歩で来たわよ？」

途中、お金になりそうな物も色々手に入れながらね」

そう言つて、軽くウィンクするフォンロシエは、やはりどこか幼く見えた。

ティタデラ城砦から徒歩でここまで来たとなると、二十五日前後は要しているはずだ。

ついでに寄つてみたと軽く言える距離ではない。

となれば、アーセナクトに何かしらの用事があつたということなのだろう。

或いは本当に修一郎に会いに来たのか。

「そう言つて貰えるのは嬉しいのですが、本当の用件は別にあるのでしょうか？」

何とはなしに石畳を見つめていた視線をフォンロシエに移して、尋ねる。

「う……」

あっさりと真意を見抜かれて、言葉に詰まるフォンロシエに心の中で苦笑しながらも、修一郎は

「でも、嬉しかったですよ」

と、柔らかな笑顔で告げた。

どうやら店の荷卸し場では、王都アーオノシユよりさらに東に位置する、農業都市ナダルヌから届いた香油や香木の搬入が始まったようである。

ゼリガが部下に指示する大きな声が、ここまで響いていた。

「でも。まさか修一郎がこんな所で働いてたなんて思わなかったわ。

てつきり、小さい商店でも構えて上手くやってるだろうとばかり……」

傍目で見ても強引と分かるほど話題を変えながら、フォンロシエは修一郎の現状に言及する。

「慣れない者が店を持ったところで、上手くやっていけませんよ。行商人と違って、地に足をつけた商売をしなければなりません、周囲の競争店との商売上の駆け引きもあります。

子供の頃から修行を積んだ生粋の商人相手には、私のような付け焼刃では到底太刀打ちできません」

自分の店を持つ商人も、各地を廻る行商人も、商売における基本的スタンスは同じである。

客が求めているものを的確に判断し、仕入れ、販売する。その仕入先とも交渉し、少しでも仕入価格を下げさせたり自分に有利な条件を飲ませることに腐心する。商売敵の動向を探りその先手を打つ。もちろん、それをやり過ぎれば表に裏に制裁を食らう羽目になる。

そういったことは変わらないのだが、店を持った商人は、拠点となる“店”があることで、他人を雇うことができる。

他人を雇えば、それまでほぼ一人で行っていた情報収集や仕入れ交渉、決まった流通ルート確保、接客、売上金の管理などを分担

させることができるのだ。

比べて行商人は、大半が一人ないし二人程度で行動し、行く先々で商品の売買はもちろん、仕入れ交渉や情報収集を行わなければならない。

流通ルートの確保に関しては、そもそも行商人自らが赴くことが当たり前なので問題はないのだが、とある都市で仕入れた品物が、次の街に到着するまでに価値の変動が起こり原価割れを起すといったリスクがある。

簡単に言うなら、単に自分よりも早く他の行商人が目的の街に到着し、同じ商品売り捌いて、自分が街に着いた頃には、客に見向きもされなかったり、安く買い叩かれる場合もあるということだ。

特定の仕入先と販売先を確保した行商人が、その有利さを生かすために都市や町に店を構えるようになることがままあるのは、そういったリスクを嫌ってのことが多い。

「修一郎なら、そのあたりも上手くやっていけそうな気がするんだけどなあ」

それでも何やら言いたそうなフォンロシエに、修一郎は笑みを消さないまま続けた。

「この世界に来る前も、同じような所で事務員をやっていましたからね。」

多少の違いがあるとは言え、以前やってた仕事ですし、すぐに慣れることができましたから結果的にはこの仕事で良かったと思っていますよ。

……コタールさんからも色々叩き込まれましたし」

その名前に、フォンロシエは僅かに眉を顰めて修一郎の顔を見るが、修一郎の表情は変わっていない。ように見える。

だが、女冒険者はその変化に気づいていた。

冬が終わる直前の陽射しのように、頼りなげなそれでいて柔らかい、修一郎の特徴とも言える微笑が、強引に顔に貼り付けたように見えて、彼の内心を覆い隠しているように感じられる。

やはり言うしかないのか、そう心の中で大きくため息を吐いたフ
ォーンロシエは、暫し逡巡した後、その一言を告げた。

口調も今までとは違うものになっている。

「テイタデラ城砦に行く前にね、王都に寄ったの」

その言葉に、修一郎の表情が僅かに揺れる。

「そうですか」

その一言を発すると、雲一つない秋の空を見上げる修一郎。

また一台、修一郎たちの目の前を積荷を満載した荷馬車が通り過ぎ
ぎていく。

「そういえば、ロシエはこの街にしばらく居るんですか？

ロシエが居るということは“彼”も居るのでしょうか？」

いつもの笑顔に戻って明るい声で、今度は向こうから話題を変えてきた修一郎に、彼女も乗ることにしたようだ。

「そうね。それなりにお金も貯まったし、一週間くらいは滞在するつもり。」

ここに来る道中、売れる物もそこそこ手に入ったしね。

今はそれを“アイツ”に売りに行かせてるのよ」

そう言って、修一郎の横に並び、同じように壁に背中をもたせか

けるフォーンロシエ。

短い沈黙が二人の間を流れるが、フォーンロシエがそれを破る。

「それで、どう？今の生活は楽しい？」

言われて横を見ると、修一郎を案じている色を浮かべた瞳が目に飛び込んでくる。

お互い不自然なまでの話題の転換に加え、先ほどと同じような質問なのだが、修一郎は素直に答えることにした。

「ええ。毎日楽しくやってますよ。」

この店の先輩方や街の方々にも親切にしてもらってますし」

「そうみたいね」

笑って答える修一郎の表情に、嘘はないのだろうと感じたフォーンロシエは、安心したような、寂しいような複雑な表情を見せた。

「この街に、永住する気なの？」

何の気なしにという体を装って発したそれは、先ほどはぼかしていた質問を直截的にしたものであり、フォーンロシエが二番目に訊きたかった質問。

かつて、彼が属する隊商を護衛しながら大陸中を旅したことは、フォーンロシエに取って忘れられない思い出となっている。楽しくて苦い、そんな思い出である。

「……まだ、決めかねています。」

けれど、ここに腰を落ち着けてもいいかも知れない、とも思っています」

それが修一郎の隠さない本音だった。

先ほど作ったばかりの笑顔は消えている。

フォンロシエも笑顔が消して、ぽつりと呟く。

「……王都で、クレルミロン夫人に会ったよ」

「……いつ頃ですか？」

「ん。半年前」

「ハーベラさんは？」

「幸せそうだった」

「お子さんは？」

「四人とも元気だったよ。上の三人は成人して、騎士と警護団員と医術士になってた。四人目は学校に通ってるって」

「そうですか……」

フォンロシエは、修一郎が安堵の息を漏らした音を確かに聴いた。

「会いに……行ってあげないの？」

躊躇いながらも発したその言葉こそ、彼女が一番訊きたかった問いだった。

それは以前にも修一郎に投げ掛けた問いであったが、その時の答

えはいつも拒絶だった。

訊ねるたびに、修一郎の顔から表情が消える。いや、微かに表情は読み取れる。

しかし、それは後悔や怒り、悲しみといった負の感情が、極々僅かに分かるだけで、前向きな感情が表に出ることはなかった。

そんな表情を見るのが嫌で、その問いを修一郎に投げつけることに、フォンロシエは少なからぬ勇気が必要とした。

だが、彼女たちがアーセナクトを訪れたのは、このことを告げるのが目的だったのだ。

「彼女も会いたって」

それが、クレルミロン夫人の依頼。

旧姓ハーベラ・アペンツェル、コタール・アペンツェルの妻であった女性だ。

ハーベラ・クレルミロン夫人の依頼は、修一郎に自分の現状と、再会したい旨の伝言、そしてそれに対する返答を持ち帰ること。

期限は決められていなかった。

依頼の半分を果たしたフォンロシエは、黙って修一郎の返答を待つ。

「そうですね……。できれば、もう少し時間をいただきたいところです」

いつもの口調に戻った修一郎の表情は、笑顔こそなかったものの固さは消えていた。

「ですが、そう遠くないうちに会いに行きますよ」

「え……?」

半ば色よい返事を諦めていたフォンロシエは、驚きを込めて修一郎を見つめる。

「もちろん、今すぐというわけにはいきません。

この仕事に就いてまだ二ヶ月しか経っていませんし、漸く街での生活にも慣れてきたところですから。

ですが……そうですね、来年の春あたりに時間が取れれば、王都に遊びに行きますよ」

「……本当？」

「ええ」

「その場凌ぎの返事とかじゃない？」

「誓ってもいいですよ」

「ありがとう、修一郎！」

目尻に涙を光らせながら礼を言うフォンロシエに、修一郎は慈しみを込めた笑顔で告げる。

「お礼を言うのはこちらですよ、ロシエ。

ありがとう。ハーベラさんや私を気遣ってくれて」

「ううん！そんなことない！本当に嬉しいんだよ、私！」

修一郎に向き直り、両の拳を胸の前で握り締めて喜びを力説するフォンロシエは、今にも修一郎に抱き付きそうだ。

「では、ハーベラさんにはそのように伝えておいてください。
そろそろ私は仕事に戻らなくてはいけません。
怖い先輩が牙を研いで待ち受けているでしょうからね」

少しおどけて言う修一郎に、小さく笑い返ししながら「あの人怖そうだもんね」とフォンロシエは応じた。

今までの張り詰めた雰囲気はなく、事務室で再会した時のように幼さを感じさせる言動に戻っている。

「一週間ほどこの街にいるなら、また夜にでも一緒に食事をしまし
よう。」

もちろん“彼”も交えてね」

そう言いながら、逗留する宿の名前をフォンロシエから教えて貰うと、修一郎は店の中へと入っていった。

依頼としても、個人的感情からしても、最高に近い結果を得られた黒髪の女冒険者は跳ねる様な足取りで、パートナーの待つ広場へと消えて行く。

そして、事務室に戻った修一郎が見たのは、今まさにサンドイッチの最後の一片を食べようと口を開けたソーンリヴの姿だった。

フォンロシエが修一郎を訪ねてから三日。

いつもの通り仕事を終え、いつもの面子でプレルの店に来ていた修一郎は、フォンロシエの襲撃を受けた。

店にやってきたその女冒険者は既に出来上がっているようで、初

対面のはずのゼリガやクローフルテに、古くからの友人のように馴れ馴れしく接し、二人の目を白黒させている様は、正しく襲撃という言葉が相応しい。

あまり騒がしくすると店を追い出されるかも知れないな、と考えながら、修一郎は彼女の連れに一応確認しておく。

「ロシエにお酒を飲ませたんですか？」

問われた相手は、疲れた口調で謝罪を口にした。

「すまん。いつの間にか勝手に注文されていたのだ」

「はあ……。ロシエを止めるのは貴方の仕事でしょうか？グラナ」

「返す言葉もない」

そう言っただきな体を小さくしているのは、狼人族の男性だった。青みのかかった灰色の毛皮に包まれた体は、同席しているゼリガより一回り大きく、腕などはちよつとした丸太のような太さがある。体つきは犬人族や猫人族同様、人間族と同じだが、首の上には狼の頭部があり、耳は正に叱られている犬のように伏せられていた。

武器こそ佩いてないものの、上半身は部分部分を鋼板で補強された皮鎧を着込み、下半身は冒険者が愛用する厚手の皮のズボンに鉄靴を履いている。

皮のズボンの尻には穴が開けられており、そこから尻尾が覗いているのだが、今は耳同様に小さく萎れたままである。

彼の座る椅子の横には円形の盾と背囊が置かれており、冒険者の完全武装に近い状態だ。

「とりあえず。ロシエは、これ以上、お酒を飲んでは、いけません」

からね？」

一言一言噛み締めるように言う修一郎に、当の本人は「はい」などと呑気に答えている。

「すみません、ゼリガさん、クローフルテ・マイヤックさん。

この二人は、私の古い友人なんです。

彼女のほうは、ちょっとお酒が入っていて騒がしくなるかも知れませんが、大目に見てあげてください」

そう言って謝る修一郎に合わせて、グラナも頭を下げる。

「迷惑をかける」

そんな二人を見て、ゼリガとクローフルテは慌てていた。

特に狼人族に頭を下げられた犬人族のゼリガの慌て様は、普段見たことがないものだった。

「いえ。私は気にしていませんので、お気になさらず」

「あ、ああ！お、俺も気にしちゃいね……していませんから、頭を上げてくれ……ください」

「ゼリガ殿。俺は狼人族の中でも変わり者と呼ばれている。種族間の因習は気にしなくていい」

ゼリガとグラナの遣り取りは、この世界では珍しいものと言える。数ある獣人族において、その中に上位種族と呼ばれる者たちがいる。

犬人族に対して狼人族がそうであり、猫人族に対して虎人族がそ

うであるように。

獅子人族に関しては、滅多に都市や街といった雑多な種族が暮らす場所に姿を現すことがないため、他種族との関係は良く分かっていないが、上位種族に位置することだけは確かなようだ。

そして、その上位種族は自らの下位種族に対して、服従に近い態度を要求することで知られている。

他種族に対しても、あまり変わらず友好的と言うよりも尊大な態度で接する者も多い。

一般的には、今回のように犬人族と狼人族が同じテーブルに付くことはなく、もしそのような事態になった時は、犬人族が席を譲るのが常であった。

クローフルテもそれを知っているので、グラナの態度にかなり驚いている。

表情は然程変わってはいなかったが。

「わ、わかった。とにかく頭を上げてくれ。」

あと、俺のことは呼び捨てで構わねえからよ、グラナ……さん」

「そうか。では、俺のことも呼び捨てで構わん。」

それに、俺は冒険者だ。堅苦しい会話は苦手だ」

そう言うグラナの口調自体、ゼリガや修一郎からすると堅苦しいと感じられるのだが、これは本人の普段の言葉遣いであった。

だが、同僚にイルーという、似たような喋り方をする者がいるため、彼と接する時と同じようにすればいいかとゼリガは思うことにした。

「そおよおー。あたしたちはあ、ぼーけんしゃなんだからー。」

もおっと気楽に喋ればいいのよー」

ゼリガとグラナの会話を聞いていたフォーンロシエが、やや呂律の怪しくなった口調で割り込んでくる。

「だぁーいたい、そおんなこと言つてたらぁー、あたしなんて人間族とお狼人族とぉー、おまけにエルフ族の混血うーなんだしー。誰に対してえ、態度を変えるとかー、めーんどくさくてえ、いちち考えてらんないわよぉー」

その言葉に、再びクロールフルテとゼリガが驚愕する。

「えっ……！？」

「何い！？」

ゼリガのほぼ正面に座っているグラナが、隣に座る酔っ払った相方の後頭部を軽く叩く。

「馬鹿者。酔った勢いで自らの素性を簡単に明かすなと何度言えば分かる」

「いったぁーいつ！なぁにすんのよぉー」

フォーンロシエの抗議を無視して、グラナはそれとなく周囲のテーブルを見渡す。

修一郎たちは、今日は個室ではなくホールにある円テーブルに陣取っていた。当然、周囲には他の客も居る。

しばらく観察して、こちらを窺うような客がいないことに安心すると、狼人族の冒険者は、再度三種族混血の女冒険者の頭を小突いた。

長い鼻の先に少しだけ皺を寄せた渋い表情の狼人族と、「だぁっ

てえー」などとぼやいている人間族・狼人族・エルフ族の血を持つ外見は成人女性の、二人の旧友に顔を綻ばせる修一郎だった。

この世界には様々な種族が居る。

今でこそ、複数の種族が一つの都市や町、村といった共同体に属して暮らしているが、七百年前まではそういった事例は見られなかったことだ。

人間族は人間族だけで集まって町を作り国を作り、犬人族は犬人族だけの集落で暮らす。

それが当たり前であった。

そして、それらの共同体の間では経済的、文化的な交流も皆無に近い状態であった。

結果、当然のように相互理解の不足による偏見や差別意識が生まれ、小さな争いが頻発していた。

ある時、能力的には突出したものがないが、数で他種族を圧倒する人間族が、とある妖精族に対し戦いを仕掛けた。

レプラコーンと呼ばれる大地と貴金属の妖精族で、そこそこの魔力を持つものの、種族全体での個体数も然程多くなく、戦闘に長けた種族でもなかったため、瞬間に彼らは滅ぼされた。

一説には、レプラコーンの固有技能である『金脈探知』に目をつけたある国の王が、欲に目を眩ませ兵を動かしたとも言われている。これが元になったのか、それ以降、大陸各地で決して小さくない戦闘が繰り返られることとなった。

種族間戦争。当初はそう呼ばれていた。

しかし、その戦いは、当時アルペロテス大陸に存在していた人間族の国家間戦争へと発展する。

自らよりも下位の存在であると思っている他種族への対応と、同族である人間族の他国家への対応。

各々の国が、各々の国土に存在する獣人族や妖精族との戦と、隣接する人間族の国々との戦を同時に行うという、まともな思考を持つている者なら、まず選ばないであろう戦略を、何故か各国が採り続けており、泥沼状態であった。

それに関与していたのが、今でも一部の心無い者が使う“異種混血”或いは単に“混血”と呼ばれる人々であった、と記録には書かれている。

どのように関与していたのかは、各国の王族が保管している書物にしか残されていないため詳細は不明である。

噂では様々なことが言われているが、現在まで真相は明らかにされていないし、今後もされることはないだろう。

ともあれ、二十年に亘って続いた種族間戦争と国家間戦争によって、二つの人間族の国が消滅し、三種族の獣人族、五種族の妖精族が滅ぼされた。

そして、長く続いた戦に疲弊した人々の意識が、戦争終結に向きはじめた頃、新たな火種が投下された。

公にはそれまで沈黙して殆ど動きを見せなかった“教会”が、『聖戦』の大義名分を掲げ、異種族に攻撃を始めたのだ。

“教会”によれば、この戦争を引き起こしたのは、獣人族や妖精族であり、彼らは人間族に害悪をもたらす存在でしかない。即ち、それは人間族を慈しみ護ってくださいる神の敵であり、討ち滅ぼすべし。というものであった。

一部の国では、既に異種族に対し和平を結ぶ準備を行っているところもあり、同様に隣国との終戦協定の下地を整えつつあるところもあった。

既に、国が抱える兵の半数近くが戦争によって失われ、戦火によって国土が荒れ、国を支える一次産業、二次産業に従事する国民の数も激減している。

そんな状態で、今更獣人族や妖精族と戦争を続けることは愚策でしかなく、到底許容できない。

そう言つて翻意を促す各国の王に、以前より力を付けてきていた“教会”は、頑なに継戦を主張した。

当時の“教会”は、大陸全土の人間族に対して多大な影響力を有しており、王族ですら、“教会”からして見れば、多少力のある一信者でしかなかった。

それまでも、その影響力で国政にまで口を出してきていた“教会”であつたが、この戦を機に、さらに己が影響力を強めようと考へていることは、国王だけでなく、一般の国民ですら理解できた。

統治者、民共に厭戦意識が高まつている中、狂つた猿のように、獣人族を滅ぼせ！妖精族を消し去れ！と口角泡を飛ばして喚いていた、アルタスリーア国にいた司教が、“教会”の保有する兵を率いて王都から少し離れた森の中あつた犬人族の集落を襲い、殺戮と略奪を行つた。

結果は、犬人族の全滅であつた。

その集落には、既に国王の名前で和平を申し入れる旨の書簡が届けられており、族長からそれに応じる旨の返答を得た矢先の出来事だつた。

王に断りも入れず、独自に兵を動かし、首脳部が進めていた計画を台無しにした司教は、凱旋と称し王都に戻ると、自らの行いを神が望んだことだと声高に叫んだ。

その司教を見て、当時のアルタスリーア王は、遂にある決断をした。

大陸に存在する、大小七つに及ぶ人間族の国王、そして五十を超える獣人族と妖精族への統治者へ向けて、“教会”こそがこの戦争を拡大させた張本人であり、“教会”を打ち倒し大陸に平和をもたらすことが最優先であり、アルタスリーアはその尖兵となると、伝えたのだ。

それが行き渡ると同時に、アルタスリーア王は自らが先頭に立ち、教会の最高位者である教皇を処刑した。

教皇を補佐していた大司教や司教は捕縛し、抵抗する“教会”関

係者はその場で斬り伏せ、教会の無力化を一晚のうちにやり遂げることで、他の国家や種族へ行動を持って示し、“教会”に対しての宣戦布告とした。

加えて、“教会”の教皇私室にて彼が不当に溜め込んでいた私財を押収・公表し、隠匿されていた過去十数年の資料から、“異種混血”を用いて、戦争の長期化を図っていたことも突き止め、これを国内に限らず大陸中の国家や各種族に公表した。

これにより、各国及び各種族は、一つの敵のために手を結ぶことになり、執拗な抵抗を受けたものの、“教会”関係者は悉く死罪もしくは投獄されることになった。

そして、捕縛した“教会”関係者を尋問していた兵士から、驚くべき事実がバンルーガ王の下に届けられた。

“教会”が計画していたのは、二段階に分けられたもので、第一段階が、布教活動による人心の誘導、各国国内の有力者である信徒への協力依頼、獣人族や妖精族へ対する敵意の醸成といったものであり、第二段階が、いざ戦闘になった際には、戦場に魔獣を召喚し、さらに戦線の混乱を誘発させ、それを獣人族や妖精族が行ったことに仕立て上げるといったものだった。

魔獣とは魔力に負けて凶暴化した野生生物や、人工的に作られた生物、神話の時代から存在し周囲の者に被害をもたらす存在の総称だ。

これを知ったバンルーガ王は、激怒し、国内の“教会”関係者全員を斬首刑とした。

その後、バンルーガ王は、アルタスリーア王に対し、彼の意思に賛同する旨を伝え、彼と同じく国内の他種族の代表者へ向けて書簡を届けさせた。

そうして、アルタスリーア、バンルーガと拮がつていった“教会”打倒の気運は大陸中に及び、終には彼らを滅ぼすことに表向きは成功した。

ここに至るまで、実に四十年以上という長い年月を要したことに、

戦いに加わった者たちは様々な感情を抱いた。

“教会”が大陸中に広く深く根を拡げていたことに対する恐怖、一つの組織を壊滅させるのに要した時間に対する驚き、他種族が引き起こした戦いで同族を失うことになった者たちの怒り、そして、未だどこかに“教会”関係者が潜んでいるのではないかという不安。

ああいった輩は、どんなに風潰しにしても必ず少数は生き残る。

そういった者が起す行動は大体二つに一つだ。

組織の再興を諦めるか、地下に潜って力を蓄えつつ再起の機会を窺うか。

まず後者であろう、というのが戦後処理のためにウヴェンナツハの王城に集まった、各国の王と各種族の代表者・統治者の意見であった。

そこでウヴェンナツハ王の提案がなされる。

人々の心の拠り所として、神は……教会は必要である。

だが、今回のようにまた力をつけられ国政に口出しされては困る。そこで、敬う神を変えることなく新しい教会を設立し、一切特別な権限を与えず、人々に奉仕させることにすればどうか。

同時に、魔法院の機能を拡張し、それまで教会が一手に引き受けていた『明かり』や『発火』といった極初歩の魔法の指導や、医療に関する知識と技術、それに類する治癒魔法を、国と魔法院で共同管理してはどうかと。

つまり、新しい教会の権限を最低限に止め、国の監視下に置いて迂闊な行動を起させないようにすれば良いのではないかと言うものだった。

信仰の対象のみの教会であればよい。

力を求めるのはかつての教会関係者のような輩であって、それ以外の者にとっては神を敬うための教会であればいいのだから。

ウヴェンナツハ王の案に賛成したのは、その場に居た全員であったと伝えられている。

そうして、様々な意味を込めて『大戦』と呼ばれる六十年に亘る、

戦は終結を迎えた。

その後、それぞれの代表が集まり、互いの共同体での人的遣り取りや交易、文化交流を頻繁に行うことに同意がなされることとなった。

滅ぼされていない種族で、その場に出席していなかった種族には、『伝達』で予め説明し、後日各国の王が直接現地に赴き、改めて内容を伝えるという形をとった。

ただ、大本の戦は、人間族側が一方的にレプラコーン族を虐殺したことが引き金であり、それが口火となって戦火が拡大することになったのも事実であるため、人間族から獣人族と妖精族へ正式に謝罪することとなった。

また、“教会”に利用された立場の“異種混血”者に対し、戦争責任を問うことはせず、人間族を含めた他種族と同等に扱うことも定められた。

そういった様々な事項を纏めて文章化されたものが“大陸憲章”と呼ばれ、当時の国王、各種族の代表者・統治者へと渡された。

それから六百三十年。

いくつかの国が平和的に統合され、いくつかの種族は大陸憲章に従うと誓約しつつ、他者の目を嫌うように森の奥深くや高山地域に移っていった。

アルベロテス大陸には四国家しか残っていないが、その憲章は未だ守られ続けている。

六百年以上の長い年月により、人々の意識は変化し、種族間のわだかまりはほぼ無くなったと言っていい。

多くの都市や町、村に獣人族や妖精族が居を構え、ある者は商人に、ある者は警護団に、ある者は職人にと、様々な職業に就き、暮らしている。

一般的な人々は、種族の違いなど殆ど気にしなくなり、中にはフオーンロシエの先祖のように異種族間で結ばれる者たちも居る。

ただ、陽の下で普通に暮らしていても、地に落ちる影は消せないのと同様に、極稀に、“混血”に忌避感を持つ者が居ることは確かだ。

一度は終結しかけた戦争を、さらに拡げる原因となった“混血”者というレッテルは、そう簡単に消せるものではないのかも知れない。

それが、実は裏で旧“教会”が仕組んだことであり、“混血”者自身も被害者であるという事実を理解したうえでも、だ。

単なる興味で見られるだけなら構わないが、酔いに任せて絡んできたり、口にするのも憚られる言葉でいきなり斬りかかって来る者も居ないわけではない。

グラナが心配したのはそういった輩だった。

「大丈夫ですよ、グラナさん。」

この食堂では、プレルさんが絶対者なんです。

おかしな真似をする人は、即刻叩き出されてしまいますから」

旧友を少しでも安心させようと、笑顔を浮かべたまま言う修一郎に、ゼリガが追従する。

「そうそう。ここじゃ盗賊だろうが冒険者だろうが騎士様だろうが、鬼のプレルに敵う奴あ居やしねえからな！」

それにシユーの友人なら俺の友人でもあるってことだ。

いざとなりや盾くらいにやなっぺやるさ！」

そう言って豪快に笑うゼリガの横では、クローフルテも頷いている。

「頼もしいな。助かる」

厳しい表情だったグラナが、緊張を解いたように相好を崩す。その直後、この食堂の又シである猫人族の声が修一郎たちに投げかけられた。

「だあれが絶対者で鬼だつて？」

お望みどおり叩き出してあげようか？ んん？」

その言葉に、修一郎やゼリガはおろか、酔っ払っていたはずのフオーンロシエも背筋を伸ばし硬直した。

心なしかグラナの姿勢も正されているように見える。

ただ一人、いつもと変わらぬ無表情のクローフルテだけが、自分のコップに注がれたザクロのジュースを口に運んでいた。

「では、グラナさん、ロシエ。

ハーベラさん……クレルミロン夫人への伝言、お願いしますね」

今、修一郎たちはアーセナクトの東口にある、路線馬車の停留所に居た。

アルタスリーアの先々代国王の時代から計画・施工されてきた公路の整備と、各都市を結ぶ路線馬車の設置は、冒険者や行商人といった旅行者にとって非常に助かるものである。

石畳で舗装された公路は、大雨が降っても通行可能であるよう排水にも配慮されたうえに、馬車の一日当たりの移動距離に合わせた地点には、修一郎の世界で言うところの宿場町のような集落が設けられ、王国が出資した宿屋と数軒の商店があつて、路線馬車を利用すれば野宿や夜を徹して馬車を走らせる必要もない。

徒歩で移動する者には、路線馬車と同様に、徒歩で一日辺り移動可能な距離ごとに、石造りの休憩施設が建てられ、徒歩の旅行者がそこまで辿り着ければ夜露をしのげるように考慮されていた。

フオーンロシエたちが移動に路線馬車を選んだのは、一日でも早くクレルミロン夫人に、修一郎の返事を伝えるためであり、修一郎から依頼された仕事をこなすためでもあった。

「任せといて！ちゃんと伝えるから！」

そう言つて、やや小ぶりな胸をそらすフオーンロシエの横では、グラナが修一郎の依頼について確認している。

「ナダル又で情報を集めて、可能であればそこで仕入れる。」

ナダル又になれば、ダリンからイレ・マバル諸島に渡つて、同様に情報収集。

これで間違いないか？」

「はい。特徴は既にお伝えした通りですが、もし農産物商に訊いて該当するものがない時は、念のため街の調薬士や周辺の農家にも確認してみてください。」

流通には乗らず、現地で消費されている可能性もありませんから。

それで見当たらないようでしたら、その地域にはないということでしょう。

それと、イレ・マバル行きは無理しなくていいですかね？

渡航費用もバカになりませんし、危険も伴うでしょうし」

「分かっている。無理はするつもりはない」

穏やかな、それでいてしつかりとした意思を感じさせる眼差しで

答える狼人族に、黒髪の相方が後からおぶさるよつに飛び付いて答える。

正午を少し過ぎた、気持ちの良い青空の下、その長い黒髪が陽光を反射してきらきらと輝く。

「そつちも任せといてよ！しっかり見つけて来るからね！」

「ええ、期待してますよ」

いつもの笑顔で旧友と言葉を交わしているうちに、路線馬車の御者が出発時刻であることを告げる。

「それでは、また」

「ああ、またな」

「それじゃあ修一郎、またね！」

冒険者の別れの挨拶である「また会おう」という言葉で、三人は別れた。

アーセナクトから王都アーオノシュまでは馬車で二日。

アーオノシュに二、三日滞在して、アーオノシュから農業都市ナダル又まで馬車で四日。

ナダル又で修一郎が探すモノが見つからなければ、アーオノシュまで戻ってダリン直行の馬車で三日半。

ナダル又で調査する日程を二日程度と考えれば、イレ・マバル諸島まで行かないと仮定して、二人がアーセナクトに戻ってくるまでは二十日前後かかるだろう。

ダリンから出ている船でイレ・マバルまで渡って戻ってくるとなると、二ヶ月以上はかかるかも知れない。

次に会うのは年明けになるかも知れないな、などと考えながら、
修一郎は自分の職場であるマリポー商店へと戻っていった。

第五話 新たな縁

冬の一月、修一郎の世界で言えば十一月になって数日経ったある日のこと。

前日の売上金を、市庁舎内にある資産保管局に預け入れに行った修一郎が、事務室に戻ってくるなり口を開いた。

「ソーンリヴさん、私に付き合って貰えませんか」

時刻は、もうじき大鐘三つ（正午）である。

昼食を買ったために外に出るつもりであったソーンリヴは、殆ど考えることなく応じた。

「構わんが、何かあったのか？」

「いえ、別に仕事で問題があったわけではないです。

ちよつと行きたいところがあります。

昼をご一緒させて貰って、そのまま向かいたいのですが、いいですか？」

「分かった。だが、その前に入金確認票を寄越せ。

資産出納簿に書き込んでおく」

何やら浮き足立っている様子の修一郎を一睨みして、ソーンリヴは手の平を突き出した。

入金確認票とは、資産保管局が発行する証明書である。

その資産保管局とは、こちらの世界の銀行であり、その名の通り現金や貴金属の預かりや払い戻しを業務としている部署である。

主要都市の市庁舎には必ず窓口が設置され、本部は王都にあり、その他の都市にある保管局は支部となる。

国が運営しているためか、取り扱い手数料は無料だが、毎年決まった時期に使用税として、各々が預けている資産を貨幣換算した二十分の一相当額に、基本料を加算した額を税金として納めなければならぬ。

その資産保管局に金銭を保管依頼……つまりは預け入れした際に発行されるのが入金確認票で、引き出しを行った際に発行されるのが出金確認票になる。

ちなみに、修一郎の世界の銀行のように、口座振込みや自動引き落としといったサービスは行われていない。

「あ、すみません。お願いします」

制服のポケットから、小さな羊皮紙製の入金確認票を取り出してソーンリヴに渡しながらも、修一郎は未だどこか落ち着かない様子だ。

「だいたい、まだ鐘は鳴っていないんだ。

何をそんなに慌てているのか知らんが、少しは落ち着け」

資産出納簿と金銭出納簿に手早く記帳し、専用の木箱に受け取った入金確認票を収めながら、先輩事務員は相変わらず頼りない部下を窘める。

そうするうちに、市庁舎の親鐘が鳴り響き、正午になったことを告げた。

「よし、では行くつか」

ソーンリヴは、椅子の背もたれに掛けてあった薄手の上着を制服

の上から羽織ると、修一郎を連れて事務室を後にした。

手軽に済ませましょうと言う修一郎にせつつかれ、仕方なしに露店で昼食を摂ったソーンリヴは、商業地区の西にある、通称“職人通り”の一角にやって来ていた。

目の前の小さな木造の建物には、レベックの工房と書かれた木製の看板が吊り下げられている。

「なんだ。レベックさんのところじゃないか。

ライターのことでは何かあったのか？」

現在、レベックの工房で最も生産に力を入れているのがライターであり、ライターへの刻印と購入者の口コミの効果があったのか、マリポー商店でもライター本体、消耗品共に入荷後即完売という状況で、本体に至っては二週間先まで予約で埋まっている。

そうだった理由から、レベックの工房へと連れて来られたソーンリヴは、ライターに関して何か新たな事務手続きが発生したのかと考えたのだが、修一郎は逆に不思議そうな表情で訊き返してくる。

「いえ。ライターに関しては順調すぎるくらい順調で何も問題ありませんよ？」

今日、ここに来てもらったのはそれとは全くの別件です」

にこやかに工房へと入っていく修一郎に、首をかしげながらもソーンリヴが続く。

工房の中は、金属加工用の炉が炊かれているためか、外よりも暖

かかった。

鉄を打ちつける鎚の音が室内に響き、その合間を縫うように木材を加工するノミの音が小さく聞こえてくる。

工房は、修一郎たちの職場である事務室と変わらない程度の広さで、奥には職人たちの休憩用と思われる扉のない小部屋が見えた。

板張りの床には、大小様々な形の木片や、石の欠片が落ちており、今日も早くから作業を行っていたであろうことが容易に想像できる。工房内で働く職人は、レベックを含めて五人ほどで、うち三人がノーム族、一人が人間族、一人がドワーフ族で、全員が男性であった。

ライター製作に合わせて雇った者というのは、ドワーフ族の男性のことだろう、今正に炉の傍で一心不乱に鎚を振るっている。

皆、麻のシャツに麻のズボンといった簡素な服装で、背中や首周りや脇の下を汗で濡らして各々の作業に集中しているようだ。

工房の入口に立つ修一郎に気づいたノーム族の中年らしき男が、話しかけてくる。

髭を生やしていなかったことと、その声から中年と判断したのだが、もしかしたら修一郎より若いのかも知れない。

獣人族ほどではないが、妖精族も外見から年齢を知るの容易ではなかった。

「よお、シュウイチロウ。親方なら奥に居るぞ」

工房奥の小部屋を親指で指した男は、そちらに向かって声を張り上げた。

「親方！シュウイチロウたちが来たぞ！」

「おう、待っておったぞ。二人ともこっちへ来い」

小部屋から顔を出したレベックは、手の甲を上にして上下に振り、手招きの仕草をする。

こちらの世界では、人を呼ぶときの仕草は欧米式ではなく日本式なんだなと思いつつ、修一郎は作業の邪魔にならないよう、職人たちの間をゆつくりと通り抜けながら小部屋へと向かった。

小部屋に入ると、予想通りそこは職人たちの休憩所であった。

簡素だが作りのしつかりしたテーブルの横には、蓋をされた大きな水がめと柄杓が置いてあり、職人が自由に水を飲めるようになっている。

アーセナクトを含め、王国内の主要都市には上下水道が敷設されているのだが、レベックの工房は住居兼用ではないためか、水道は通っていないようだ。

部屋の入口から見て左側は、一段高くなっており、板張りの床に草で編まれた莫座のような敷物が敷いてあった。

おそらくそこで横になって休憩したりするのだろうが、今は余計な物は壁際に纏められ、小さな木製の箱と奇妙な形に曲げられた針金が数本、広げられた布の上に置いてある。

休憩室に入ってきた修一郎に、レベックの声がかけられる。

「今回は前にも増して厄介な依頼じゃったわい。

ウチはお前さん専属の工房ではないんじゃないの？」

ぎろりと修一郎を睨むと、レベックは小箱の蓋を開けた。

小箱の中は、中央を薄い木板で仕切られ、左右それぞれに透明な薄い板が十枚ずつ収められている。

その透明な板も、互いに擦れ合っただけで傷が付かないように、木板で一枚一枚仕切られているようだ。

修一郎に遅れて休憩室に入ってきたソーンリヴは、それらの正体に見当がつかないらしく、黙って見つめている。

「それに関しては、本当にお礼を言うほかありません。ですが、ある意味“私たち”にとってはライターより必要なものなんですよ」

そう言つて頭を下げる修一郎に、「まあええわい」と呟くと、レベックは準備に取り掛かった。

「それじゃあ、まずはシユウイチロウからじゃな。

コイツに一番から十番まで番号がふつてある板を詰め込んで、向こうの壁の文字を読んでみてくれ」

奇妙な形をした針金の一つを修一郎に渡しながら、小箱を目の前に置く。

良く見ると、透明な板の隅には一から十までの番号が小さく書き込まれており、それぞれが微妙に厚みの違うガラスで出来ているようだ。

「コイツは飽くまでも試着用じゃから、基本的な形にしか作っておらん。

ガラス板は上から差し込めば、簡単に固定できるじゃろうから、早速試してみてくれ」

コイツと呼ばれたための針金は、修一郎の国で使われる片仮名のコの字型に近いが、“コ”の上辺と下辺が長い柄のようになってい

る。“コ”の縦辺には、下弦の月の外側だけを模つたような窪みが横に二つ並んでおり、針金の窪んだ部分には溝が彫られていて、ガラス板を填めることが出来そうだ。

修一郎は一つ頷くと、一番と書かれたガラス板を針金の二つの窪みに詰め込んで、針金を顔に装着する。

長い柄のように伸びた部分を左右の耳の上に乗せると、上手い具合に固定されたようで、ガラス板が左右の目の直ぐ前に来る形になった。

そのまま修一郎は、少し離れた壁に掛けられた木板に書いてある文字を読む。

「うーん……」

ガラス板の填まった針金を顔から外したり、顔の目の前に持ってきて前後に動かしたりしている。

「これはちよつと違いますね」

そう言つて、一番のガラス板を針金から抜き取り、今度は二番と書かれたガラス板を針金に填めて、同じように壁の文字を見る。

「これは結構良いかも知れませんが、少しばかり度が強いかな」

そして次は、三番、それも合わなかつたようで四番と、順番に試していき、六番目で今までと違う口調で修一郎は声を出した。

「うん！これですね。」

視界の歪みもないですし、視点を移動させてもすぐに視界の修正が効きますし」

満足そうに笑う修一郎を見ながら、レベックが手許に持った木板に、“シュウイチロウ 六番”と書き込んでいく。

「では、次はそっちの嬢ちゃんじゃ。シュウイチロウと同じように一番から試してくれ」

修一郎の行動に気を取られていたソーンリヴが、素っ頓狂な声を上げる。

「な、何！？私もやるのか！？」

「当たり前じゃろうが。今回の依頼はシュウイチロウとお前さんの“メガネ”を作ることが目的なんじゃからの」

「メガネ？何だ、それは！？」

無理もないことであるが、未だ状況を理解しきれていないソーンリヴに、修一郎は説明する。

これは修一郎の世界で使われていた、悪化若しくは低下した視力を補助するための装着品であること。

この世界にある拡大鏡を顔に固定するようなもので、常に適度な視力を確保するためのものであること。

ただし、視力の悪化の度合いは人それぞれであるため、ガラス板の凹凸に微妙に変化をつけながら複数枚用意し、その人に合ったものを使わなければ、さらに視力が悪化する恐れがあること。

当然、常に装着している必要はなく、裸眼で問題ない場合は眼鏡を外していてもいいこと。

拡大鏡と違い、使用中は片手が塞がる事が無く、作業や普段の生活に支障を来たさないことなど。

説明が終わる頃には、ソーンリヴの顔にも理解の表情が浮かんでおり、早速試着用の針金に一番のガラスを詰め込んで、様々な角度から壁の文字を見ていた。

結局、ソーンリヴが選んだガラス板は九番と書かれたものであったが、それが最善ではなく、若干の修正が必要であった。

ソーンリヴがそれをレベックに伝えると、老齡のノーム族は了解

した旨の返事をし、工房の隅にある宝石等を加工するための作業台に向かった。

少し手を加えてからそのガラス板を室内の照明にかざし、また手を加える。

それを何度か繰り返し返して、乾いた綺麗な布でガラス板を丁寧に拭くと、再びソーナリヴの元に戻ってくる。

「これで、嬢ちゃんが望んだ具合になつとるはずじゃ。

もう一度、コイツで確かめてくれ」

言われたとおり、修正されたガラス板を針金に填めて、壁の文字を見たソーナリヴは感嘆の声を上げる。

今まで裸眼ではぼやけてまともに見えなかった文字が、数年前のように鮮明に見えた。

その様子に満足したのか、レベックは手許の木板に、“ソーナリヴ 九番 ただし手直しを要す”と書き込んだ。

その後、ガラス板……レンズの形状はどうするのか、外枠の針金……フレームはどうするのかといった話が遣り取りされ、二人の眼鏡の完成は一週間後になると告げられた。

レベックや職人たちに挨拶をして工房を辞した二人は、並んで職人通りを歩いていく。

もうじき昼の休憩時間が終わるのだろう、若い職人が二人の横を大急ぎで走っていく。

既に午後の作業を開始している工房もあるようで、木を削る音、金槌で何かを叩く音、先輩職人が若い職人見習いを怒鳴りつける声などが、いくつかの建物の中から聞こえてくる。

「しかし……いいのか？ シュウイチロウ。」

あの“メガネ”とか言うものは、製作にかなり手間が掛かるようだが……」

ソーンリヴが気にしているのは、二人分の眼鏡試作費用を修一郎が全額負担すると言ったことについてだ。

それには先ほど使った、調整用メガネの費用も含まれている。

「構いませんよ。」

私も元々目が悪かったんです。あちらの世界でも眼鏡はしていません。したがらね。

こちらの世界に来てからは、一つの街に長く滞在することがありませんでしたし、今のようない日中書類に向き合うような仕事もしていませんでしたから、それほど必要性を感じていなかったのですが……」

苦笑ともとれる笑いを薄く浮かべて、修一郎は続ける。

「流石に、あの充分に明るいとは言えない事務室で目を酷使用する仕事をしていると、やはり眼鏡が欲しいと思ひまして。」

それでレベックさんに依頼していたんですよ。

あのガラス板をレンズと言うんですが、レンズは拡大鏡と同じくガラス板に凹凸を持たせて、使用者が見え易くする仕組みなんです。ただ、拡大鏡とは違って顔に固定する物ですから、先ほども言ったように、使う人によってレンズの凹凸を変えてやらないと意味がないんです。

そうなると予め何種類かのレンズを用意しておかなければ、すぐに対応できません。

それを用意するのに若干手間がかかるだけで、基本は拡大鏡のレンズに少し手を加える程度ですよ。」

丁寧に説明してくれる修一郎だったが、ソーンリヴの言いたかったことに気付いていないようで、先輩事務員はため息を吐く。

「そうじゃなくてだな……」。

拡大鏡自体がかなり高価なシロモノなんだぞ？

それ以上に手間が掛かるメガネを買い取るような金を、私は持っていないと言いたいんだ」

ソーンリヴの言っていることは至極当然のことであった。

現在、この世界……少なくともこの大陸で使われている拡大鏡は、一般市民の四大家族が優に一月暮らせるだけの価値がある。

使っているのは、年老いた王族や貴族、高齢の市庁舎職員、豪商などの裕福な者くらいで、庶民には到底手が出せるような金額ではない。

この世界でガラスが作られるようになって凡そ二十年。

ここ十年で漸く透明で綺麗なガラスが量産され始めているが、ガラスはまだまだ高級素材扱いなのだ。

そして、衝撃に弱く割れやすいガラスを加工する技術を持つ者は、各都市に数名居るか居ないかといった程度である。

この世界の文化レベルや技術レベルから考えると、ガラスの出現がやけに遅く思える修一郎であったが、それが事実であり現実であるため、深く考えないことにした。

修一郎としては、自分や自分の周囲の人々の役に立つことであれば、それでいいと思っている。

別に修一郎は、この世界で成り上がろうとか、世界全体をより良くしようといった野望を抱いているわけでもない。

ただ、自分がこの世界で暮らしていくにあたって、極度に不便であると感じた事象を改善すべく行動しているだけだ。

自己中心的な考えなのかも知れないが、その行動の結果が、多少

なりとも周囲の人々に利をもたらずことであれば、それで構わないと割り切ることにしたのだった。

「ああ、そのことですか。」

「気にしないでください……」と言うのもアレですが、普段からソーンリヴさんにはお世話になってますから、そのお礼と思っていただければ。」

「出納板とか『施錠』とか、魔法が使えない私はどうしてもソーンリヴさんをお願いするしかありませんからね。」

「これからお手数をおかけするお詫びも含めて、ということに納得していただけると有難いのですが。」

「それにしたってだな、限度というものがあるだろうが。」

「まあまあ、いいじゃないですか。」

「レベックさんもライターの件で、それなりに繁盛しているようで、今回もかなりおまけしてくれるみたいですし。」

「そこまで言うならもうこの話はしないが、いいか？ シュウイチロウ。」

「メガネに関する費用は、私には決して話すなよ？」

「とてもじゃないが、恐ろしくてまともで居られそうもない。」

「そう言って、突然の寒気に襲われたように両腕で自らの体を抱きしめる仕草で、珍しくおどけてみせるソーンリヴに、笑いながら「分かりました」と答える修一郎だった。」

「そうやって話しながら歩いていた二人は、広場まで戻ってきてい

た。

もうじき午後一時を示す親鐘三つと子鐘一つが鳴る頃なのだろう、昼向けの軽食を売っていた露店のいくつかは店をたたみ始めている。それに代わるように、砂糖菓子や干した果物といったおやつに摘める類の商品を売る露店が、開店準備を始めており、広場の喧騒は正午頃と然程変わらない。

「おやつか……」。

ソーンリヴさん、お茶休憩用に何か一つ買って帰りますか？」

露店を眺めながら、隣を歩く女性に声をかける。

「いや、私は甘いものはあまり好きじゃないんだ。

シューイチロウが食べたいなら買って構わんが、私は食べないぞ？」

「そうですね。」

でもまあ、折角ですし何か買って帰りますよ」

そう言つて、修一郎は近くの砂糖菓子の販売を始めたばかりの露店に足を向ける。

その店は、砂糖と胡桃に似た木の实を粉にしたものを練り合わせ乾燥させた、落雁に近いものを売っていた。

「お一ついかがですか？」と、売り物を四半分に分けた試食用の菓子を、ハーFRING族の若い女性が勧めて来る。

香ばしい匂いのする菓子は、やや甘すぎるように感じたが、茶と一緒に食べれば丁度良いだろうと思えた。

一袋十個入りのそれを買つと、修一郎はソーンリヴの元に戻り、マリポー商店へと戻っていった。

レベックの言ったとおり、修一郎たちが試作眼鏡の調整をした日から丁度一週間後、二人分の眼鏡が完成したと、連絡があつた。

正確に言うなら、レベック本人が完成品を携えて事務室を訪れたのだ。

フレームは、さすがにチタンはこの世界では発見されていないよ
うで、鉄を焼入れ・焼き戻した鋼で作られていた。

レンズを固定するのに容易であつたため、アンダーリムタイプの
フレームに、鼻が接触するパッドの部分には薄い皮の張られた小さ
な木片が取り付けられ、耳に引つ掛けるモダンの部分は軽い木材を
細い筒状にして被せてある。

レンズは、修一郎が所謂スクエアタイプと呼ばれる四角形、ソー
ンリヴはラウンドタイプに近い楕円形となつていた。

修一郎の世界での眼鏡のように、軽量で耐衝撃性に優れているわ
けでもなく、パッドやモダン部分が幾分野暮つたく見えるものの、
実用には充分であり、早速着用した二人は文字通り見違えた世界に、
驚きと喜びの声を上げた後、感謝の声をレベックに浴びせる。

あまりの嬉しさに修一郎が、眼鏡をかけたソーンリヴを見て「可
愛く見えますね」とうっかり思ったことをそのまま口にしてしまい、

「今まではそうではなかったと言いたいわけか？」

と、詰め寄られて平謝りする場面も見られた。

そんな二人の反応に満足したレベックは、上機嫌で工房へと帰る
うとしたが、あることに思い当たつたようで、修一郎に声をかける。

「シュウイチロウ。」

この後、まず間違いなく起こることについてじゃがな、メガネの製作はウチではやらす、バラランダのところに任せようと思うとる」

突然の言葉に老細工師の真意を測りかねたのか、怪訝な表情を浮かべる修一郎に、レベックが説明する。

「お前さんとこのマリボーのことじゃ。

どうせ“それ”も商品として取り扱わせると言い出すじゃろう。

じゃが、ウチの工房は従来の仕事に加えて、ライターの製作も始めておるので、とてもじゃないが人手が足らん。

新たに雇おうにも、工房が狭うてこれ以上はどうにもならんしの。その点、バラランダの奴は腕も確かじゃし、何より金属の扱いに長けたドワーフ族だけでやっておる工房じゃ。

あそこなら、充分満足のいく品を作ることができるじゃろう。

あ奴はガラスの加工方法も習得しとるしの。

わしからも言うておくが、シュウイチロウ、お前もマリボーが動く前に、顔見せして説明しておくんじゃな。

あ奴は、ちいとばかり偏屈じゃからのう」

笑いながらそう言うと、レベックは「また飯でも食おう」と言い残し去っていった。

確かに、ライターに比べると眼鏡の需要は相当数あるように思われる。

怪我や病気で一時的に悪化した視力は、医術士や調薬士で治療・回復は可能だ。

しかし、普段の生活の中で徐々に悪化或いは低下していった視力は、魔法でも薬でも回復できない。

精々が目を酷使しないように努め、目に良い食生活を送ることで僅かに回復させるか、それ以上の悪化を防ぐくらいだ。

また、眼鏡自体がこの大陸では未だ作られておらず、尚且つ実用

的な品物であれば、目新しい物好きのマリポーが飛び付かないわけがない。

それについては予想していた修一郎ではあったが、レベックが製作を辞退することには思い至っていなかった。

「レベックさんの言うとおりだな。これ以上あの人に負担をかけるわけにもいかないだろう。」

バルンダというドワーフとは面識はないが、工房の場所は知っている。

後で場所を教えてやるから、昼の休憩時間にも行って来い」

幸い、マリポーは今朝から商人組合の会合で、商館に出向いており、店に戻るのには夕方だと告げられていた。

商館はロントラールとも呼ばれ、商人組合が経営する商工会議所のような施設である。

大中小三つの会議室があり、アーセナクトの商人が話し合いをする際に利用されている。

他に、客の希望する商人の紹介や、営業許可証・露店許可証の発行、開業に関する様々なサポート業務なども行っている。

修一郎の世界で使われている“商館”とは意味合いも機能も違う。

「そうですね……。」

バルンダさんという方が、どのような人物かは知りませんが、なんとか交渉してきます」

もしかしなくても、既に事務員というより仕入れの職掌ではないだろうかと思いつつ、修一郎はため息を吐いた。

結果から言うと、修一郎の交渉はなんとか上手く進めることができた。

商業地区の職人通りから少し外れた場所に、バランダの工房はある。

全体的に黒く煤けたようなレンガ造りの一軒家は、レベックの工房の倍ほどある大きさだった。

入口の上には、鎧と剣を象った看板が打ち付けられ、壁際には水で満たされた大きな樽が二つほど置かれている。

専門的に火を扱う工房に義務付けられた消火用の水だ。

少し屈まなければ頭をぶつけてしまいそうな入口の扉を開けると、中から熱気が勢い良く吹き付けてくる。

それと共に、金属を鎚で叩く音が、修一郎の鼓膜を容赦なく攻め立てた。

開けられた扉の向こうに、人影があるのに気付いたドワーフ族の壮年の男性が、ぶつきらぼうな声を投げかける。

「なんだ、オメエは」

焦げ茶色の髪に、同じ色の瞳。

太い眉毛の下にある大きな目から、相手を値踏みするような視線が修一郎に突き刺さる。

鼻はレベックほどではないが人間族にくらべると大きく、所謂団子鼻で、鼻の下には立派な髭を蓄えていた。

修一郎の三分の二程度しかない身長だが、体の厚みは修一郎の倍はありそうだ。

着ている服は、厚手の木綿で作られたくすんだ白の上下一体型の作業着で、飛び散る火花によって所々に小さな焦げ穴が開いていた。

手には分厚い皮製の手袋をはめており、右手には大ぶりの金槌を持っていた。まだ。

「お仕事中、失礼します。」

私は、マリポー商店に勤めているシュウイチロウ・ヤスキという者です。

レベックさんの紹介で、こちらに伺ったのですが、バランダさんはどちらにいらっしゃいますか」

出来るだけ丁寧に喋る修一郎に、目の前のドワーフ族が声を上げる。

「俺がそのバランダだ。」

レベックのジジイから話は聞いている。

なんでも新しいモンを作れってことらしいな」

「はい。拡大鏡を改良した物で、“メガネ”という、身に付けて使う品物です。」

目の悪い方や、視力が低下した方を補助するための道具で、それを作っていただけなのです」

真剣な表情で説明する修一郎に、黙っていたバランダが言葉を発する。

「確かに俺は、ガラスを弄くる方法は知ってる。だが、それは俺の本業じゃねえ。」

俺の本業は、見てのとおり武器と鎧の製作だ。
修理もやるがな」

言われて室内を見回してみると、壁際に完成したばかりであろう、

剣や斧が置かれており、その横には見事な板金鎧が、腕のない木製人形に着せかけられていた。

バランダの背後では、ドワーフ族の職人が真っ赤に灼けた鉄を金槌で叩いて剣の形に延ばしている。

「そのようですね。」

私もが必要としているのは、硬さと弾力性双方を持ち合わせた鋼製の杵棒を自在に加工できる技術と、ガラス板に凹凸の変化を付けることが出来る技術を持つ職人です。

レベックさんからは、貴方がそうであると聞いています。不躰なお願いであることは承知しています。

ですが、どうか引き受けていただけませんかでしょうか」

「……ふん。その“メガネ”とやらは持ってきてるのか」

修一郎の言葉に暫し考えて、バランダが現物を見せると要求した。

「はい。こちらにあります」

修一郎から手渡された眼鏡を細部にわたって確認しながら、バランダが口を開いた。

「杵棒に関しちゃまだまだだ。ま、あのジジイは木や石が専門だからな。」

だが、このガラス板の加工は俺でも難しいかも知れん」

現物を見て、即座にそれが難しいと分かる程度には、このドワーフ族は知識も技術も習得しているのだろう。

「……無理でしょうか？」

恐る恐る訊ねる修一郎に、バランダの太い眉が跳ね上がる。

「無理だと？」

オメエ、誰に向かって口きいてやがんだ！

俺は難しいと言っただけで、無理とは一言も言っつてねえぞ」

元々、ドワーフ族は嘘や怠惰を嫌い、技術の吸収に貪欲であり、労働に美徳を感じる種族である。

また、頑固であったり偏屈な性格の者も多い。

そして、それ以上に負けず嫌いでもあった。

ドワーフ族全体が、バランダのような職人であるわけではない。

なかには、探鉱者や警護団で生計を立てている者もあり、戦いの場に身を置く者も居る。

そういった者は、自らの技術を磨き、日々錬成に明け暮れ、戦いに勝利することに喜びを覚える。

ドワーフ族の性格を意識して言ったわけではないのだが、修一郎の言葉に、バランダの職人としての負けず嫌いの性質が刺激されたらしい。

「いいだろう！やってやろうじゃねえか。

ただし、俺の本業は飽くまでも武器製造だ。

コイツの製作は片手間ってことになるが、それでもいいんだな？」

「週にいくつ作ることができますか？」

「二つ……いや、一つだな」

「最低五つは確保していただきたいのですが」

「ああん？オメエ、人の話聞いてなかったのか！？
こっちは片手間でしか作らねえと言っただんだ！」

「いえ、ちゃんとお聞きしていました。」

技術的なことに關しては、私は門外漢ですから、こちらの要求する仕様を満たしていただければ、何も言うことはありません。

しかし、バルンダさんは先ほど、やると仰いました。

ならば、これ以降は取引の話になります。

商売に携わる者として、お互いの利益に關することですから、こちらも妥協するわけには参りません」

ついさっきまでの、低姿勢とも取れる態度を一変させ、修一郎はバルンダの目を見て決然とした口調で告げる。

「……俺の気が変わって、断られるとは考えねえのか」

バルンダの声が低くなった。

「いえ、勿論考慮したうえです。」

ですが、バルンダさんの考えが変わるとも思えません。

メガネは私が発明したものではありませんが、私の居た世界では非常に多くの人が、メガネがあることで日々の生活に支障をきたすことなく暮らせていました。

世界は違いますが、こちらでも多くの人が視力の悪化や低下に悩まされています。

現に、私や私の知人にもそういう方が居ます。

別に慈善活動を行って欲しいと言っているわけではありません。

それだけの需要があれば、相当の利益が見込めるといふことですから」

一気にそこまで言って、修一郎は口を噤む。
跳ね上げた眉はそのまま、黙って修一郎の言葉を聴いていたバラランダが、暫くして口を開く。

「オメエが異世界人だつて話は、どうやら本当のことらしいな。
本来のメガネは、こんな粗末なモンじゃねえんだろ？
オメエの世界は、相当技術が進んだとこなんだな……」

手にしていたメガネを修一郎に戻すと、バラランダは観念したように大きく息を吐いた。

「分かった。週五つで引き受けよう。

どうせ卸し価格やら何やらに關しては、マリボアの野郎が出張ってくるんだらう？

マリボアの野郎もオメエもいけ好かねえが、適当に話付けといてやる」

「そうですか。ありがとうございます。

これで安心して店に戻れますよ」

肩の荷が下りたとばかりに、氣の抜けたような表情を浮かべる修一郎に、バラランダが口ひげを震わせながら笑う。

「そういう顔は、相手が居ないところですよ。
ところで、メガネについてだが、こっちでも色々研究させてもらうが、構わんな？」

オメエの世界のメガネとまでは行かないだらうが、まだまだ改良の余地はありそうだ」

「ええ。それは構いませんよ。

それどころか、こちらからお願いしたいくらいです。

ただ、仕様の変更があった場合には、こちらに知らせてください」

「当たり前だ。

それと、これからはこういったモンを作ろうとする時は、真っ先に俺んところに来い。

レベックのジジイに先を越されちまったのが、どうにも面白くねえ」

バランダの機嫌が悪かったのは、それが一因でもあるのだろう。

知識を含めた技術の習得に貪欲なドワーフ族らしい反応だ。

工房の主人は、作業着の尻ポケットから半ば潰れた葉巻を取り出して啜えると、近くの炉に突っ込んであった火掻棒で火をつけた。

翌日、バランダと盛大な罵りあいと呼んでもよい交渉をしながらも、なんとか商談を成立させたマリポーは、上機嫌で店頭の陳列棚に並べられた見本のメガネを眺めていた。

ウチの店に、目玉商品が一つ増えたと言いながら。

第六話 雨の日の拾い物

十日ぶりの休日に、修一郎は商業地区の通称“衣服通り”を歩いていた。

この世界の一週間は五日であり、一ヶ月は六週間の三十日、一年は十二ヶ月の三百六十日となる。

修一郎の世界の一年と殆ど変わらないことに疑問を抱かないわけではないが、この世界に来て九年。

それに慣れてしまった修一郎は、深く考えないようにしている。

衣服通りには、その名が示すように服飾品を販売する商店が集中していた。

それほど大きくもない通りだが、各専門店が軒を並べ、路上にまで販売台を置いて、道行く客の目を惹こうとしている。

流石に、貴族が身に付けるような服や装飾品を扱う高級店はないが、それ以外であれば、この通りで大抵揃えることができる。

時刻は、大鐘二つに子鐘五つ（午前十一時）を少し過ぎた頃。

もうすぐ昼になる時間帯であったが、薄く空を覆う雲に陽光は遮られ、通りを吹き抜ける風は冬の匂いを含んでいた。

白い長袖の筒型シャツの上に黒い皮のジャケットを羽織り、下は紺色に染められた厚手の麻のズボンといった出で立ちで、修一郎は店先に並ぶ服や髪飾りを眺めながら、のんびりと歩いている。

久しぶりの休日で、いつもより遅くに目を覚ました修一郎は、そろそろくたびれてきた普段履きの靴を買おうと思いい立ち、この通りに足を運んだ。

修一郎を含め、一般市民が履く靴は、基本的に布と皮を縫い合わせた、修一郎の世界で言うワーカーブーツに近い形をしている。

編目の細かい麻の生地と木綿の生地の間、牛に良く似た家畜の

皮を挟んだもので作られており、靴底は分厚い獣皮で補強されている。

表面には樹脂が塗られ、一応の防水加工が施してあるが、この世界では強力な接着剤が未だ開発されていないため、縫い目から水が浸み込むこともしょっちゅうで、気持ち程度の効果しか発揮していない。

冒険者や探鉱者といった、岩場を歩いたり、野生生物や魔獣と戦ったりする者は、この靴に金属板を貼り付けたものを愛用している。フオーンロシエが履いていた靴も、これと同じものだ。

他に、木製の靴もあるにはあるのだが、木靴は大抵、都市部から離れた農村などでしか使われておらず、石畳が敷かれた街中では、まず見かけることがない。

木靴は履き慣れるのに多少のコツを要するうえに、石畳の路面を歩くと損耗も激しく、何より滑り易く危険なのだ。

修一郎が今履いているのは、靴底の獣皮がかなり磨耗してきており、走りでもしよものなら、振動が直接足に響いて足の関節を痛めかねない。

靴底だけを交換し補修することもできるのだが、他の部分もいい加減傷んでいたので、どうせなら買い換えようとなった次第である。目当ての店に入り、馴染みとなった女主人に声を掛ける。

「こんにちは、ケーゼさん」

店の奥に据え付けられたカウンターで、暇そうに片肘を突いていた人間族の少女が顔を上げる。

「や」

頭を包むように巻かれたバンダナから、くすんだ金髪を少しだけ覗かせたケーゼは、どこか呆けたような表情で簡潔過ぎる挨拶を返

した。

濃い眉毛の下にある、琥珀色の瞳をした目は常に半目状態で、頬にはそばかすが浮いている。

顔立ちだけ見れば、どこにでも居そうな少女であるが、幼い頃から父に仕込まれた製靴技術は相当なもので、十七歳にして腕のいい靴職人と評判だった。

父親と二人で切り盛りしているこの店は、完全受注生産制で、常連客も少なくない。

ケーゼの父親は、作業場に籠りつきりで、滅多に店先に出てくることはなく、店の殆どをケーゼに任せている。

「同じ？」

主語から何から殆どをすっ飛ばしたような問いに、修一郎は戸惑うことなく答える。

「そうですね。今回も靴底は獣皮二枚でお願いします。

あと、中敷きに兎の毛皮を追加してもらえますか？

これから寒くなりますからね」

「ん」

修一郎の注文を、専用の木板に、細く割られた木炭で書き込むケーゼ。

書き終わると、再び修一郎に顔を向けて僅かに口を開いた。

「代金？」

「ええ。今回も前払いで」

「ん」

傍から見ると、まともな意思疎通が出来ていないとしか思えない遣り取りであったが、この店の客はこれで通じてしまうのだろうか、修一郎も当たり前のように靴の代金を払う。

「四日」

「分かりました。それではお願いします」

そう言って店を出ようとした修一郎の耳に、裏の作業場に居る父親を呼ぶケーゼの声が聞こえてきた。

新しい靴の注文を終えて、アーセナクト中央広場にやってきた修一郎は、昼飯をどうするか軽く悩んでいた。

たしか、プレルの店は今日は定休日のはずである。広場では、もうすぐ始まる昼の休憩時間に合わせるように、軽食を売る露店の店主たちが準備に忙しそうだ。

「適当に見繕って、ベンチで食べますか……」

香辛料をまぶした川魚を串に刺して焼いている露店に向かおうとした修一郎の左手が、突然後ろから何者かに掴まれる。

驚いて振り向いた先には、絶好の獲物を見つけたように笑うプレルの姿があった。

「シューイチ口。いいとこで会ったわね」

しっかりと腕を掴んだまま、笑顔に凄みを増す猫人族に、ふと、猫に捕らえられたネズミ姿の自分を想像して、修一郎は引き攣った笑みを浮かべた。

「ど、どうも、プレルさん。買い物ですか？」

「買い物じゃないわよ？ちょっと、商人組合に用があつてね。今はその帰り」

プレルに限らず、アーセナクトに住む者にとっては、“商館”イコール“商人組合”である。

組織上の商人組合は市庁舎を本拠としているのだが、あそこは半ば組合幹部専用の事務所のようなもので、日々の実務処理は殆どが商館で行われていた。

「今日は休みみたいだね？」

普段とは違う服装の修一郎を見て、プレルが質問というより確認といった口調で問うてくる。

「ええ。ちよつと靴を新調するために、衣服通りまで行ってきたところですよ。」

で、これから露店で昼飯でも買おうかと……」

言いかけて、しまった、という顔をした修一郎を見て、プレルが腕を掴んだ手にさらに力を入れる。

「そう！なら丁度良かったわ！」

ウチの店で食べて行きなさい。そうしなさい」

三角の耳を大きく動かしたプレルは、自分の店に向かって修一郎を引っ張っていく。

「で、でも今日はプレルさんの店もお休みなんじゃ……」

僅かな抵抗を試みる修一郎に、プレルの陽気な声が、それを無情にも打ち砕いた。

「いいのよ。シューイチローの分くらい作ってあげるから。」

それに、ちょっと教えて欲しいこともあるしね」

嫌な予感、嬉しくないことに見事的中したようで、諦め顔の修一郎はそのまま引き摺られていった。

修一郎がプレルに拉致されて、食堂に向かっている頃、商館の大会議室に八名の商人が集まっていた。

アーセナクトでも有数の大店の店主であり、商人組合の要職に就いている者たちである。

見事な彫刻が施された長テーブルは、イレ・マバル諸島よりさらに南部に位置する国で伐り出されたコクタンで作られており、彼らが座る椅子もテーブルと調和するように設えられたコクタン製だ。

入口真正面の奥には、組合旗が三脚式の旗立台に立てかけられており、床には毛足の長い絨毯が敷き詰められている。

テーブルを挟んで四人ずつに分かれて座っている彼らの前には、

西の大陸ラングナントから持ち込まれた紅茶が、馥郁とした香りと湯気を立ち上らせていた。

その香気を愉しみながら、八人の商人たちは、最近の市場の動向、ナダル又から運ばれてくる今年収穫された農作物の質、近々北のバールガ王国が公路利用税の引き上げを行うらしいといった、商売に関する話題で談笑している。

そのうち、話に一区切りがついたのか、商人の一人が紅茶の注がれたカップに口を付け、静かに受け皿に戻した。

それが合図であったかのようになり、会議室の扉がノックされ、女性の声で来訪者があることが告げられた。

日本で言うところの、上座に座る商人が入室を許可する旨の言葉を発すると、一呼吸の間をおいて扉が開かれる。

「お待ちせして申し訳ありません」

室内に入って来た男は、テーブルの傍まで歩み寄ると、深々と頭を下げ、良く透る声でそう言った。

「いやいや、私たちもつい先ほど来たばかりですよ」

入室許可を出した男性商人が、笑顔で応える。

テーブルに並んだカップを見れば、その言葉は嘘であることが瞭然なのだが、それを口にするほど男は馬鹿ではないし、事実、予定されていた時間より前に訪れているのだ。

社交辞令であることは百も承知である。

「そうでしたか。」

ですが、この度皆様をお呼び立てしたのは私わたくしです。

本来であれば、私が皆様をお迎えしなければならぬ立場であるのですから、お待ちさせたことには変わりません」

普段からは想像できないほど丁寧な口調で、再度男は頭を下げる。

「あまり気にされることはないでしょう。」

「そう畏まらないでください」

別の商人も、笑顔で座を取り成すように、男に声をかけた。

「ありがとうございます」

頭を下げたまま礼を述べる男の一番近くに座っていた、恰幅の良すぎる商人が、やや棘のある物言いで先を促す。

「そんなことよりも、です。」

今回我々が呼びつけられた理由をお教えいただけませんか。

商売上手な貴方のことだ。

組合に、ひいてはアーセナクトに店を構える商人全体に、良い報せでもあるのではないですか」

言外に、自分が男の目的を察していることを匂わせながら、その商人は他の七人に向けて大仰に笑う。

水を向けられた形の七人も、凡その見当はついているのか、彼の言葉を否定することはなかった。

「まあまあ、マゴールさん。」

さあ、貴方も席に着かれてはいかがですか。

君、彼にも紅茶を差し上げなさい」

上座の向かいに座っている商人が、男を揶揄するような発言をした商人の名を呼ぶ。

最後の台詞は、男を案内した後、入口に待機していた女性組合員に発したものである。

女性組合員は黙って一礼すると、会議室を出て行った。マゴールと呼ばれた男は、表情を消して紅茶のカップに手を伸ばす。

紅茶は、先ほどまでの香りは失せていたようで、マゴールは僅かに眉を顰めて、すぐにカップを戻した。

「では、失礼して……」

女性組合員が会議室を出て行くと、男は空いた椅子に座る。そこは、この九人の中で最も下座にあたる席だった。

「さて、それではお話を伺いましょうか、マリボーさん。商人にとって、時間は金と等しく尊いと申しますからな」

上座に座る商人が男の名前を呼んだ。

「はい。お話というのは……」

マリボーは、大きな商談に臨む際に作る真剣な表情で口を開いた。

修一郎がプレルから開放されたのは、大鐘四つが鳴ってしばらく経ってからのことだった。

店の外に出て空を見上げると、薄く広がっていた雲は黒さを増して低く垂れ込めており、夜中のように暗い。

このまま行けば、もう間もなく雨が降り始めるだろう。

「参ったな。ここまで時間が掛かるとは……」

周囲に漂う雨の気配に、収まりの悪くなった頭を掻きながら、これからどうするか思案する。

長屋まで走って帰り、自炊することも考えたが、買い置きが食材が殆どないことに思い当たる。

加えて、長屋にある単炉の竈では一度に種類しか調理することができないため、手間が掛かるのであまり使いたくないという気持ちもある。

元の世界では、趣味を兼ねて自炊していた修一郎だったが、仕事で疲れて帰ってきた時や、風邪気味の時などは、コンビニや深夜営業のスーパーの惣菜、デリバリーで済ますことも度々あった。

この時間でこの空模様である。

広場の露店が今もやっているとは思えない。

かと言って、馴染みの店はプレルの食堂しかない。

この街に来て、一番最初に入った店がプレルの食堂で、出された料理の出来に満足してしまった修一郎は、他の店を開拓することを放棄していた。

「仕方ない。

適当な店に入ってみよう」

そう決めた修一郎の鼻に、水滴が当たる。

「降りだしたかあ」

あつと言つ間に土砂降りとなった雨に、ため息を吐きつつ修一郎は駆け出した。

全身ずぶ濡れになりながら、宣言どおり適当に見つけた店で食事を終えた修一郎は、彼にしては珍しく機嫌が悪かった。

修一郎の入った店は、プレルの食堂よりも広く、それなりに客も居て、従業員の態度も良かった。

だが、出てきた料理は修一郎にとって不満だらけだった。ある料理は味付けが薄すぎ、別の料理は間違えたのではないかと思えるほど塩が効き過ぎている。

火の通し方も雑で、野菜の炒め物は火の通しすぎで歯ごたえなど皆無であつたし、鹿肉の串焼きはレアどころの話ではなく殆ど生に近い状態だった。

この世界の病原菌や寄生虫がどの様なものか分からない修一郎は、この世界に来てから魚肉や獣肉は生で口にしたことはない。

生野菜や果物に関しては、綺麗な水で洗ったものしか食べない。それでも安心できないのが現状なのだが、ここまで気をつけて、それでも感染若しくは発症するなら、それまでだと諦めることにしている。

食べなければ生きていけないのだし、いざとなればこの世界の薬でなんとかするのではないかと高を括っている面もある。

治療用の魔法もあるだろうが、こちらはあまり当てにしていない。ともかく、そういつた理由から鹿肉の串焼きは、一口齧って気付いた修一郎が、周囲の者に気付かれないように、素早く吐き出した肉の欠片をポケットに隠した後は、手を付けられることはなかった。そして極めつけなのが、料理の量と値段だった。

はつきり言えば、少なくても高い。

よくこれで客が入るものだと思い、ホールを見渡した修一郎はあつたことに気付く。

客の殆どが男性であった。

違和感を覚えて、さらに良く見てみると、接客している三人の従業員は全て若い女性で統一されている。

ご丁寧に、人間族、エルフ族、ハーFRING族と一人一人違う種族を揃えており、どの娘もそれなりに美しく、体つきも世の大抵の男性が喜ぶであろうレベルを保っている。

成人しても人間族の子供くらいの身長にしかないハーFRING族に関しては、多少嗜好の異なる者のために雇っているのかも知れないが。

獣人族を雇っていないのは、獣人族は基本的に一途だからだ。

独身であれば従業員目当てで通う者も居るだろうが、恋人が居る者や妻帯者はまず来ることはない。

独身者が一人の従業員を巡って、店内で騒ぎでも起されたら堪らない。

異種族間での恋愛や結婚の例ははないのだが、稀であることは確かだ。

その辺りまで考えての人選なのかは不明だが、男性客に獣人族が居ないことから、当たらずとも遠からずといったところだろう。

なるほど“そういう店”か、と得心のいった修一郎は、無然として店を出たのだった。

そして、店を出た今も雨は降り続いていた。

もう半月もすれば、雪になっているだろう、氷のように冷たい雨は、相変わらず石畳を激しく打っている。

ここから長屋までは結構距離があるうえに、傷んでいる靴は既に水を大量に吸い込んで歩くたびに不快な音をたてる有様だ。

店に入った時点で、文字どおり頭から水を被った状態であったため、これ以上濡れても何ら変わらない。

ただ、この冷たい雨にあたり続けて風邪でもひいたら馬鹿らしいので、脱いだジャケットを傘代わりにして走って帰ることに決めた。通常であれば近寄ることのない、娼館が立ち並ぶ通りを、修一郎は雨で転倒しないように注意しながら走る。

普段だと、一度中央広場に出てから、居住地区へ向かうのが一番安全なルートだ。

しかし、今は一刻も早く家に戻りたかった修一郎は、近道を選んだ。

雨で出歩く者が少ないためか、客引きの姿も通りにはなく、営業中の娼館の明かりが淡く石畳を照らしている。

時折り娼館から、娼婦らしき者の笑い声が聞こえてくるが、それを除けば、雨音と自分の履く靴が濡れた音をたてるだけだ。

あと少して通りを抜けるといふ所で、突然脇の路地から小さな影が飛び出して来て、修一郎にぶつかった。

「ごめんなさい！」

小さな影は慌てて謝ると、急いでその場を離れようとする。

「あ、ちょっと待って」

修一郎の手が、ぶつかってきた相手の腕を咄嗟に掴んだ。

「それは困るんですよ」

掴まれた腕の先には、ぶつかった際に取り取ったのだろう、修一郎の財布があった。

「明日から暮らしていけなくなります」

しっかりと掴んだ修一郎の手を、なんとか振り解こうともがきながら、その影は声を荒げる。

「離せよ！」

「貴方が、それを返してくれば離しますよ」

小さなスリを捕らえたために、手から落ちた傘代わりのジャケットが、石畳の上で水気を含んだ重い音をたてた。

「くそっ……！」

声変わりに至っていないと思われる少年が、小さく悪態をついた次の瞬間、軽い衝撃波が修一郎を襲う。

「うん？」

その衝撃波は修一郎を弾き飛ばしたりするどころか、よろけさせることもなかったが、一瞬何か違和感を覚えたように、怪訝な表情を浮かべる修一郎。

「嘘だろ……」

自分が予想していた結果と違う事態に、少年が呆然として呟く。衝撃波を放ったのは、他ならぬ自分なのだ。

それは彼が持つ固有能力の一つで、呼気として放たれる衝撃波と共に、相手の精神に恐怖や混乱をもたらすものだった。

しかし、人間族の男は表情を変えはしたものの、平然として立っている。

混乱して少年の腕を離したりもしていない。

人間族に限らず、大抵の種族ならば、この能力で、少なくとも怯ませることができていたのに。

全く効いていない相手に混乱しそうになりながらも、それでも何とかして目の前の男から逃げようとする少年は、再度、その能力を使うべく口を開いた。

その様子を見て取った修一郎が、少年の腕を掴んだ手に力を込めようとしたが、それは未然に終わる。

突然、糸が切れた操り人形のように、少年がその場にへたり込んだ。

腕を掴んだままなので、片腕だけ上に伸ばした奇妙な姿勢で、足元に寄りかかってきた相手に驚きながら、修一郎はその顔を覗き込む。

ぼろぼろの貫頭衣で顔が殆ど隠れていたことと、周囲に明かりがない暗がりであったため、表情までは分からなかったが、どうやら気を失っているらしい。

「猫人族……？」

ちらりと見えた顔には、茶色と黒の縞模様があった。

「君。しっかりしなさい」

声をかけてみるが、当然返事はない。

周囲を見回すが、他に家族や仲間のような影も見当たらない。

「困ったな」

ふと、警護団の詰め所に運び込もうかとの考えが頭を過ぎるが、修一郎はすぐにそれを却下した。

この国では、子供であろうが窃盗を犯した者には、厳罰が処され

る。

良くて重労働刑か、下手をすれば片腕を切り落とされ、国外追放となる。

修一郎の故国の刑法から考えれば、厳し過ぎるのではないかと思わなくもないが、それがこの国の法律で定められたことなので、仕方がない。

子供にそこまでの罰を与えることにひと役買う立場になることは、躊躇われたのだ。

そして何より、ここから警護団詰め所までは遠い。

正直なところ、この雨の中、長い時間歩きたくない。

この場に置いて立ち去ろうかとも考えたが、この時季のこの雨に加えて、辺りの店は皆閉じており、人通りもない。

獣人族の少年の体力がどれほどあるのか分らないが、気を失ったまま一晚屋外に放置されれば、おそらく死に至るのではないか。

日中でも肌寒かったのに、夜になったことに加え、大雨で気温がさらに下がったため、修一郎の吐く息は白い。

流石にそれはしのびない、と修一郎は思う。

さしあたって、一晚だけでも自分が面倒見るしかないか、と決めた修一郎は、気を失っても財布を離さない逞しさに苦笑しながら、少年を片腕で抱え上げた。

修一郎の腰あたりまでしかない身長 of 獣人族は軽かった。

次いで、落としたジャケットを少年の上に被せる。

本当は背負えばまだ楽なのだろうが、少年は気絶しているし、手伝ってくれるような人も周囲に居ない。

「困ったなあ……」

再度そう呟く修一郎は、これ以上濡れようがない長身を、さらに雨に打たせながら、自らの住む長屋へとゆっくりと歩いていった。

長屋に戻った修一郎は、取り敢えず少年を居間に寝かせ、自らは濡れた衣服を脱ぎ捨て、体をタオルで拭くと、手早く部屋着に着替えた。

新しいタオルを持つてくると、小さな獣人族の貫頭衣を脱がせる。少年は、貫頭衣の下には、長いこと洗っていないのが一目で分かるような汚れたシャツと、短パンを身に着けただけだった。

どちらも酷い悪臭を放っており、全部着替えさせるしかないと判断した修一郎は、寝室にある簡素なクローゼットへ自分の下着を取りに向かう。

当然、少年の体に合うサイズのものなど持っていないため、適当に着古したシャツとパンツを見繕い、居間に戻った。

居間で寝かせていた少年は、その間に目を覚ましていた。

何時の間にか知らない場所に寝かせられていた少年は、探るように辺りを見回している。

「気が付きましたか」

その声にびくりと体を震わせた少年は、警戒心の籠った目で修一郎を睨む。

「……オレをどうしようってんだよ」

「そうですね……」。

取り敢えずは、その汚れた服を着替えてもらいます」

言いながら、手に持っていた着替えを少年に向かって放る。

下手に近寄って、少年を刺激しないためだ。

「タオルはそこにあります。
まずは雨で濡れた体を拭いたほうがいいと思いますよ?」

目の前に放られた衣服と、頭の横に置いてあった綺麗なタオルを見た獣人族の少年は、何故か更に警戒心を深めたようだ。

「なんでそんなことをしなくちゃいけないんだよ。
お前、何考えてんだ」

「なんでって、私のような人間族と違って、君の体は毛に包まれていますからね。」

自然に乾くのを待っていると、風邪をひきますよ?
だからタオルで拭きなさいと言ったままでです」

いつもの笑顔を浮かべて、修一郎は答えた。

「それに。君、臭いますよ」

付け加えた言葉に、獣人族は恥ずかしさを覚えたようだ。

「よ、余計なお世話だ!

第一、オレは臭くなんかない!」

大きな声を張り上げる少年に背を向け、修一郎は台所に向かう。

「大声を出さなくても聞こえています。」

今、お茶を淹れますから、その間に着替えてください」

竈に火を付け、水を注いだやかんを置く。

「生憎、君の体に合うような大きさの服はありません。少しばかり大きいでしょうが、我慢してくださいね」

「……………」

何かお茶請けになるようなものはあっただろうか、と食器棚を兼ねた小さな収納棚を漁ってみるが、あったのは酒のアテに買ったビールフジャーキーに似た干し肉だけ。

我ながら色のない生活を送っていることに苦笑しつつ、茶を淹れるだけにした修一郎に、少年が再び問いを発する。

「警護団に突き出さないのかよ」

幾らかは警戒心を解いた声音に振り向くと、獣人族の少年は素直にも渡された服に着替えて、床に胡坐を組んで座っていた。

傍にあるタオルは、黒く汚れていて、体もちゃんと拭いたようだ。そんな少年に、気付かれないように小さく笑うと、修一郎は告げた。

「突き出して欲しいのなら、そうしますよ？」

今からだと、また雨に濡れてしまいますから、明日の朝にでも一緒に行きましょうか」

「ぐっ……………」

言葉に詰まる少年を見て、今度は笑い声を上げて続ける。

「安心してください。」

結果的に君はスリに失敗して、財布は私の元に戻ってきたのですから、そんなことはしませんよ」

からかわれたことに気付いた少年が、鼻の頭に皺を寄せながら、最初に口にした質問を繰り返した。

「じゃあ、オレをどうするつもりなんだ！」

興奮しているのか、少年の声は高い。

もう夜なのですから少し静かにしてください、と少年に注意してから修一郎は答えた。

「どうもしません。」

あのままあそこで君を放っておいたら、君は死んでいたでしょうから連れて来ただけです。

一晩だけ、ここに置いてあげます。

後は君が決めるといいでしょう」

笑いを収めて、真面目な表情になった修一郎がそう言つと、少年は黙り込んでしまった。

「まあ、まずはお茶でも飲んで落ち着きなさい。

色々と訊きたいこともありますし。

それから考えても、別に問題はないでしょう」

沸いた湯をポットに注いで、修一郎は居間へと移動する。

「……別に言うことなんてねえよ」

不貞腐れたような表情で、木のコップに茶を注ぐ修一郎を見る少

年の瞳は、金色だった。

「もしかして、虎人族……ですか」

「虎人族で悪いかよ！」

思わず口に出して呟いた修一郎に、語勢を荒げる少年。

「すみません。虎人族に出会ったのは初めてだったので。

他意はありませんよ」

素直に謝る修一郎を見て、虎人族の少年は戸惑った。

彼の然して長くはない、これまでの生の中で、こういった反応をされたことはなかった。

「な、ならいいんだ……」

「では、許してもらえたところで、お茶を飲みましょうか。

これで冷えた身体も温まることでしょう」

他人事のような口調で、柔らかな笑みを浮かべる修一郎に毒気を抜かれたのか、少年は言われるままに茶を口にした。

確かに、修一郎の言うように熱い茶が胃に収まると、身体中が温かくなるのを感じる。

修一郎の淹れた茶は、知り合いの調薬士に頼んで調合してもらったハーブティーだ。

胸のすく香りと、ほんの僅かな渋みがあるそのハーブティーは、精神を落ち着かせる作用と温熱作用がある。

そしてもう一つ、消化器系を刺激する作用があった。

それが確りと働いたようで、暫くすると虎人族の少年の腹が小さ

な可愛らしい音をたてる。

「何か作りましょうか。」

実は、私も晩飯をまともに食べてないんです」

そう言って、修一郎は再び台所へ向かった。

第七話 虎人族の少年

少年は、ルキドウと名乗った。

アーセナクトにやって来たのは六日前。

それだけ言う口を嚙んだ。

どうやらそれ以上、自分のことは話すつもりはないらしい。

あの後修一郎は、台所に収納棚にあった干し肉とタマネギで出汁を取ったスープに、輪切りにしたサツマイモを放り込み、緩く溶いた小麦粉を少量ずつ流し入れて、日本の水団のような汁物を作った。味付けは干し肉の塩分と少量追加した塩のみだ。

料理に使えるような食材が、それしかなかったのだ。

決してご馳走と呼べるような代物ではなかったが、そこそこ腹にたまるものであったし、何より温かい汁物が、冬の雨に打たれた二人には充分に満足できるものだった。

その証拠に、ルキドウはその汁物を食べることに集中し、食事中は一切言葉を発していない。

少年が三杯おかわりをしたところで、修一郎の作った水団もどきはなくなった。

居間に置かれた卓袱台のような、円形のローテーブルに向かい合って座っている二人は、修一郎が新たに淹れ直した茶を飲んでいる。これは、修一郎やソーンリヴが職場で飲んでいる、一般的な茶だ。

「それで、ルキドウ君。

明日からは、どうするつもりなんですか？」

コップの茶を一口啜って、テーブルに置きながら修一郎が尋ねる。少年が着ていた服の汚れ具合や、修一郎から財布を掏り取るうと

した手口から、この街に来てからまともな生活をしていたとは思えない。それ以前もどうだか怪しい。

だが、修一郎は今も過去を根掘り葉掘り訊くより、これから目を向けることを選んだ。

こちらから解答を用意するつもりはない。

決めるのは少年自身であるべきだ。

「……………」

虎人族の少年は、両手をコップに添え、中の茶に視線を落として
いる。

その姿は、必死に考えているようであり、途方に暮れているよう
でもあった。

時刻は既に大鐘四つの子鐘四つ（午後十時）を過ぎており、一段
と冷え込んできている。

この部屋にはストーブのような暖房器具はなく、ソファーや椅子
のような家具もない。

床に縦横2メートルほどの正方形の敷物を敷いて、そこに直に座
っているだけだ。

修一郎は立ち上がると、再び寝室のクローゼットへ向かった。

そこから、同じような色合いの木綿製の長袖開襟シャツを二着引
っ張り出すと、居間に戻って、一着を少年に手渡す。

「冷えてきましたからね。これでも羽織っていてください」

そう言って、自分もシャツに袖を通す。

ルキドウも素直に着たようだが、なにぶん修一郎の体に合わせた
サイズの服である。

下のシャツも開襟シャツも、腕の部分が長すぎて、袖を何重にも
捲っているのだが、それでもかなり余る始末で、少年の指先は袖の

中に隠れていた。

「……………」

外から聞こえてくる雨音は、一向に弱まることなく、少なくとも明け方までは降り続くと思われた。

修一郎はルキドウの言葉を待ち、ルキドウは未だ答えを出せていない。

少年の金色の瞳は伏目がちにコップを見つめたままだ。

「……………オレは」

暫くしてから、漸く少年が口を開く。

「オレは、何もしない……………」

「何もしないとはどういう意味です？」

虎人族の少年の言葉に、眉を少しだけ動かして、修一郎が問い返す。

俯いていたルキドウは、やにわに顔を上げて修一郎を睨んだ。

「今までと変わらないってことだよ！」

この街で何日か過ごして、危なくなったら他所の街にでも行く。そうやって生きて行くだけだ！」

予想していた台詞に、修一郎は深いため息を吐いた。

「それで捕まって罰を受けるわけですか……………」。

最悪、片腕を失って、この国を追放されますよ？」

「ハン！そうになったらオレの運はその程度だったってことだろ」

自嘲気味に笑うルキドウの姿と、自分がこの世界に来た直後の姿が重なる。

あの頃の自分はこんな表情をしていたのか、と苦笑を浮かべそうになるのを抑え、修一郎は呆れた表情を作る。

「まあ、自棄にならずにもう一度じっくりと考えてください。

明日の朝まで、考える時間は充分ありますからね」

空になった自分のコップを台所まで持って行き、居間に戻ると告げる。

「では、そろそろ寝ましようか。明日は仕事なんです。

今日は色々と疲れましたから、早く寝ないと」

その言葉に、一瞬体を強張らせたルキドウだったが、すぐに挑戦的な笑みを浮かべる。

「お前が寝ている間に、オレが逃げ出さないように縛りでもするかい？」

それが虚勢であると分かっている修一郎は、笑いながら寝室へ向かう。

「ついでに金目の物を盗んで行くかも知れないぜ！？」

相手にされていないと感じたルキドウは、さらに修一郎を煽るように声を上げた。

だが、寝室へ片足を入れた状態で、居間へと体を向けた修一郎の表情は変わらない。

「出て行くなら、引き止めたりはしませんよ。」

それにこの家に金目の物なんて殆どありません。
財布くらいですね」

「い、いいのかよ！」

この服も！このコップも！あの鍋も！皿も！全部持って行っ
ちまうぞ！」

「服は着古したものですし、他もがらくたみたいなものです。
全て売り払ったところで、一日分の食費にもなりませんよ」

この人間族の男は頭がおかしいのか、それとも余程のお人よしの
のか、はたまた世間慣れしていない田舎者なのか。

判断がつかない虎人族の少年は、混乱しつつも犯行を予告して
みたのだが、それすら軽くあしらわれてしまった。

「さあ、寝室はこっちです。うちで一晩過ごすつもりなら、入っ
てください」

修一郎が借りている長屋は、玄関、便所、居間、寝室、それぞ
れが扉で仕切られているだけで、廊下はない。

台所にいたっては、居間の床から一段低くなっているだけで、
扉すらなかった。

風呂は、それ自体がこの世界に存在せず、体の汚れや垢を落と
したいなら、水か湯で濡らしたタオルで体を拭くか、水浴びする
か、大きなタライに湯を張り湯浴みするか、サウナに入るか、
である。

寝室の扉は、先ほどから修一郎が何度か行き来しているので、開

けられたままだ。

「……なんでそっちに行かないといけないんだ」

体と表情と声を硬くして、警戒の色を露にしたルキドウに、当たり前のような口調で修一郎が答える。

「何故って、ベッドが寝室にあるからですよ」

「ベッドで寝るのか！」

「そうですね？生憎、ベッドは一つしかありませんからね」

「オレに、一緒に“寝る”と言いつもりなんだな！？」

修一郎とルキドウの会話は、その言葉の意味する内容が食い違っていた。

修一郎は、単純に一つのベッドで二人が眠るという意味で言っていたのだが、ルキドウは修一郎を“そういう趣味”の奴だと思いつみ、その相手に自分を選ぶのかという意味で言っている。

スリを働こうとした自分を、態々介抱し、着替えさせ、食事まで与えたのは、何か裏があるに違いないと思っていたのだ。

無論、修一郎に“そういう趣味”はない。

「当たり前でしょう。」

こんな寒い夜に、大人である私がぬくぬくとベッドで眠って、子供の君を床に寝かせるなんて非常識な真似はできませんよ。

かと言って、ここは私の家ですから、主の私が床で寝るのもおかしい話です。

だったら、一緒に寝るしかないじゃないですか。

第一、来客用の布団など家にはありませんね」

やっぱりコイツはどこかおかしい。

修一郎の言わんとすることを理解して、安堵しつつも、ルキドゥはそう思った。

眠っている間に殺されるかも知れないとは思えないのだろうか。

ルキドゥが子供とはいえ、無防備に寝ている人間族の成人男性を殺すくらいはできる。

台所に行けばナイフくらいあるだろう、少なくとも包丁はあった。だが、差し当たっては大人しくしていよう、と心に決めると、ルキドゥは寝室に向かうべく立ち上がった。

腹がふくれたことと、体が温まったことで、少年に眠気が訪れており、さらに、久々にまともな寝床で眠ることが出来るという誘惑が、虎人族の少年の警戒心を簡単に打ち砕いてしまったのだ。

立ち上がると、着替えた短パンが膝下あたりまで届いているのに気付いて、ルキドゥは微妙な表情になる。

人間族の大人で、しかも長身の修一郎の丈に合わせたサイズであるため、仕方がないのだが、これでは少し短いだけのズボンに見える。

「まあ、いいや」

修一郎に聞こえないように小さく呟くと、ルキドゥは寝室へと入っていった。

清潔なシーツに、ふわふわとは言えないまでも柔らかかな布団、頭が半分くらい埋まってしまいそうな枕。

昨日までは、硬い石畳の上か、どこかの家の納屋といった場所で

寝ていたルキドウにとって、修一郎のベッドは天国とも言えた。

「お前、本当は金持ちなんじゃないか？」

隣で横になっている、修一郎の体に触れないようにしながら、ルキドウは思ったことを口にした。

「なんで、そう思うんです？」

布団の中で、修一郎が僅かに動く。

返ってきた声は、静かで、そして優しくかった。

「……何となく」

あまりにベッドの寝心地がいいから、とは言えず、言葉を濁す。

「見てのとおりですよ」

「分かんねえよ」

既に寝室の明かりは消されて、部屋には闇の幕が下ろされていた。日付が変わったことを知らせる、市庁舎の大鐘一つがつい先ほど鳴ったばかりだ。

兩足は少しだけ弱まったように思える。

「普通、ですよ。」

普通に働いて、普通にお金を稼いで、普通に食べていける、その程度です」

「……………」

それは、自分の両親が生きていた頃と同じなのだろうか。

父が猟で仕留めた獲物を持ち帰り、母と自分がそんな父を笑顔で出迎える、そんな昔。

三人で暮らしていた頃は、それがルキドゥにとっての“普通”だった。

ルキドゥの父は腕のいい猟師だった。と思う。

まだ外の世界を良く知らないルキドゥには、父が基準だったから。母も、父のことを誇らしげに語っていた記憶がある。お父さんはこの辺りで一番の猟師なんだから、と。

そんな父が、猟の最中に命を落とした。

教えてくれたのは、家に何度か来たことのある、近所の猟師仲間だった。

狩りの最中に、魔獣に襲われたらしい。

普段であれば、一人で狩りを行っている父だったが、その日は二人で狩りをしていた。

それが、この猟師仲間だった。

父の腕であれば、大抵の魔獣なら退けることができたが、運悪く仲間が魔獣によって怪我を負った。

五匹で群れを成していた魔獣から、仲間を逃がすために、父が困になったとのことだった。

父の働きで、その仲間はなんとか集落まで辿り着いて事情を説明し、周囲の者に父の救助を頼んだ。

集落の者が、二人が魔獣に襲われた場所に行ってみると、五匹の魔獣の死骸と、木の根元で座るように息絶えた父の体があったと聞いている。

すまない、とその猟師仲間は何度も母に謝っていた。

母は、何か言っていたように思う。何を言っていたのかは覚えていない。

それからは母とルキドゥ、二人で暮らしていくことになった。

猟師仲間は、傷が癒えてない体で、度々家にやって来ては、二人のことを気にかけてくれた。

でも、その猟師仲間も、魔獣に襲われた際の傷が原因で死んでしまった。

そうして、ルキドウの家を訪れる者は、殆ど居なくなった。

集落の長が、時たま顔を現しては、二言三言、母と言葉を交わして帰っていただけだった。

二人の生活は、父が生きていた頃に比べ、苦しかったが、それでも母はルキドウに笑顔を向けてくれた。

お父さんの分まで、頑張って生きていきましょう。そんなことを言っていた気がする。

だが、その言葉は母自身によって裏切られた。

ルキドウの父が死んで、三年が経ったある朝、目を覚ますと母の姿がなかった。

集落の者に訊いても、誰も母の行方を知らなかった。

ルキドウは、一人になった。

それから後のことは、思い出したくない。

「なあ、お前、家族とか居ないのか？」

そう言っつて、修一郎を伺うと、人間族の男性は静かな寝息を立てていた。

財布を掏ろうとした自分よりも先に寝るとは。この男には警戒心というものはないのだろうか。

「……やっぱり、おかしな奴だ」

昔のことを考えていたせいか、眠気の靄が少しだけ晴れていたが、虎人族の少年はそのまま眠ることにした。

修一郎の背中に、軽く触れるように体の位置をずらしたルキドウ

は、目を瞑る。

暫くすると、小さな寝息が聞こえてきた。

その横で寝ている修一郎の口は、少しだけ微笑んでいるように見えた。

翌朝、ルキドウが目覚めると、隣に寝ているはずの修一郎の姿がなかった。

その瞬間、母が居なくなつた朝が思い出され、自分でもよく分からない焦燥感に駆られて、慌てて飛び起きると、少年は居間へ向かつた。

「おはようございます。」

雨も上がって、今日はいい天気になりそうですよ」

台所に立っていた修一郎が、居間へ駆け込んできたルキドウに向き直り、柔らかい笑顔を浮かべる。

台所からは、いい匂いが漂ってきており、彼が朝食の支度をしていたことが分かる。

「早朝からやっている露店で、適当に買って来たんです。」

簡単なものしかありませんが、朝食にしましょう。」

顔を洗ってきたらどうですか」

焼きたてのパンが盛られた皿と、ハーブティーの入ったポットを持って、修一郎がテーブルへ歩いてきた。

あれ？獣人族には朝顔を洗う習慣はないんですっけ？と首を傾

げて、寢室の扉を背に立ち尽くしているルキドウに目を遣る。

「あ……。うん……」

思わず、素の口調で返してしまったことにも気付かず、虎人族の少年は修一郎を見つめている。

「そうでしたか。じゃあ座ってください。
スープを持ってきます」

修一郎の言葉に素直に従いながらも、ルキドウの視線は彼の姿を追っていた。

修一郎の言葉通り、パンと野菜のスープという、実に簡単な朝食を済ませると、部屋の主である人間族の男が表情を真剣なものにして、少年に問うた。

「では、改めて訊きましょう。」

君は、今日からどうするつもりなんですか？」

「……………」

昨夜と同じ質問に、やはりすぐさま答えることが出来ない。

朝になったら、訊かれることは分かっていたのに、これからどうすればいいのか分からない。

昨日、少年が捨て鉢に答えたように、今までと同じ荒んだ生活を送ればいいのか、それとも別の生き方があるのか。

「……………」

「申し訳ないのですが、私はこれから仕事に行かなければなりません。」

出来れば、そろそろ君の答えを聞かせてくれませんか」

事実、もうあまり時間がないのだろう、目の前に座る人間族の男は、先ほどよりも落ち着きなく体を小さく揺らしている。

その姿は尿意を我慢しているようにも見えたが、本人としては、それなりに深刻な事態であった。

これから着替えて、店まで走ってなんとか間に合うかどうかという状況なのだ。

「……………」

「も？」

ルキドウが発した一言を、繰り返す修一郎。

「もう一日、ここに居させてください……………」

消え入るような声で発せられた言葉に、修一郎は満足げな笑顔を浮かべると、立ち上がった。

「分かりました。」

それでは、もう一日猶予をあげましょう」

着替えのため、寝室に向かいながら修一郎は続ける。

「すみませんが、お昼は今朝のパンが残っていますので、それで我

慢してください。

夕食は、ちゃんと作りますから。

あと、ずっとその服というわけにもいかないでしょうから、服も適当に買ってきますね」

思いも寄らない修一郎の台詞に、驚きの声を上げるルキドウ。

「その代わりに、君は、昨日まで着ていた服を洗濯しておいてください。

貫頭衣はもう使い物にならないくらいぼろぼろでしたから、下の服だけでも。

いいですね？」

何故、そこまでしてくれるのか分からないルキドウだったが、その考えを推し量るうにも、修一郎は寝室で着替えている最中であり、表情を見ることも出来なかった。

慌しく修一郎が出掛けていくと、居間にはルキドウだけが残された。

出掛ける間際、修一郎は「火は使わないでくださいね」とだけ言い残していった。

本来であれば、玄関の扉には、専用の『施錠』の魔法が掛けられた鍵で、戸締りをするはずであるのに、修一郎は、何もせずに出て行ったことにルキドウは気付いていた。

今なら、部屋中の物を持ち出して逃げることも出来る。

昨日までの彼なら、間違いなくそうしていただろう。

だが、今はそれが躊躇われた。理由は自分でもよく分からない。

とりあえず、ルキドウは行動することにした。

立ち上がって、気持ちを切り替えるように、だぶだぶの袖を捲ると、台所の隅に置いてある洗濯桶に歩いていく。

「ゆっくり考えよつと。」

「一日猶予ができたんだし」

そう言った虎人族の少年の目は、活き活きとした光を湛えていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5792x/>

街の事務員の日常

2011年10月19日02時06分発行